

特 19

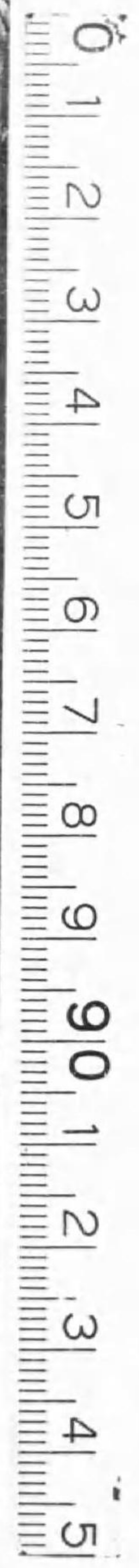
474

銀兵衛著

今様
梅
ごよみ

國民書院發行

1-9.17
正
本



始



344-310

特219
474



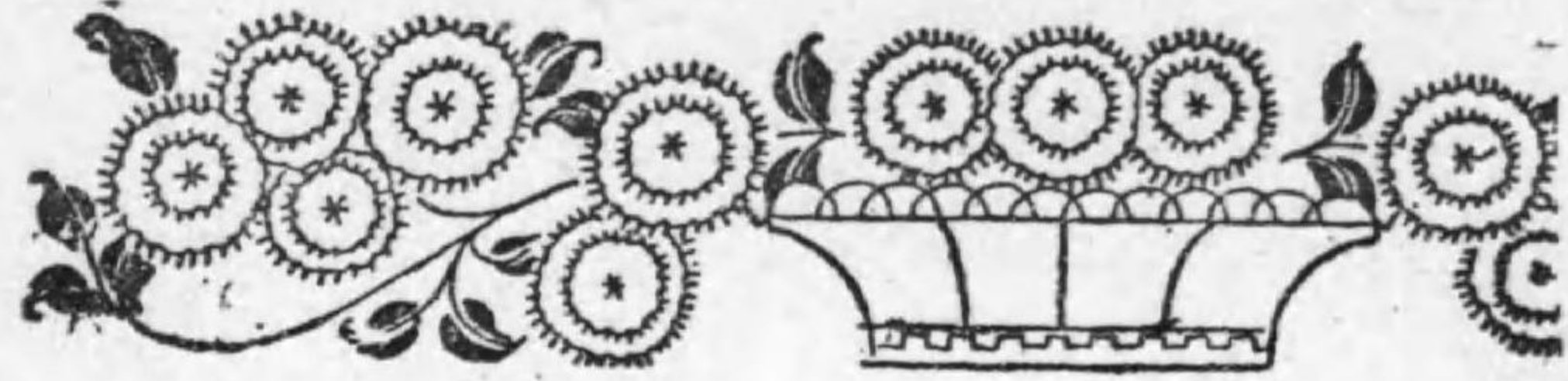
はしがき

滑稽の中に嘲笑が有り、嘲笑の裏に同情を含む現代青年の一面を描いたのが本書である、嘘偽の眞理と耽溺の眞相を根本として、酒に酔ひ女に囚るゝ青年の心理状態が、世間の目から見るとやうな、一言にして稱ふ遊蕩兒でない事を表白したのも本書である、偽らなければ生きる事の出来ない現代生活の壓迫と、病的反抗心との争闘が生んだ自暴自棄が、如何なる結果を來すかといふ一種の教訓を含むた事實物語が本書の價値である。

銀兵衛識

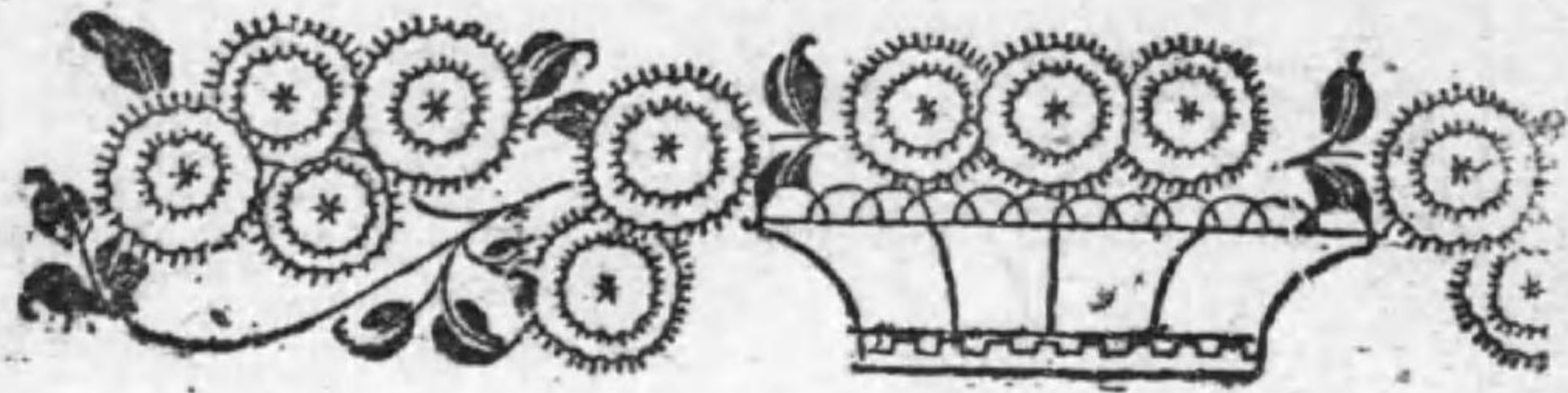


018-448



目次

□ 九、 百 年 目	□ 八、 酒、 酒、 酒	□ 七、 泣 面 に 蜂	□ 六、 暗い 辯士 部屋	□ 五、 天 下 の 色 男	□ 四、 沈 思 黙 考	□ 三、 お 雪 の 顔	□ 二、 酒 場 か ら 廓 へ	□ 一、 怨 敵 退 散
.....
一六	一五	一三	一一	八	六	四	三	一



今様
梅
とよみ

銀兵衛著

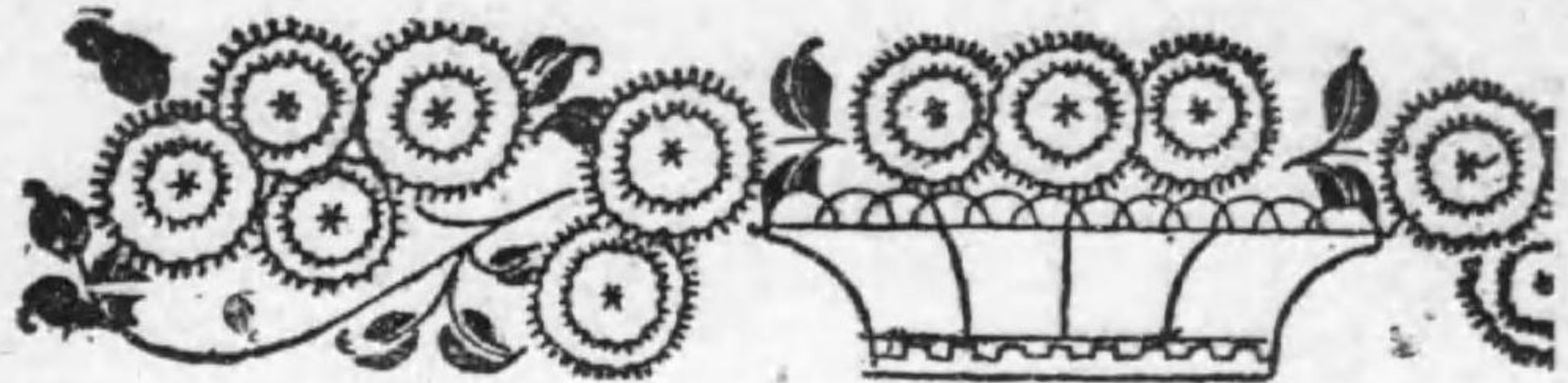
一、怨敵退散

世の中を三分五厘の與太つき振り、揃ひも揃つた暢氣者の二人は、一人を近藤と謂ひ一人を井村と稱ぶ、その別名も振つたもので『象の目』と人から笑はれて彌が上にも眼を細くする近藤「振られ男」と評判されて年が年中女性に嫌はれてゐると云ふ井村だから、その對照が面白い。早い話が肉鍋を食ひに行つても、肝腎かなめの食慾よりも、傍に待つて



呉れた仲居の態度、ごんな風に自分を遇し自分を観てゐるかといふ事が先づ一番に氣になる煩さい奴、その僻見す知らずの仲居に五十錢を奮發しながら「此の書生さん、些と見得を張つたわね」位にしか思はれないのが、井村の特色でもあり、また死金を費ふ原因である、けれども當人は何時も澄した顔で「ナーニ女性といふものは此方の出やう一つで、何うにでもなるものさ」と、ニヤリ笑ふのだから、傍に付添ふ近藤も堪つたものぢやない、それで強度の近眼なのだ。

以前は相當資産家の次男、今では天下放浪の嘘吐きと謂へば「彼奴か……面白い奴だ」と愛嬌者の一人として、場合に依つては珍重がられる近藤やよひ、春が過ぎたといふので自分勝手に付けた彌生の文字を妙に氣取つて平假名の名刺までも拵へて「私は恁う云ふ者ですが……」



と誰の前へでも億面のない突出しやう、その時に細い目が一層細くなるといふので「失禮ですが貴郎が近藤さんですか」と殊更に尋ねて見る者も有るさうだ。併し感心な事には滅多に怒顔を見せない男である。

煙草屋の二階で四疊半と六疊の二間、月に四圓の家賃が彼等の住居で酒も飲めば惣歸も言ひ、考へもすれば笑ひもする。天下泰平の氣樂境！近藤は父親には勘當されてゐながら、母親の心盡して今でも月々三十圓の金は送つて来る。それを宜いことにして寝たり起きたり喋つたりの氣儘放題、それに喰付いてゐて離れない井村は、中學を出ると暫時小學校の教員をしてゐたが、無味乾燥だと贅澤風を吹せて、現今では月給二十五圓の腰辨或る商店の外交員となつて、人は人自分は自分の得手勝手を或る程度まで實行しつゝ、浮世の風波を横目で睨む井村捨吉、二人の金



を合すと五十五圓、それで安物の辨當飯を食つてゐるのだから類作はな
い。随つて暢氣な事も言つてゐられる譯である——と之れは本篇の主人
公たる兩人の説明であるが、前説明が濟めば切つて落す淺黄幕……。
舞臺は兩人の住む二階で、福島の往來を見下すやうに出來た、粗末な
がらの欄干がある。頃は彌生の櫻時、その陽氣さに引代へて、腕拱いて
思案に沈む近藤やよひ。

「サア困つた事になつて來たぞ……何れは慙うなるだらうと、此方でも
倍はしてゐたが、眞逆に慙うも早く縁が切れようとは思はなかつた……
……三十圓と云へば僅かなやうでも、さて儲けようと思へば骨が折れる
その三十圓が今月限りで、來月から手に入らないとして見れば……」
やよひの顔には花曇りならぬ五月雨模様を押迫つて來た。彼は視線を

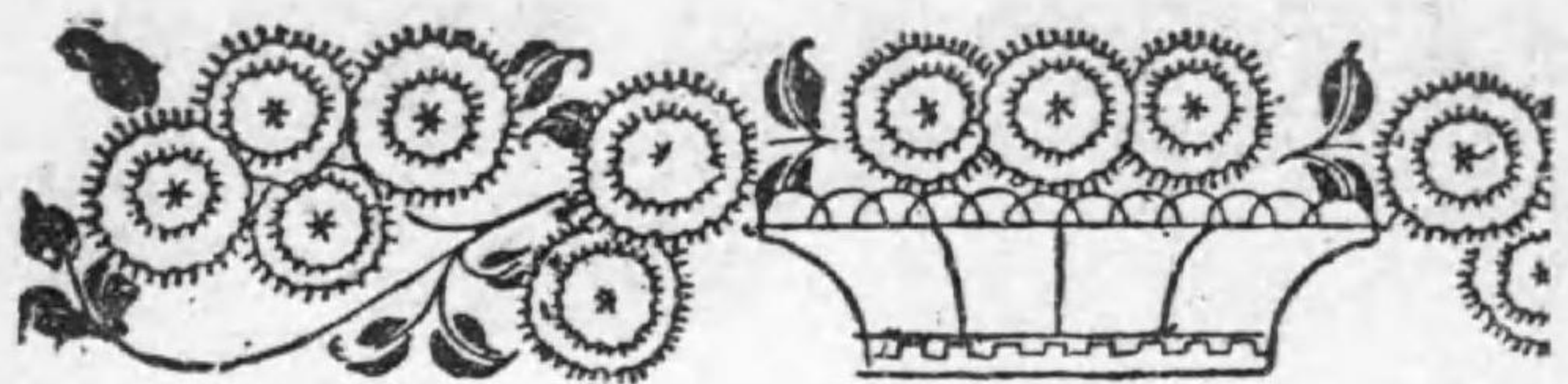


札の上へ落すと、置かれた雑誌や何か、大口開けて笑つてゐるやうな
心持がした。

「慙うして暢氣な生活を續けてゐるのも、要之お母さんが親父に内密で
金を送つて來て呉れるからだ……その金を送らないなど、謂はれた日に
は、差詰め自分は何うして宜いか分らない。従來親の脛を噛つて暮して
來た自分には、金を費ふことは知つてゐても儲る術を知らないのだ……
お母さんは常日頃自分を誰よりも可愛いと言つてゐた。極道者だけに一
入可愛いとまで近隣の人達に話してゐた。その誰よりも可愛がつて呉れ
るお母さんが、何故また慙態に情ない手紙を寄越たのだらう……」
と彼は呟きながら、傍に投付けて置いた母の手紙を、恨めしさうに又
手に取上げる。



六
『……此の手紙で見ると、母の手から出る三十圓の金の事が、到頭親父の知るところとなつたらしい。あの親父と來たら、石橋でも叩いて通るといふ堅造なんだから、そんな事を知つたら黙つては居まい……勘當した極道息子に金など送つてやる必要はないと、あの禿頭に湯氣を立て、怒つたに相違ない。必と然うだ……それが爲めにお母さんが、詮方なしに此手紙を書いたのだらう。無理もないことだが……』
無理もないで済まして居られない自分の破目、さて來月から如何しよ
うかと、細い目を糸のやうにして、又あらためての腕組
其處へ唐紙を開けて歸つて來た相棒の井村、何處かで酒を飲んだものと見えて、愛嬌の無い顔を赤く染めてゐた。
『何をボンヤリ考へ込んでゐるんだい。今日あたり家に閉籠つてゐるな』



七
んぞは、日頃の君にも似合ないね。一体どうしたと言ふんだ』
と井村は、近藤の思案顔を覗込んで、
『それに腕組なんぞして何を考へてゐるんだ……ハ、ア解つたよ。昨夜行つた酒場の女の事でも想つてゐるんだね。君は女の顔さへ見ると直に心を動かすから不可いよ。酒場の女なんざ何うでも宜いさ。奴等は雀見たやうにベチャクチャ喋つて、膠のやうな態度を見せるのが商賣なんだから、奴等の言つた事や爲た事を氣に掛けてゐた日にや、全くうるさくつて詮方がない。それよりもだね、家になんぞ居ないで、何處かへ散歩に出掛けるんだ。櫻の花は咲いてゐるし若い女は歩いてゐるしさ、自然と氣も晴れて來るよ』
『うるさいね君は……僕には心配が有るんだよ』



近藤は追除るやうに言つて、又も思案の淵に沈む。

八

「心配なんか爲て見た處で何になるものか、心配の種は氣から播くつて言ふから、氣分を最も愉快に持つんだね。酒に酔つて憂を忘れるやうに所謂彌生の氣分に酔ふんだよ。君が絶えず憧憬れてゐる彌生の空が、君の來るのを待つてゐるぢやないか……」

「それどころぢや無いんだよ……君は酔つてゐるね。何處かで飲んで來たんだね？」

「あ、御覽の通り聊か酩酊の有様さ。なにね道で偶然友人に逢つたところが、其奴の懷中が暖かだつたから、御馳走になつた譯さ……日外君と一緒に行つた二見亭へ飛込んだ處が、前にゐた仲居のお雪が居たもんだから、不知話がはすんで來て、ちよいと寄るつもりが二時間あまりの長



座となつたのさ……元來あのお雪つて女は多情多感だらうと思ふね。眼容から談話振りから考へても、誘ふれあらばの氣分が頗る漂つてゐるよ」と井村は、近藤の心も知らないでますくの上機嫌、酔つてる間が極樂だと言はぬばかりに、

「しかし時によると、客に對して冷淡な素振を見せるが、もしあの缺點さへなくば、仲居としては先づ完全な方だねえ」
「うるさいから彼方へ行つて呉れ……僕はそんな事を聞いちや居られな

いんだ」
と近藤は、忌々しさうに顔をしかめる。

「何だか變だね、毎時の君ならすぐに調子を合せて呉れるんだが……」
初めて氣が付いた井村は、不審さうに言ふ。

九



「僕は將に浮沈の瀬戸際に佇つてゐるんだ。冗談どころの騒ぎぢやない」

「一體どうしたと言ふんだね？」

「……これを見れば直ぐに解るよ」

言ひながら、近藤は母からの手紙を井村に渡す。

「誰から来た手紙なんだい」

と一通り目をとほしてから、流石に目を圓くして、

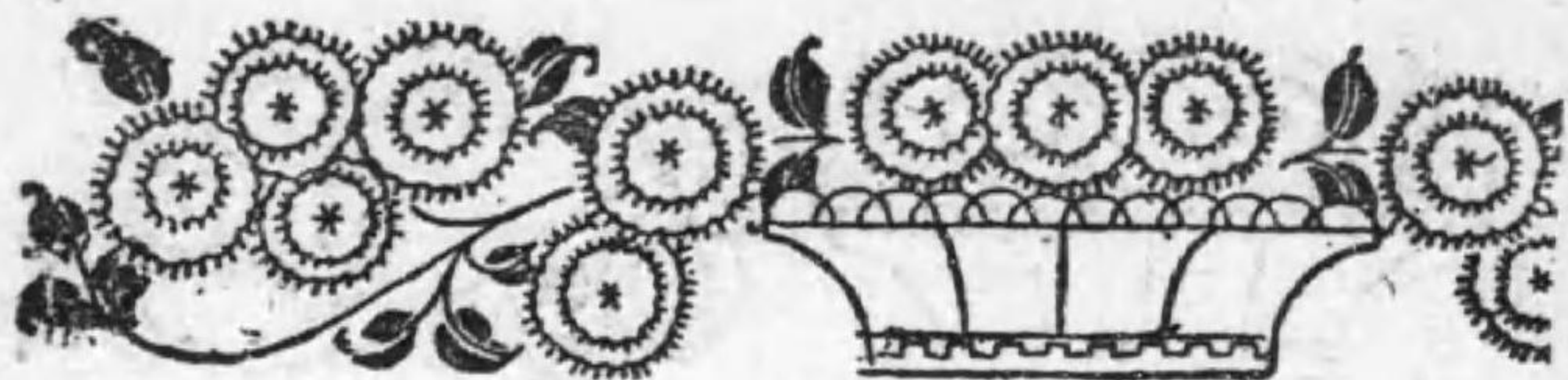
「オヤ、これは君のお母さんから、今後送金しないと云ふ……」

「だから僕は、腕組をして考へてゐるんだ」

「……………」

「今の場合送金を断られたら、僕はどうして食つて行けると思ふんだい」

「然うだね……」



「僕には如何して宜いか、全く思案がつかない」

「此奴は少し困つたね」

と井村も急に悄氣返る。

「今まで恚うして暢氣に暮して来たゞけに、今後の生活が思ひやられる

よ……親父の考へでは、何處までも僕を困らせてやらうといふ腹に定つ

てゐる。僕が食へなくなつて苦しむ姿を、因果應報だと嘲らうとしてゐ

るんだ！」

近藤は堤が切れて今にも洪水が押寄せて来る時のやうな、恐ろしい不

安の念に囚はれた。

「ハツハ、、、君が然うして悄氣返つてゐる處を見ると、まるで曾我

延家劇のやうだ」



と井村は急に氣を取直して、快活に言ふ。

「……………」

近藤は何が面白くて笑ふんだと、ちよいと横目で睨付けたが、無言でまた考へに沈んだ。

「オイ君、世の中つてもものは兎角自分の思つてる通りにア行かないものさ、今日悦樂あれば明日悲哀が来る、と云つた風に、泣いたり笑つたりするのが浮世の常だよ。泣いて暮すも一年ならば、笑つて暮すも一年なんだから、送金を斷れたからつてそんなに心配する事も無いよ」

「だつて、差詰め何うして宜いか分らないもの……逆も平氣ぢや居られない」

「縫合だね、今日になつて急に心配して見た處で、從來の氣儘の罪が消



えるといふ譯ぢやなし、一躍して財産家になる夢も見られないのだから心配なんか爲るだけが野暮だよ。どうせ成るやうにしか成らないんだから、行ける處まで行つて見るのさ。その道中には峠もあれば谷も有るさ」

「君は酒に酔つてるから、元氣なことも言つてられるが、少しは僕の身にもなつて考へて見給へ。暢氣な事も言つてられア爲ない」

「なるほど、僕は酒に酔つてゐるさ。酔つてゐるから太平樂を喋るだらうが、しかし氣々思つたところで何うなるものか、天から金が降つて来る筈もないし、美人が惚れて呉れるものでもないさ……近頃君は馬鹿に意氣地が無なつたぢやないか。少しの事に惰意て見たり愚痴を言つたり……………」

井村は飽迄も人を馬鹿にしたやうな口吻で、浮世の風は何處に吹くと



言つたやう。尙も言葉が続けて、

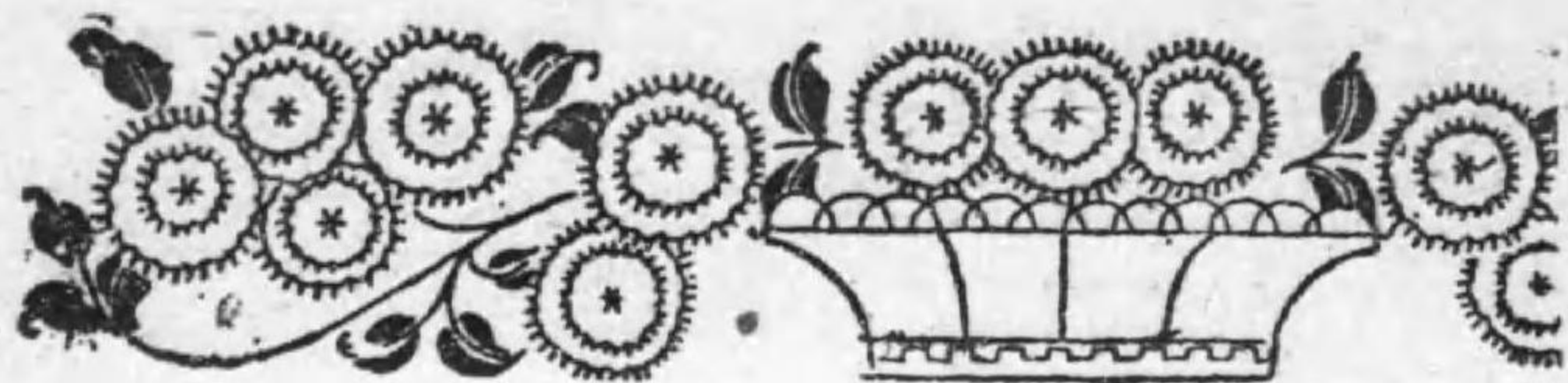
「だがね近藤君、冗談はさて置いて、今となつて悲觀したつて始らないよ。憊うなるのも謂は、自業自得さ。親の家を飛出した君の罪さ」

「その罪の空恐ろしさを、泌々感じてゐるんだ」

と近藤は、聲の調子まで沈めて言ふ。

「日頃君は何と言つてゐたんだ、親の家は少しも有難くない、昔氣質の壓迫を受けながら安樂な暮しを爲るよりも、與太つて行く暢氣な生活が幾ら宜いか知れない、と大に達觀してゐたぢやないか……それほど両親から見捨てられるのが悲しいのなら、何故親の家へ歸つて両手を突いて謝罪をしないんだ。謝罪をして家に歸ればそれで宜いちやないかね」

「今更そんな事が出来るものか……然うする位なら、何も獨りで苦しむ



はしない。僕はどんな事が有らうとも、再び親の家へ歸らうとは思はないよ」

「無論然うだらう。其處まで堅い決心をしてゐるのなら尙更のこと、女々しく悲觀なぞしてゐる場合ぢやないぢやないか、何處までも反抗的に暢氣生活を實行しなければ、君としての男が立たないよ」

「うむ……」

と言つたきりで、近藤は又も物思ひに沈む。

「莫迦に考へ込んだものだね」

と耶か呆れ氣味に言つたが、

「好矣、暫く待つてゐたまへ。直ぐに僕が好い薬を買つて來てやるから」

何を思つたのか、井村は大きく頷きながら立上つて、元氣よく二階を



降りて行つた。

「オイ井村君、薬なんか要らないよ」

と叫び止めて見たが、その甲斐もなく、引返しはしなかつた。そして暫らくすると歸つて来て、

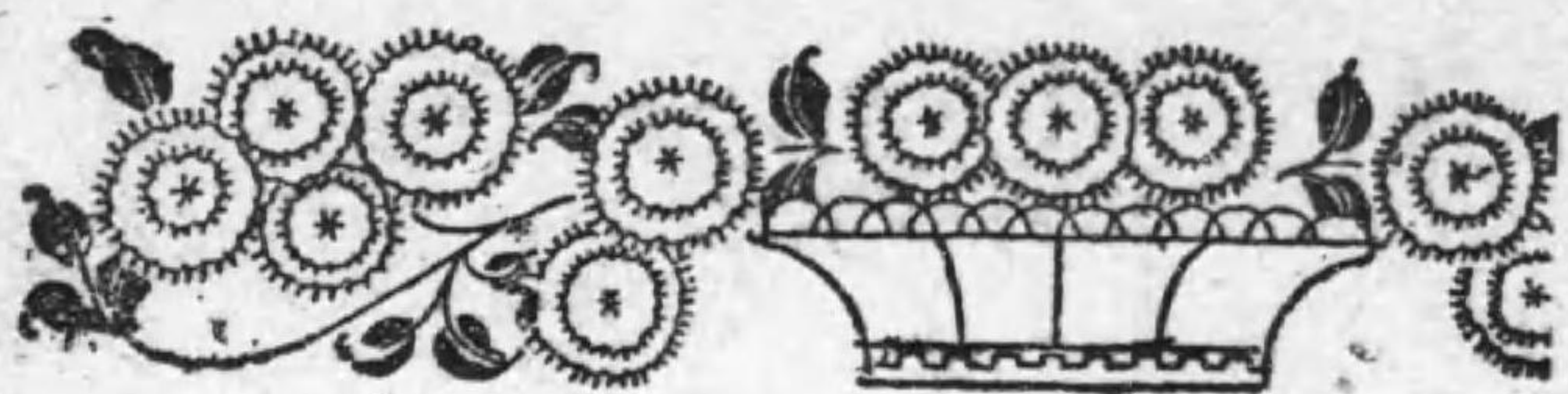
「今日は一つ、君のふさぎの蟲を退治する爲めに、好い物を注文して来たよ」

と溢い顔に微笑を含ませた。

「好い物つて何を……」

近藤も釣込まれて訊く。

「まあ宜いよ、天機漏す可らずだから、今暫らく待つてゐたまへ」
憊う云つてゐる處へ、一味徒黨の長髪先生が遊びにやつて来た。



「しばらく無沙汰をして濟なかつた」

と長髪先生、小倉袴で座に就いた。

「餘り來ないものだから、何うかしたのかと思つてゐたよ。しかしよく來たね」

と井村は、時に取つての味方が一人殖えたといふ顔付。

「實は京都の方へ行つてゐたものだから……」

言ひながら、石のやうになつて動かない近藤を眺めて、

「近藤君はごうしたんだ、何か考へ込んでゐるやうだね」

「うむ、大問題が起つたと言つて悲觀してゐるんだが、ナニ今に持つて來る薬を服せたら直ぐに機嫌は好くなるよ」

「さう、それならば宜いが、何時になく考込んで居るものだから、僕



は大に氣にしたよ……オイ近藤君
と肩をボンと叩く。

「あ、飯田君か……」

と近藤は、初めて氣がついたやうに言ふ。

「飯田君かもないもんだよ。知らぬ顔の半兵衛はちと酷いよ……しかし何か考へ込んでるね」

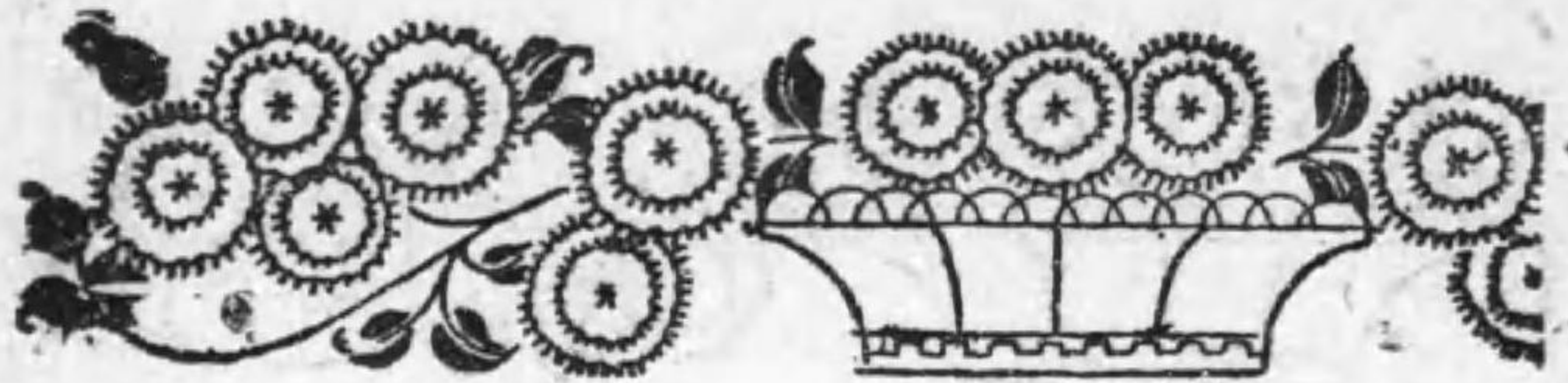
「僕の身を取つて一大事出来で……」

「また肘鐵砲でも喰つたと言ふのかい」

「そんな暢氣なのぢやないよ。浮沈の瀬戸際に陥つてゐるのさ」

「浮沈の瀬戸際に陥つたといふと……」

鸚鵡返しに言つた長髪先生、これは又意外といふ眼容で、平手で長髪



をちよいと撫上る。

「家から金が来なくなると言つて、馬鹿に心配してゐるんだよ」と横合から井村が、首を突出して口を入れた。

「それは確かに問題だが、しかし心配するのも考へ物だよ」と茶化し半分に、例の皮肉屋を發揮する。

「實は今僕が肉鍋と酒を注文して來たのだから、三人で一つ大に飲まうぢやないか」

井村は長髪先生に向つて、さも得意げに。

「其奴は何より御馳走だ、飲んだ上で陽氣に散歩でも爲るかね」

「その目的が近藤君の怨敵退散さ有るんだから、その心算で居て呉れなければ不可いよ」



「オット合點だ。怨敵退散の言葉が奇抜だね」

110

二、酒場から廊へ

間もなく肉屋の出前持が注文の品を持って来た。

「サア、これからが僕等の世界だよ」

と井村が階下から七輪に火を入れて持つて来るやら、長髪先生が鍋の中の世話をするやら、少時は準備に忙しかつたが、やがて鍋から白い湯気が立騰つて、グツグツ煮え出して来ると、食欲をそゝる肉の匂ひが三人の鼻を衝いた。

「近藤君、今日は君をお客様として僕から一献差上げよう」

と井村は漂經に言つて、酒盃を差す。

「有難いが、今日は餘り欲しくもない」

と近藤は、不機嫌な顔をそむける。

「有難いが欲しくないは些と失敬だよ。憚うして井村君が態々注文をして来たのだから、その好意を感謝して飲みたまへ」

「さうだね、ちや……」

近藤が進まないやうな手を出すと、長髪先生が早速銚子を握つて

「酒でも飲んで氣を晴したまへ。その間に興味も湧いて来るよ」

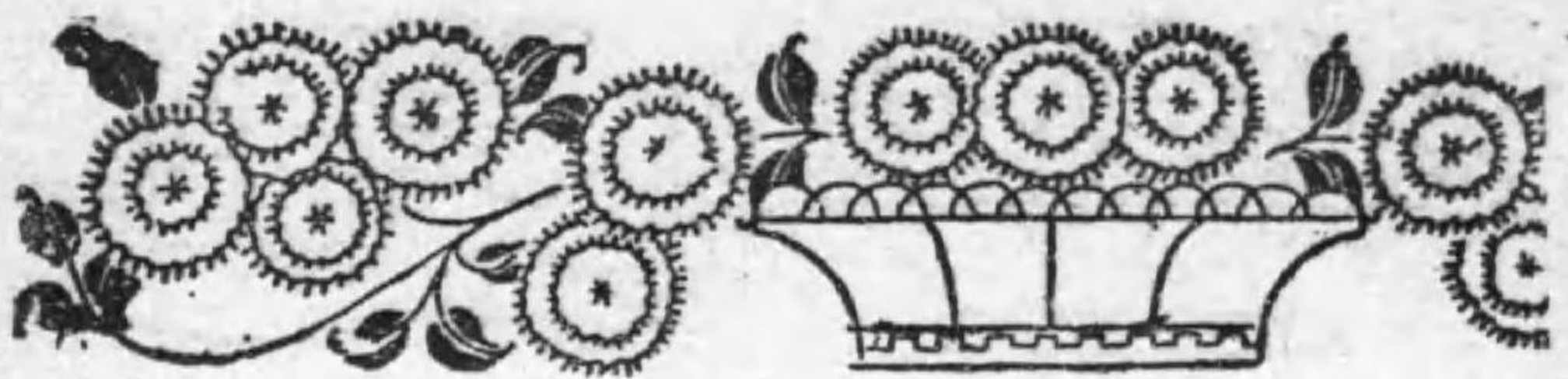
と元氣になみ〜と注ぐ。

「少して宜いよ」

言ひながら、手にした盃を口へ持つて行つて、グツと一息に飲んだ。

「さうして二三杯も續けて飲むんだ、少しは氣分も變るだらう……」

111





と井村が満足さうな顔をする。

「然うだとも、酒を飲んで太平樂でも言つてゐれア譯はないさ。ふさぎの蟲を放逐しなきや駄目だよ。さ尤う一杯やりたまへ」

助才のない長髪先生は、井村とうまく調子を合せて、近藤に盃をつまかせた。立續けに三四杯も飲まされた近藤は、平常なく酒が腸に泌むのをおぼえながら、

「うつかりすると、今日の酒は頭へ來るかも知れないよ。僕は尤う飲むまい」

「馬鹿な事を言つちや不可い、折角君に飲まさうと思つて取寄せた酒を君に飲まさずに置いて何うなるものか……後の介抱は僕等二人がするから、満らない事を氣にしないでウンと飲みたまへ」



「酔が廻つて來て、家にジツとして居られなくなつたら、何處へなりと一緒に行くよ」

井村の言葉尻について、長髪先生が尖つた頤をしゃくつた。それを眺めた近藤やよひ、

「君達は愉快さうな顔をしてゐるね。そんなに嬉しいだらうか……」

「とは御挨拶だね。酒を飲んで不愉快がる奴が有るかい。ねえ長髪先生」

「長髪先生とは恐入つたね、人間きがあまり宜くないぢやないか」

「ところが近藤君の『象の目』よりは増だよ。誰やらな僕を『振られ男』と云つたさうだが、随分酷い奴だよ。僕等の事を思つたら、君の綽名は氣が利いてるぢやないか」

「元來僕を『象の目』だなんて言つたのは、誰から始まつたつね。そん



なに僕の目は細いか知らん」

今迄沈黙主義を採つてゐた近藤が、微酔の顔を明るくした。聲の調子も浮いて来た。

「細いも細くないも、動物園へでも出したいくらゐだよ。別して酔つた時の目つたら無いよ」

井村は酒を飲ました効空しからずで、近藤が酔つた顔を見せ出したので、やつと愁眉を開いたといふ心持で、自分も甘さうに飲み出した。

「世の中がすつかり春めいて来ると、僕等の心が堪らなく動揺して来るぢやないか。人といふ人皆が花に憧憬れてゐるやうに見えて、同じ人間と生れて、家の内に煤つちやゐられないやうな……その僻物質の缺乏を歎じるやうな……」



哲學者氣取りの長髪先生が、ぼつ／＼管を巻きかける。それを面白がつてゐる井村は、

「それが十八番の序幕だね。まだ中狂言もあれば所作事も有るのだから見物、ぢやない聴物だよ」

言はれて一層得意になる長髪先生

「女性の美よりも麗はしい自然の花を眺めて、思はず恍惚とするのが純な憧憬で、我々のやうに酒に酔つて自惚を云つたりするのは、つまり溺れた者が板切にでも縋らうとするやうに、敗殘に近い苦悶を忘れやうとする手段に過ぎないんだ。だから酔つてゐながら我を忘れるといふ事がない。酔つて自墮落になつてゐる半面には、必と自問自答の心苦しさが伴つてゐるんだ」

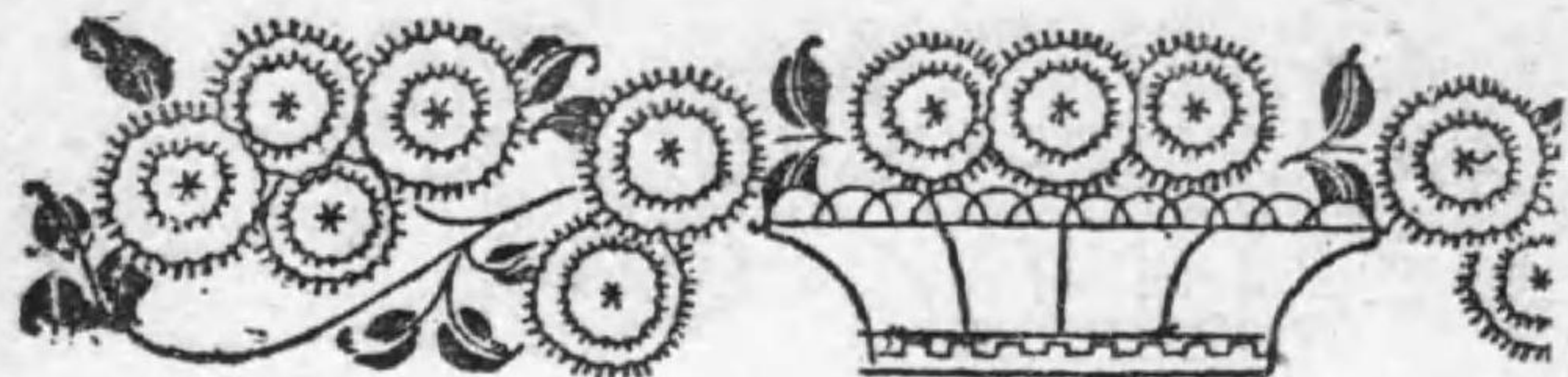


と長髪先生は、酔に乗じて理窟めいた事を言ひ出した。
『また始つたよ。これからの煩さくがつて来るんだ。長髪先生の管は長
いからね』

井村が面白半分にからかふと、それを真に受けた長髪先生、聊か癪に
さわつたと云ふ風に、

『管を巻くとは酷いぢやないか。僕は自分の感想を言つてゐるので、決
して管なんか言つてるんぢやない。管か管でないか聴いてゐりや解るよ』
『ハツハ、、、長髪先生御立腹の体だね。何も然うむきにならなかつ
たつて宜いやね』

四杯五杯と盃の数が重つてゆくにつれ、近藤の顔にも酔の色がポツと
浮んで、思はず冗談の一つも言ひ出しすやうになつた。



『ツラ見ろ、近藤にも一本やられたぢやないか、ハツハ、、、』
井村はさも心地よげに笑ふ。一つは近藤の氣を浮立たせる事が出来た
ので……。

『僕は酔つて来た、何となく頭腦の中がせづかゆくなつて来たよ……妙
に腰のあたりを何物かで持上げられるやうな氣もする』

近藤にはやよひの氣分が沸いて来たのである。酔ふと直ぐに家を飛出
したくなる心持が、今までの思案も何處へやら追出したやうに。

『それが君の病氣だよ。つい先刻までは思案投首であつた君が、酔つて
来ると直ぐそれだ。尤も陽氣になるのだから宜いやうなもの、今日ま
での重ねくの失策も、みなその彌生氣分が原因なんだから、君自身で
注意をしまへ』



と長髪先生は、近藤に向つて意見がましく言ふ。すると、井村が苦い顔をして、

二八

「今日は近藤君の思ひがけない心配事を忘れさせようと思つて、それで飲んだ酒なんだからね。君もそのつもりで平素の皮肉は止して貰ひたい」

「僕は皮肉を言つてるんぢやない、注意したまでの事だよ」

「その注意も場合に依るものさ。折角陽氣になつて来てゐる者の、氣を逆つては、僕の好意が何の役にも立たなくなる」

「……………」

さすがに長髪先生も、口を噤まなければならぬ。聊か不機嫌で横を向いた。

「君達はまた無益いことで、言ひ合つてゐるぢや無いか……元來僕の心



を慰めようと思つての、好意から出た事はよく解つてゐるよ。だから僕は大に感謝してゐる、氣分を陽氣にして酬ひなければならぬと考へてゐるんだ。どうせ飲んだ酒だもの酔ふに定つてゐる。酔へばお互に言ひ度い事を喋るのに不思議はなさ。今飯田君の言つた言葉は有難く僕は聞いたよ、僕自身ですら折にふれて然う思ふんだからね」

と近藤は、二人に對して濟まねやうな顔をした。

「然う言はれると僕が辛くなつて来るね。殊更に今日言はなくても宜い事を言つて……然し言つて了つた事は取返しがつかないから、悪からず許して呉れ給へ。以後は氣を注げるからね」

唐變木でない長髪先生、尻を据えて御馳走にならうといふ腹もあつた「兎に角今日は最も愉快に飲まうぢやないか僕も嫌な事はすつかり忘れ

二九



「了ふからぬ」

人馴れてゐる近藤、兩人の顔を當分に見ながら。

「それが宜い、然うして今日半日を樂むんだね」

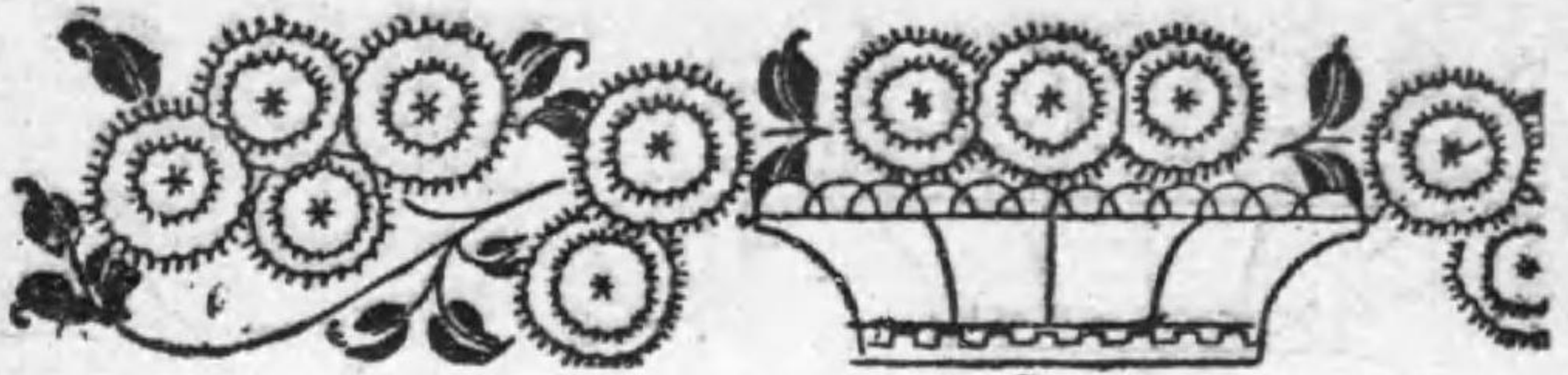
「大に飲んで大に語らうか……」

憚うして三人は飲んだり食つたりした。酒が足りないといふと云つて、長髪先生が酒屋へ行つて燻詰を買つて來た時には、階下の時計が四時を打つたのであつた。

「僕は急に昔の女の事が思はれ出して來たよ。尤う二三年も忘れてゐた女の事が」

何を思ひ出したのか、近藤は突然こんなことを云ひ出した。

「昔の女を思ひ出したつて……」



「戀人のことかね」

と兩人は異口同音に首を突出す。

「振られた女さ、それが……」

どや、早口に言つてから、

「別段美人といふでもないが、愛嬌があつて女らしい女だつたがね」

ちやうど詩人が瞑想に耽る時のやうに、細い目を閉ぢて、しばらく無言。

「罪ほろぼしに語り給へ、その振られ話を」

井村は興味ありげに、敷島に火を點けながら。

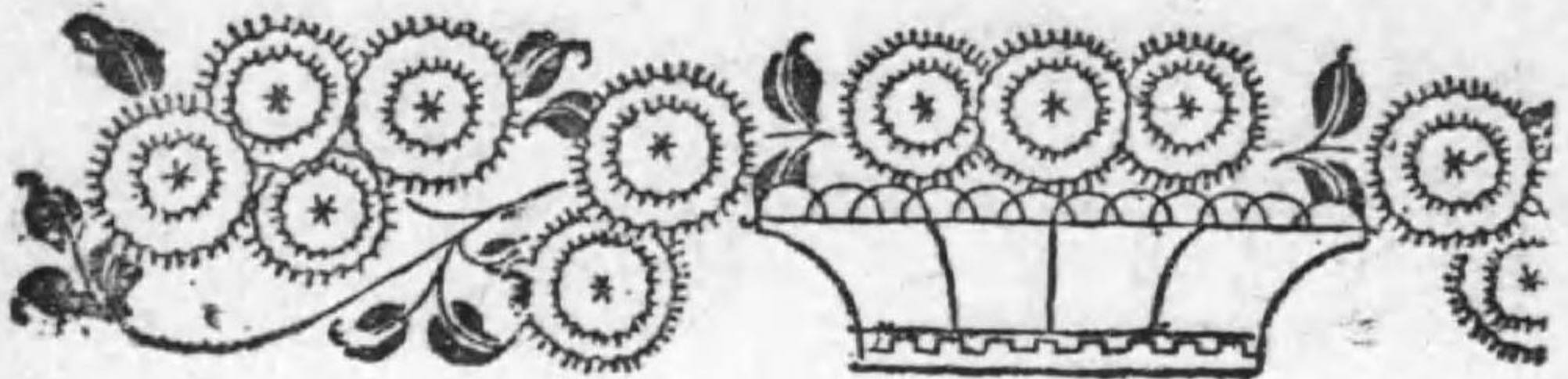
「然うだとも、それを聞きながら僕等は、残つた酒の肴にするよ」
長髪先生もなかく黙つちやゐない。



「僕は自分ながらに随分變古挺な人間だと思ふね。途方もない事を思ひ出すんだよ、ちよいとね。日外も死んだ友人と旅行をした時の事を想出して、それが又馬鹿に氣になつて、一晚中考へ込んだことが有るんだ尤も惚れられた女よりも振られた女の方が、深く印象されるものだけだ……小春といふ料理屋女のことだがね」

と長い胃頭をしてから、其時分のことを語り出したのである。

誰が見ても厭だとは思はない十人好きのする小春の、ニツコリ笑ふ口元と眼容が可愛いと言つて、甘い物に集う蟻のやうい若い男の中に交つて、もの、一週間といふものは殆ど夢我夢中、何とか巧い言葉で小春の心を動かしたいものだ、いろ／＼に考へた末に案じ出した妙案、ボンと膝を叩いて我ながら好い分別だと自惚れながら、折柄眞夏の住吉祭り



堺の夜市見物を口實に、いよく二人が手に手を握つて、楽しく語りながら行くといふ段取は出来上つた。

「恠うなると、さすがの僕も心中穩かならずでね、夜の更けて小春の身が自由になるのを待兼ねたよ」

「うむ……して甘く連出すことは出来たのだね」

「然うだ。彼れが尤う彼是一時頃だつたらう、一足先へ出た僕が、四橋で電車を待つてゐる顔で佇つてゐると、約束通り小春が小粋な浴衣掛けで僕の方へやつて来た」

「なるほど、これからが本舞台になるんだね。君の傍へやつて来た女は定めし嬌態を作つて媚のある言葉を云つたらう」

「ところが、此方の思つてゐたのとは、反對の事を云つたんだ」



「何と云つたい？」

「誠にお氣の毒ですが……と云ふぢやないか」

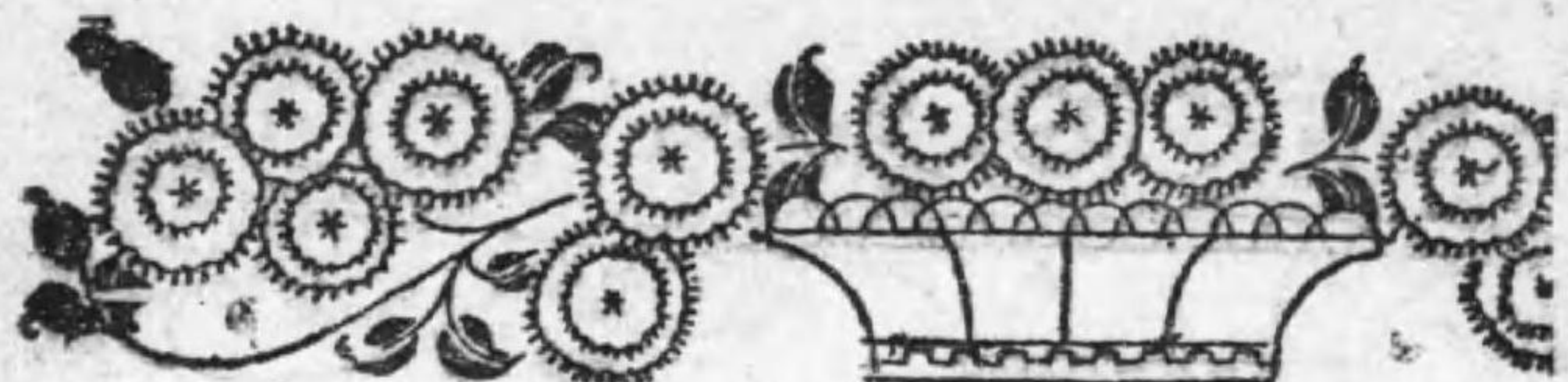
「うむ……」

「僕は意外な言葉を聞くと思つて、小春の顔を凝視してゐると、お供をさせて頂かうと楽しんでゐたのですけれど、都合が有つてお断りに参りましたのよ、つて平氣な顔で云ふんだ」

「それは怪しからん、言語同断だね」

「僕も癪にはさわつたけれど、努めて冷靜を装ひながら、ぢや擧行きは止すんですかと訊くと、いゝえ行くのは行くのですけれど、と慥うなんだ」

「頗る不得要領なんだね」



「加之女の態度は水のやうなもので、待つてゐた僕を邪魔物にしてゐるんだ……併し言ふだけの事は言はなければならぬから、何故僕と一緒に行くことは出来ないんです、と詰問すると、他にお約束した方が有りますので今夜のところは許して頂戴、と僕の返事も待たずにスタ〜歸つて行つたんだ」

「つまり色男になり損つた譯だね」

「僕も随分肘鐵も喰つてはゐるが、あんなにまで手酷くやられた事は無つたよ。それもだね、行けなくなつたと断られたのなら、まだ諦めもつくけれど、他の者と約束をしたからとは酷いぢやないか、人を待たせて置いた揚句だからね」

「それで君は如何したんだ。後日縁味の二つも言つてやつたかね」



「自惚れも強いかほりに又断念も早い僕だから、すつかり振られたものと観念して、それつ限り其家の敷居は跨がなかつた」

「すると、一週間の通ひ損て寸法だね」

と井村は笑を含んだ聲で、尙も言葉が続けた。

「近藤やよひが春に憧れて、溝へ陥落たといふ格好だね、ハツハ、」

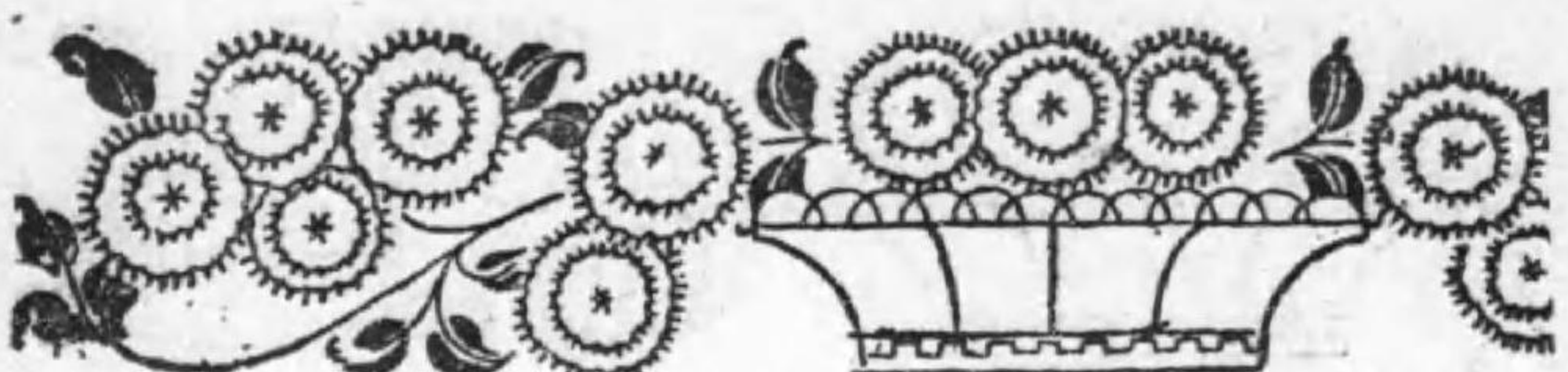
すると、先程から黙つて聞いてゐた長髪先生が袴の膝を乗出して、

「それに似通つた話が僕にもあるよ」

「ナニ、君にも同じやうな話が……」

と相も變らず、井村が合槌を打つ。

「僕の失敗したのは媚を賣る女ぢやなくて、田舎の女教員なんだ」



と酔つて眞赤な顔をした長髪先生、調子に乗つて喋り出したのである。「それが田舎には珍らしい色白の美人だつたものだから、随分と評判になつてゐた。ところが其頃僕は同じ學校で教師をしてゐたものだから、木石ならぬ心に何時とはなく、その女戀しさの温情が沸いて來たと思ひ給へ……其處へもつて來て僕が詩や歌を作るものだから、その女も他の教師達よりは、幾らか思想の人と云つたやうな念を抱いてゐたのさ。頃は花から青葉へ移つてゆく初夏で、若い者の心が譯もなく動搖ふとする時だつたから、或る機會を利用して、僕はその女に接近するやうになつた。そして先方でも滿更嫌でもなささうな素振りを見せてゐるものだから、或時思ひ切つて言ひ出した處が、それが存外理性の勝つた女で、何れ御返事をと体の宜い挨拶をして置きながら、間もなく僕の事を校長に



話したものだ。すると何うだろう、校長から僕に依頼免職をすゝめるぢやないか……後で聞いて見るとその校長と何かの關係が有つたらしかつたよ」

三八

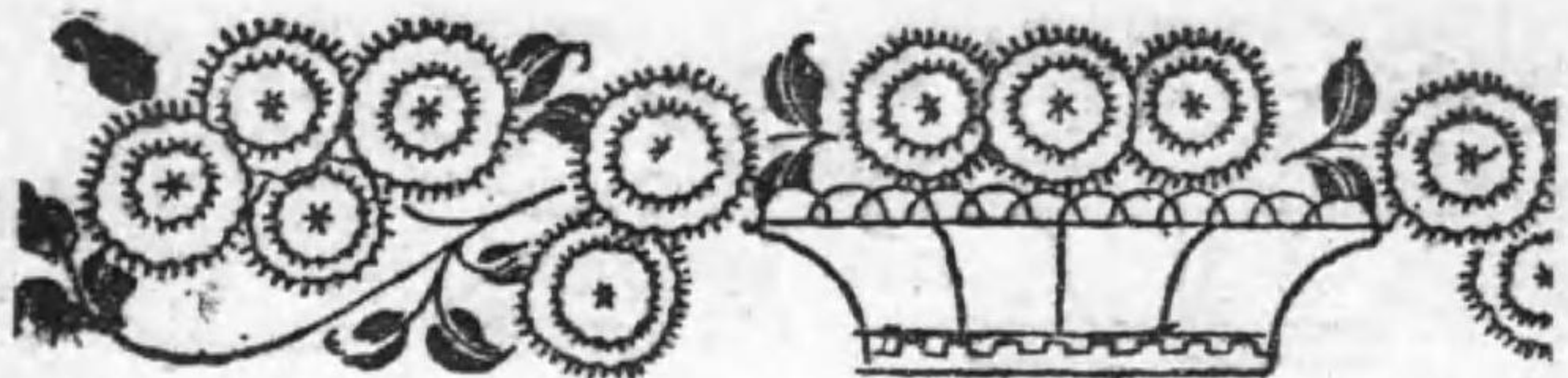
「で君はやはり教師をしてゐたのかね」

「イヤ直ぐに止しちやつたよ。辭職願を出したのだが、考へて見ると脊負投げを喰つたのさ」

語り終つた長髪先生、今更のやうに自分の馬鹿さ加減を、思ひ出して苦笑を漏した。

「いづれも同じ秋の夕暮かね。兎角我々は女から馬鹿にされ易いと思へるね」

井村は大悟徹底したやうな口吻で、散かつた物の取片付けを始めた。



「これから一つ、何處かへ出掛けて行つて見ちや何うだらう。追付け日も暮れるし……」

すつかり快い機嫌になつて了つた近藤は、矢も楯もたまらないやうに云ひ出した。

「宜からう。また酒場へでも出掛けて見ようか」

と井村は双手を舉げての賛成。

「また酒を飲むのかね……」

呆れたものだと言はぬばかりの顔付で、それでも不賛成ではないといふ物の言ひやうをした長髪先生、やをら腰を上げて手傳ひにかゝつた。

「それから今夜は島を覗いて見ようぢやないか。勘定全部を僕が負擔するよ」

三九



酔ふと前後の分別のなくなる近藤は、興に乗じて飛んでもない事を云つた。

四〇

三、お雪の顔

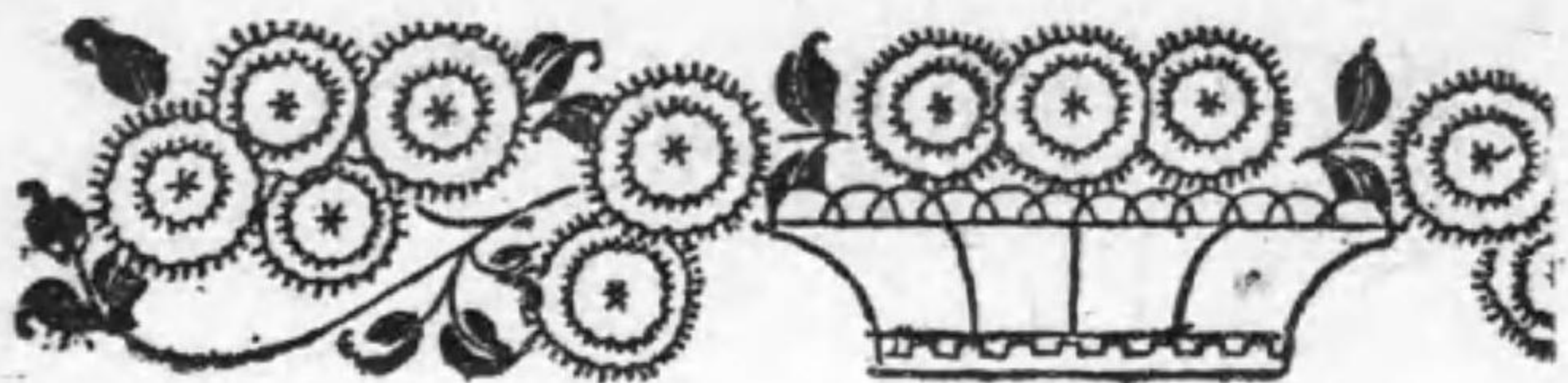
木綿紋附に小倉袴の長髪先生を先登に、眼鏡が無ければ道が歩けないといふ近眼の井村、ゾロリツとした近藤の三人は、電燈の點くのを待つて家を飛出した。

「酒場へ行くとして電車に乗らうかね」

世話役氣取りの井村が、ちよいと立止つて兩人に相談を持ちかける。

「此處から道頓堀まではちと遠すぎるからね」

と近藤は、ブラリ／＼歩いて見たいやうな、また煩いやうな心持で言



ふ。

「歩いてなんぞ行けるものか、無論電車に乗らなくちや……」

長髪先生歩かされて堪るものかといふ風に。

「ちや、電車に乗ることに爲よう」

間もなく浄正橋筋から電車に乗つた三人は、日本橋の北詰で電車を降りた。そして目的の酒場を指して道頓堀を歩いて行く。

「何時来て見ても、人がゾロ／＼歩いてゐるね」

近藤が感心したやうに云ふと、

「盛り場なもの、當然ぢやないか」

と長髪先生は肩をゆする。

「何となく誘はれて氣が浮立つね」



井村は何方つかすの事を云ひながら、劇場の繪看板などを見て居る。
「アラ、近藤さんに井村さん」
と酒場の女が聲掛けた。何時の間にか三人は、浪花座近くへ來てゐたのであつた。

「うむお藤さんか」

と近藤は女の傍へ歩み寄る。

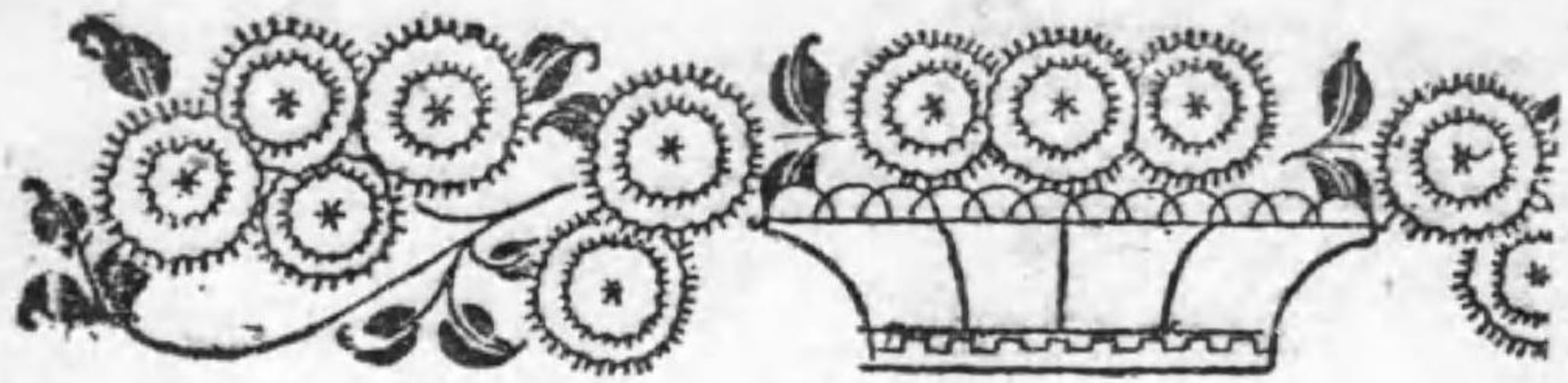
「何方へいらつしやるの、今夜は」

「三人伴でわざ／＼君許へやつて來たんだよ」

「さう、有難うございます。丁度今はお客様も少なくて宜いわ」

と表口に佇つてゐた女は、三人を酒場の内へ導いたのである。

「ウオツカを三つ持つて來て呉れ」



三人は川端に近い卓子を圍みながら、近藤が元氣よく命じた。

「お揃ひで何處かへ行つてらしたつたの、好い機嫌だわね」

と他の女が愛嬌を撒きに來た、

「珍らしく三人が落合つたものだから、ちよいと飲つて來たんだよ」

「でも、よく忘れずに來て下すつたわね」

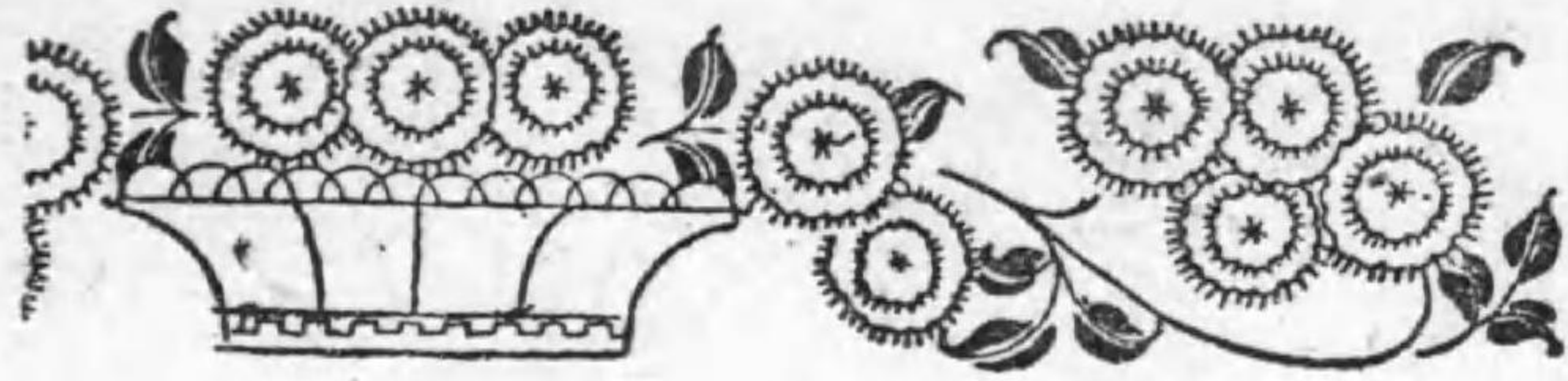
「忘れて堪るものか、君達の事を思ひ出さない日はない位なんだもの。

全くだよ」

今度は井村が笑談を云ひ初める。

「アラ、井村さんたらお口の巧い人、妾達は馬鹿ですから眞實にしますわ」

「眞實にされたら尙更結構だよ」



「まあ何と言つたら宜いでせうねえオ、ホ、ホ、」
花子といふ若い女が、井村の口に弄ばれてゐると、ウオツカの洋盃を
持つて来たお藤が、

「花ちゃん是从順いから駄目よ。ソラ先日の晩の蔭口でも言ふと宜いん
だわ」

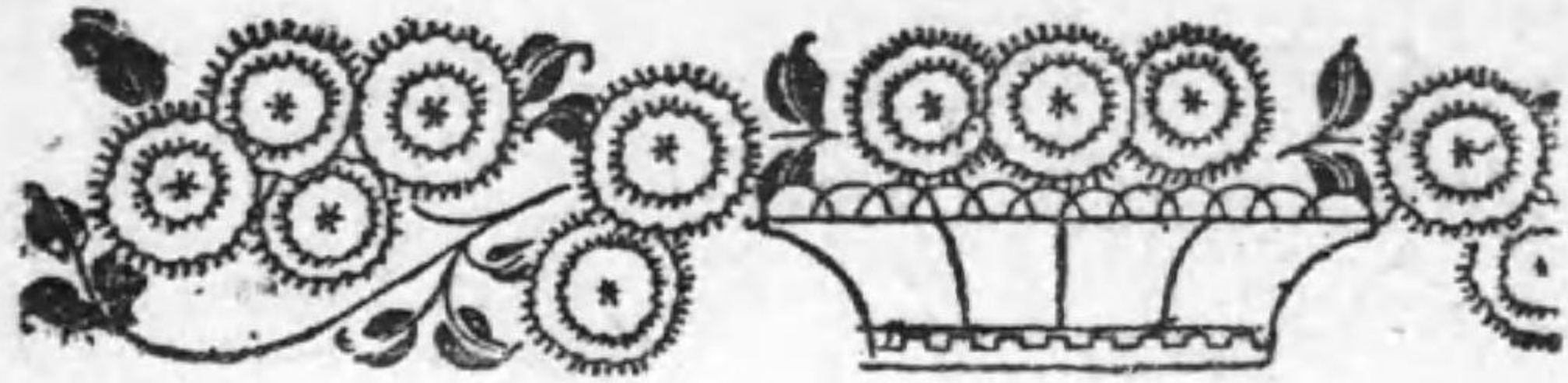
お藤は井村と近藤の顔を、意味ありげに眺める。

「誰から僕等の蔭口を利いたと見えるね、失敬な奴だ」

と井村はウオツカを口へ持つて行きながら。

「え、散々言つた揚句に、今度逢つたらウンと油を絞つてやるんだつて
云つてゐたわ」

お藤は笑顔のうちに針を含ませてゐる。



「油を絞るなんて穩かならん事だね」

先刻から形勢を見てゐた近藤が、井村の旗色を心配して横合から口を
入れた。

「それが井村さん一人ぢやないのよ。近藤さんも一緒だわ。妾達も思は
ず憤飯したのよ」

「オヤ、すると僕も同罪といふ格だね」

ニヤリと笑つて近藤は、例の細い目を一層細くした。それを眺めてオ
ホ、と二人の女は聲を立て、笑ふ。

「何か何だかサツリバ分らない。どんな蔭口かすつかり話して了つたら
如何だい」

と長髪先生が、はじめて口を出した。



「え、お話しても宜いんですけれど……」

「叱られたら大變ですわ」

二人の女は互に顔を見合せてゐる。

「僕等は決して怒つたりなんかしないから、有の儘を話して呉れ」

さすがに井村は心持が悪い、どんな陰口かそれが聞きたくてならなくなつた。

「ちや云ひますわ……ですけれど怒つちや嫌よ」

「好矣々々、どんな事が有つても怒りやしないから」

近藤も氣になつて、落着いては居られなかつた。

「あの井村さんと近藤さんとは、揃ひもそろつたデレ助さんですつて……」

「揃ひもそろつたデレ助とは？」

「それには慙うしだからといふ、實例か何か有るだらう」

「一人の女に二人が夢中になつて、そして二人共肘鐵砲を食つたのだつて、オホ、、、」

「あの堀江の一件かね」

「誰がそれを知つてゐたらう？」

井村の顔には意外の色が現はれて、近藤の顔は急に曇つて來た。

「オイ、今度はウ井スキーを持つて來て呉れ」

と井村はテレ隠しに慙う命じる。

「その藝妓の名前もチャンと知つてゐますわ」

お藤の言葉には嘲笑ひの氣分が籠つてゐる。大きな顔をしてゐても厭





目よと言はぬ許りに。

折柄、ドヤ〜と五六人の若い連中が入つて来たので、室内は急に騒々しくなつて来た。

「この位にして尤う出ようぢやないか」

グツとウ井スキーを叩つた近藤は、尻こそばゆさうに慙う云ふ。

「それが宜いよ。面白くもない」

と長髪先生は頗る不機嫌な顔で腰を上げる。

「ぢや、何處かで又飲み直さうか……」

井村も失望しながら、立ち上つた。

「僕は今夜ほど不愉快なことはない、あんな給仕女風情に馬鹿にされたいと思ふとね」



往來へ出ると、長髪先生が憤慨する。

「實に怪しからん女だ。僕等の顔を台無しにしちやつた」

滅多に怒つた事のない近藤までが、不快さうにベツと唾を吐いた。

「奴等は客の心持なんぞ些ども解つちや居ないんだよ。思つた事を其儘に喋つ了ふんだから始末に終へない……折角飲んだ洋酒も甘くはなかつた」

三人の顔には忌々しさが溢れてゐた。覺えて居る何時か復讐をしてやるからと言つた、氣分が何れの胸にも漲つてゐた。

「さて此から何處へ行くんだ、此儘歸るのも馬鹿らしいやうな氣がするぢやないか」

井村は近藤に相談をかけるやうに言ふ。



「今夜のやうな晩は何處へ行つたつて面白くはないよ。必と又今のやうな不快な目に逢ふに定つてゐるよ」

と長髪先生は、氣乗りの爲ないと云ふ風に。

「そんな事が有るものか、今度は必と好い處へ連れて行くよ、ナニ僕等にだつて快く遊ばせて呉れる家が二軒や三軒は有るんだから」

近藤は酔つた歩調で、元氣よく云ふ。

「恚うなつたら何處かで發展するんだね。さうでも爲なきや逆も納りがつかない」

近現眼の井村が、四邊をキヨロ／＼見廻しながら、うまく調子を合せ

「發展するなんて偉さうな事を言つても、肝腎のエムが有るかね」



と長髪先生が冷かに云ふ。

「金のことなんか心配しなくつても宜いさ。明日の朝都合すると云へば快く遊ばせるよ」

「どうだかね……」

自信のありさうな近藤の言葉を、傍から井村が打消してかゝる。

「うまく行くか行かないか、僕に従いて来たまへ」

戎橋の處へ來ると、近藤は蘆邊踊の軒提燈美しい南の方へ行

く。

「蘆邊踊でも見ようと云ふのかね」

長髪先生相も變らず落着いてゐる。

「見るだけが能ぢやないからね」



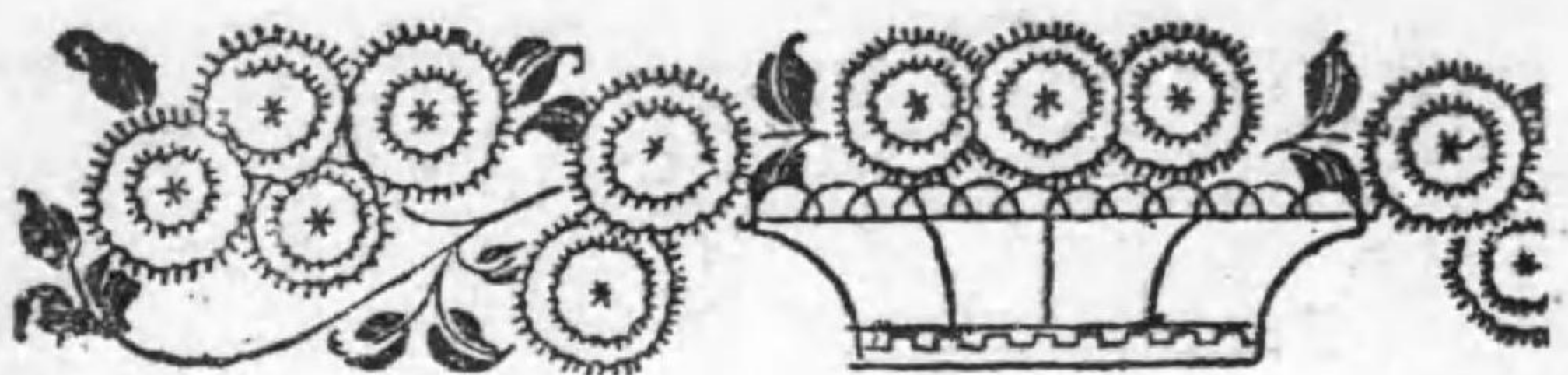
「今夜の處はすべて、近藤君に任せようぢやないか」
誰よりも懐中都合が宜さうなので、井村は長髪先生と顔を見合せて憊
う云つた。

「大した事は出来ないが、今夜遊ぶ位のことは大丈夫だから、二人とも
安心をしてゐたまへ」

憊うは云つたものゝ、近藤の蛾螻口には五圓足らずしか入つてはゐな
い。

「然う聞くと聊か心丈夫になつたが、また馬鹿な目に逢ふんぢやない
かと思つたよ」

「飯田君と異つて、僕は君を信頼はしてゐたんだが、酒場であんな目に
逢つたものだからね」



眞實近藤が奢りさうなので、長髪も近眼もすつかり態度を變へて了つ
た。

「君達はお世辞が巧くなつたね」

近藤は心の中では少からぬ不安を感じながらも、與太の本性を發揮し
て、口先で快活に云ふ。

三人は間もなく味ふことの出来る歡樂を夢見ながら、暫らく歩いてゐ
たが、ズラリと一現茶屋が軒を並べた通りまで來ると、近藤が先に立つ
て西の方へ曲つて行つた。去年までは所謂モシ／＼なる言葉が、狭い往
來の兩側から姦しく浴せられてゐたが、警察から注意があつてから、今
日では濫りに客を呼べないので、妙に沈んだやうな心持ちがした。けれ
ども、仲居が表口に顔を出して、遠慮しながら低い聲でよんでゐる家も



有る。

「ソラ彼處に歌の家つて街燈が出てゐるだらう、彼家は以前僕がよく来た家だから、僕が先に入つてうまく談判をして来るよ」

近藤は立止つて指ざした。

「ちや、僕等は此處邊で待つてゐれや宜いだね」

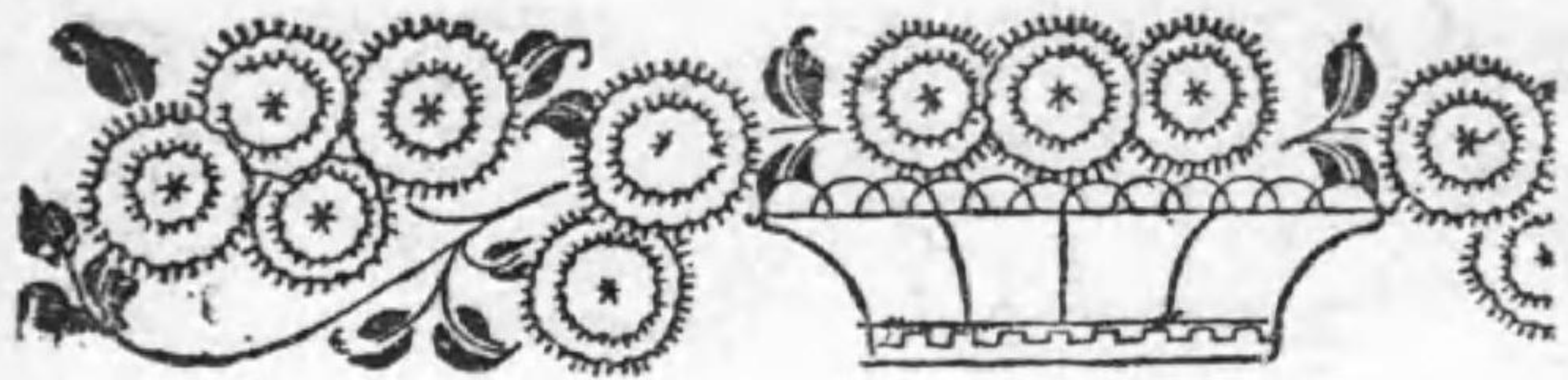
と井村は頷きながら、萬事呑込んだといふ顔。

「さうだ、ほんの少時の間だから待つてゐて呉れ給へ。すぐに僕がよぶからね」

「好矣、ちやなるべく早く頼むよ」

と長髪先生、語尾に力を入れて云ふ。

二人を待たせて置いた近藤は、歌の家の表口まで来ると、仲居のお光



が都合よく居て呉れ、ば宜いがと、さう思ひながら闕を跨いだ。すると

「おいでやす、何卒お二階へ」

と見知らぬ仲居が出て来た。

「お光さんは……」

これでは少し都合が悪いと思つた近藤は、庭に佇つたまゝで恚う訊く

「お光さん？」

と仲居は問返したが、すぐに思當つたらしく、

「あの以前に此家に居はつたお光さんだつか……」

「然う、丸ぼちやのお光さんだよ」

「あの人はお正月前に他處へ行きました、その後へ妾が來のですよつて」



「うむ左様か、それでは……」

折角當にして来た仲居が居ないとして見ると、無理な頼みも云へないと悄氣ながら。

「それぢや、また……」

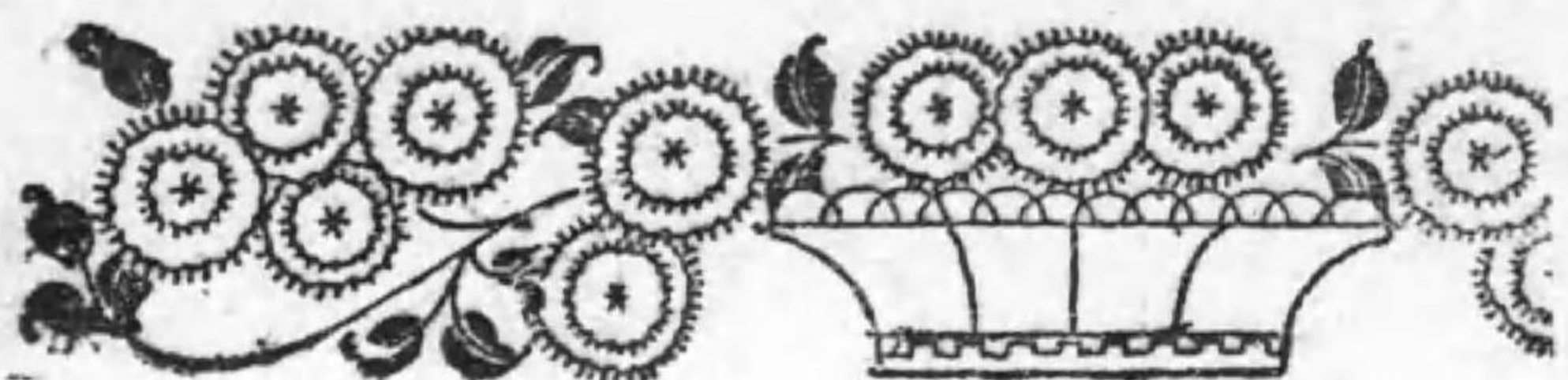
と戸外へ出ようとする。その袂を周章で握つた仲居は、

「お光さんが居はらんかて遊べまんがな、さお二階へ行きまへう。今やつたら別嬪さんが出来まつせ。サこんな處へ行てんと二階へお登り」

と是が非でも二階へ登げようとする仲居の手を、近藤は力まかせに振拂つて、

「僕一人ぢやないんだ、連を叫んで来るよ」

「恠う云つたかと思ふと、矢庭に戸外へ飛出して走り出した。



「うまく行つたかね」

駈けて来た近藤の姿を見ると、井村が氣懸りらしく尋ねた。すると近藤は、

「駄目だ、兎に角彼方へ行かう」

と元来た方へ引返さうとした。

「こんな事だらうと思つてゐたんだ」

と長髪先生の御機嫌が悪い。

「肝腎のお光といふ仲居が居ないものだからね……正月前から居なくなつたのださうだ」

「何だつまらない。わざ／＼来て馬鹿を見たよ」

「井村もガツカリして泣く。」



「彼家が駄目だとして見ると、尤う一軒有るから其處へ行かうぢやないか、今度は大丈夫だと思ふがね」

「その大丈夫も浮雲いものだ。僕は尤う下宿へ歸るよ。その方が幾等宜いか知れない」

長髪先生大の不復を唱へ出した。

「さう悲觀したもんぢやないよ。どうせ今から歸つた處で、讀書一つ出来るんぢやなし、三人でブラ〜歩く氣になつて見給へ」

「そんな氣になれないから、僕は歸ると云ひ出したんだよ。今度が三度目だからね……君達二人は行つて來たまへ。僕はこれで失敬する」

と返事も待たずに、早や歩き出す。

「困つた男だね……」

と井村は長髪先生を引止めやうかとも思つたが、稽へて見ると今度行く家も頼ないものだ、印袴纏の素見ぢやあるまいし……と感じたので、

「ぢや、僕も尤う歸らう……三人で來て置きながら、二人残るのも餘り好い氣持ぢやないからね……近藤君、今夜は君も諦めて歸つちやどうだね。また出直して來りや宜いぢやないか」

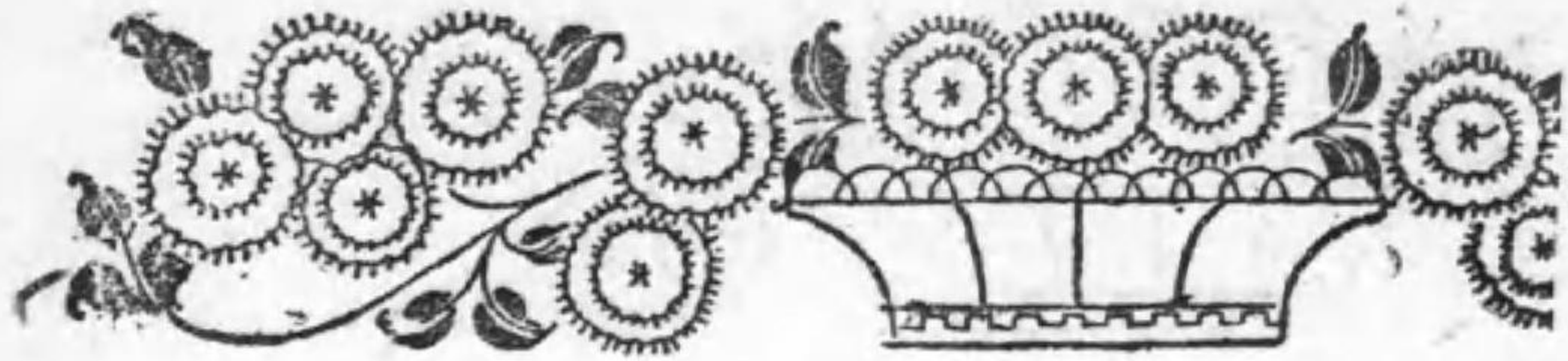
「君までが歸ると云ふんだね……」

近藤は恨めしさうに井村の顔を見る。

「歸るも歸らないも、恁うなつちや詮方がないよ」

「だから、今一軒行つて見ようと云つてるぢやないか、僕だつて一人で行きたかないんだ」

「ぢや、三人が揃つて歸らうぢやないか」





「……………」
近藤は返辞をしなかつた。此儘歸れるものかといふ酔つた上の執着心が胸に有る。

「返辞のない處を見ると、近藤君は歸り度くないんだよ……兎に角僕は失敬する」

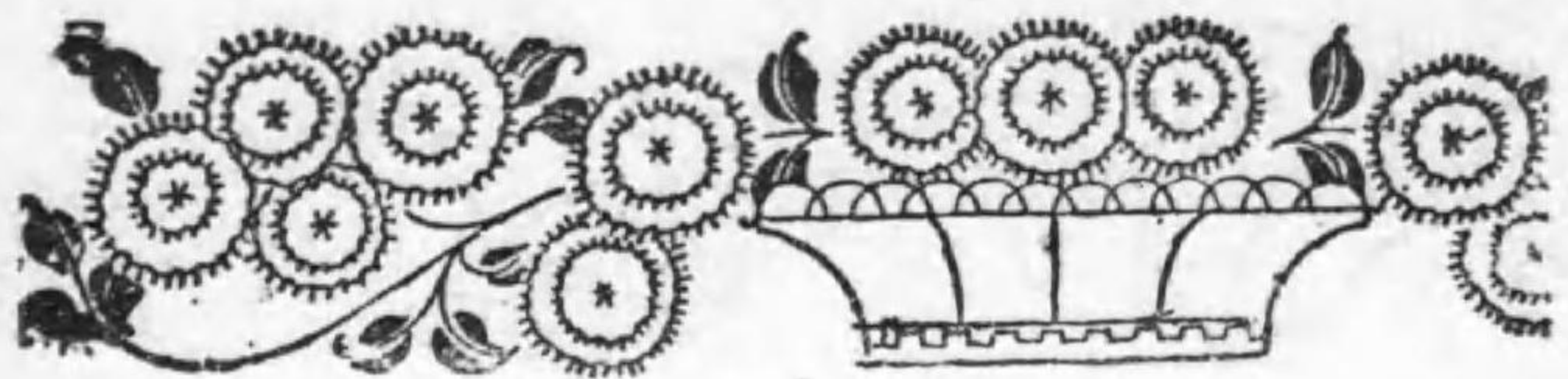
と長髪先生は、愈決心をしてサツサと歩いて行く。

「飯田君、ちよいと待らたまへ」

憊う云つた井村が、後を追はうとすると、

「井村君、君までが僕を振捨てるんだね」

「振捨てる譯ではないが、成行きだから止むを得ないさ。君も一旦云ひ出した事だから歸らないだらうし、僕にした處で歸ると云つた以上は、



君と別れなきや氣が濟まないんだよ。だから君は僕等に遠慮をせず遊んで來たまへ」

「ちや、どうしても僕と一緒に來て呉れないんだね。僕と遊ぶ友情は無いんだね」

「飛んだ處へ友懷を持出したね……それに僕は少々頭腦も痛むからね、失敬な奴だと思ふか知れないが、今夜のところは許して呉れ」

「よく解つたよ……ちや勝手にしたまへ」

近藤はグツと癪に觸つたといふ様子を見せた。

「君、怒つて呉れちや困るよ。別段惡氣が有つて歸るんぢやないからね」
憊う云つて了ふと、井村は歩き出した。

「僕一人を残して了やがった……」



六二
と心の中で呟いたが、近藤は思ひあきらめて動かなくなつたのである。そして井村の姿が辻を曲つて見えなくなると、洋酒の酔が急に頭へ上つたやうな、苦しい心持をおぼえて、厭な顔をしながら東を向いて歩き出した。

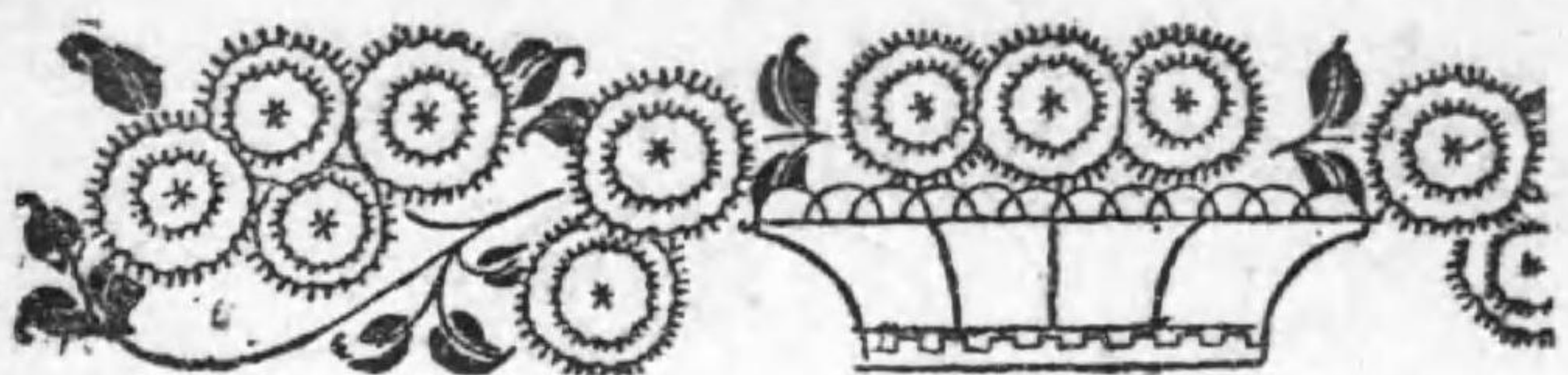
「どうも此儘で歸る氣になれない。遊ぶ遊ばないは二段として、最少し酒を飲んでやらうか」

「むら／＼と頭を擡げた耽溺の氣分、後はどうにでもなれの捨鉢の持病が起きて來た。」

「さうだ、二鶴が丸萬で飲直してやらう」

心が定ると歩調も確になつて、彼はスタ／＼と歩いて行く。

「まあお珍しいと……近頃些ともお顔を見せて下さらなかつたわね」



物の一時間も經つた頃、近藤は泥酔に近い軀を紋緞子の座蒲團の上に置いて、媚を賣る女を朦朧たる醉眼で迎へたのである。

「貴郎は必と他に好い妓が出來て、それで妾を聘しちや下さらなかつたのでせう」

「そんな事が有るものか……」

「ちや、お嫁さんを貰つたの」

「そんな者は貰やしないよ」

近藤は尤う自分で自分に分らない程酔つてゐる。憊うしてお茶屋の二階へ登つてゐるのも、何うかすると忘れたやうになつてゐた。

「貴郎は大變に酔つてるのね。しつかり爲さいよ」

妓は煩さ、うに云ひながら、それでもお客様だからと相手になつてゐ



る。

「親父に勘當された僕はだね……グープ、今度また母親からも見離され
たんだ……それでだね……」

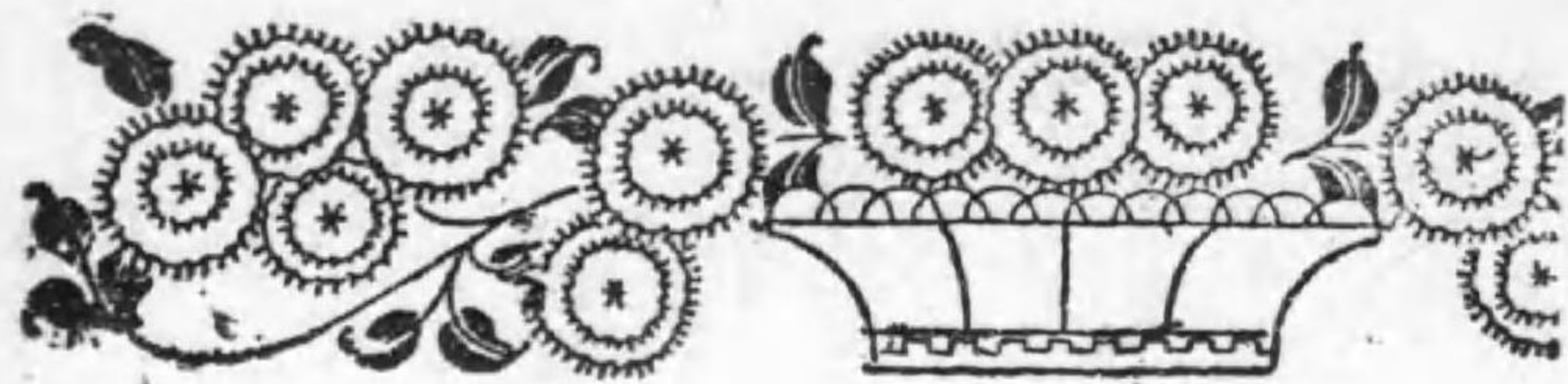
近藤は眼を瞑つて、寢言のやうな事を云ひ出した。

「何を云つてるの此人は……尤う遅いから寢みませうよねえ。近藤さん
たら」

「それで僕はだ、どうして宜いか……フウツツ、なるやうになれた、馬
鹿々々しい……」

慙う云つて了ふと、近藤はゴロリと横に倒れて了つた。前後不覺に陥
つたのだ。

「管なんか巻いてさ。ほんとに煩さい人だよ」



ちやうど此時、井村は福島へは歸らずに、上本町の或る小料理屋で、
やはり女を相手に酒を飲んでゐたのであつた。

「お雪といふ名からして僕は氣に適つてるんだ、雪の色は眞白だらう、
それと同じやうに慙うした濁つた空氣の中に居つても、お前の心が純潔
なやうに思へるんだよ……ところでだね、此處に一つ相談が有るんだが
僕の頼みだと思つて肯いて呉れる譯には行かないかね」

「相談でどんなことなの……」

仲居のお雪は訝しさうに云ふ。

「お前は先日僕に、つくづく慙麼どころが厭になつたから、何處かお嫁
に行く處は無いかつて、さう云つたいかね」

「え、云ひましたわ」



「何うだらう、暫らく僕の許へ来て見ちや」

井村の心はまだ確であつた。當つて碎けるの筆法から、安物の仲居を口説にかゝつてゐる。

「嘘でせう貴郎、うまい事を云つて妾を騙さうとしてゐるんでせう……」
「誰が嘘なんか云ふものか、お前さへ来る氣だつたら、今夜から來たつて構やしないよ」

「ちや眞實の話なの……」

お雪は井村の顔をジツと見詰める。その胸の中には借金で身動きの出來ない辛さが渦を巻いてゐる。一時遁れでも宜いから、しばらく井村の家へ身を隠さうかとも思ひ出した。

「どうだい、お前一人位には不自由はさせないよ」



「……………」

「今夜は僕も酔ひ潰れて泊つても宜いから、朝までによく考へて置くが宜いよ」

井村は最初此處へ來る時に、こんな事を云はうと思つて來たのではなかつた。けれども、どうやら自分を憎からず思つてゐると自惚れて見ると、出來るものならば女房にして見たいといふ、野心がムラ／＼と湧いたのである。

「ちや明日の朝になつたら、返事をしますわ」

四、沈思黙考

近藤が目をさましたのは、尤う九時過ぎであつた。東向きの硝子障子



には、既にあかしくと春の太陽が光線を投げてゐた。

自分の家のつもりで室内を見廻した近藤は、赤い絹夜具を被てゐるのに驚いて、昨夜耽溺したことを初めて知つたのであつた。

「僕は家へは歸らなかつたのか……」

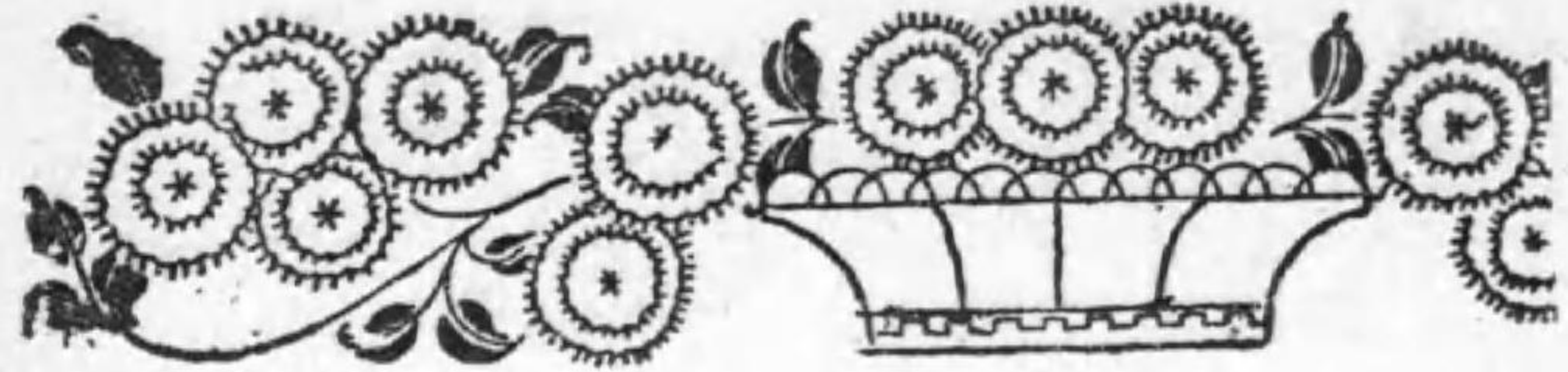
恚うつぶやいて見た枕元には、自分の蛾蟻口が投出されて有る。

「これは僕の錢入だ」

と思ひながら、手に取つて開けて見ると、中は空嘘で一錢の金も無い
「ちや、昨夜すつかり持つて行かれたんだな」

泣くにも泣けぬ馬鹿らしさと、一文無しになつた不安とが混合になつて、宿酔の頭が痛み出す。

「オヤ、尤うお目覺ですの」



折柄、塵拂と箒を持つて登つて來た仲居が、ちよいと覗いて恚う云ふ

「昨夜僕は泊つたと見えるね」

近藤は分り切つたことを云ひながら、

「昨夜は大分酔つてゐたらう」

「大分どころちや有りませんよ、餘程酔つていらつしやいましたわ」

「然うかね、ちつとも僕は知らなかつたよ……時に尤う何時頃だらう」

「何の先九時を打ちましたわ……まあ御緩りなさいまし」

そのまゝで仲居は次の間の方へ立去つて、やがて塵拂の音が聞え出した。

「恚うしちや居られない、早く家へ歸らう」

と彼は立上つて歸支度をした。



往來へ出て見ると、さすがに極りの悪い思ひをしながら、それでも詮方なしに未だ眠さうな顔をして歩いた。

「電車賃も無いなどは閉口した。酷い目に逢つたものだ……」

煙草屋の二階へ飯つた近藤は、さて昨夜のことを考へて見ると、我ながら馬鹿さ加減に呆れる。如何に酔つたまざれとは云ひながら、一文無しになるなどは人にも云はれはしない。差詰め貰錢にも困るやうになつては、殆んど取返しがつかない。

「井村君は昨夜歸つて来たか知ら？」

恚う思ひながら階下へ降りて、店に居たお神さんに訊いて見ると、

「いゝえ、まだ飯つちや被入いませんよ」

「然うですか、何處へ行つたのだらう……」



「貴郎と御一緒ぢやなかつたのですか、儂はまたお二人で御愉快にいらしたとばかり、思つてゐたのですよ……アツそれからね、今朝早く貴郎に逢ひたいつて来た人が有りますよ」

「男ですか女ですか……」

「あの年の頃は三十前後で、丸鬚に結つた小粋な女でしたよ。お名前はつて伺ひましたら、それぢや後刻参りますから、て飯つて行きましたよ」

「それは何うも……一體誰が来たのだらう」

ちよいと稽へた位では誰だか分らない。けれども丸鬚に結つた小粋な女と云へば、必とお茶屋か料理屋の女に相違ない、彼方此方に不義理を掛けてあるので、その中の何處かのが住所を尋ね當て来たのだらう……もし然うだとしたら、此方から逃げなければ、面と合す顔がない。



「そりや必と借金取りなんですかし、もし来たらまだ歸らないと云つて
いて下さい」

彼が恚う云つて頼むと、お神さんは氣輕に、

「それなれば宜うござんすよ。儂かうまく云ひますからね、貴郎は二階
に引籠んでゐらつしやい」

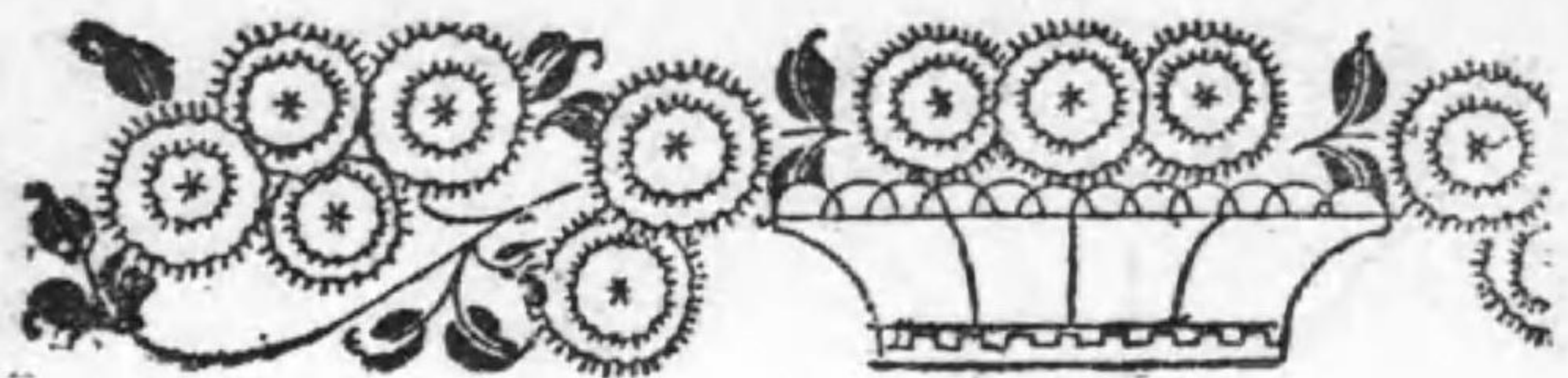
「ちや、宜しく願ひますよ」

云ひながら、ヒヨイと往來を眺めた途端、近藤の顔を見てニッコと笑
つた女がある。

「オヤ近藤さん！」

「ツカ〜と歩み寄つて来た女は、

「先程はまことに失禮を致しました」



とお神さんに會釋をしてから、

「近藤さん、妾ほんとに方々を捜しましたよ」

「それは何うも……」

悪い奴に見付つたと思ふと、何う言つてやらうかと考へねばならな
つた。

「此處で申すのも何ですから、何方へか……」

女の顔には笑顔が消えて、何うして下さるといつた、冷やかな氣分が
漂よつてゐる。

「さうですな、戸外へ出るのも何だから……ちや二階へ登つて下さい」

「それでは御免下さい」

どうせ追拂ふまでさと思つてゐながら、氣持のよくない近藤の後ろか



ら、女もつゝいて二階へ登る。そして御世辭半分に

「大變明るい二階ですわね。此處で貴郎は何をしてゐらつしやるの」

その言葉が、まるで尋問されてゝも居るやうなので、

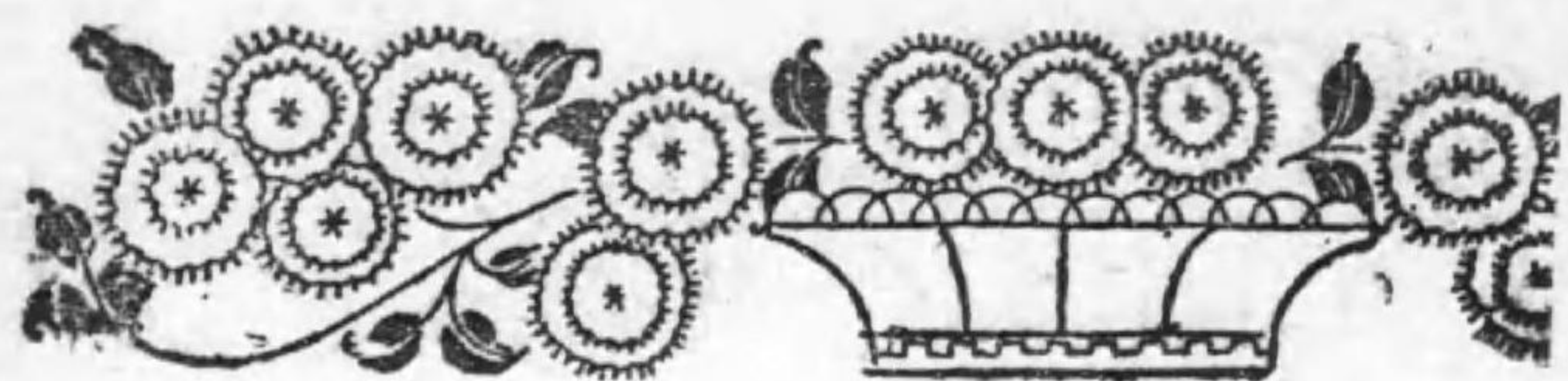
「毎日ブラ／＼してゐるんです」

近藤の言葉附は、借金といふ首枷の爲めに改まる。

「時に近藤さん、例の御勘定は如何でござりませうねえ。何しろ主婦さんから毎日のやうに責められますのでね、何とか罎を明けて頂きませんと……」

「それア良く解つてゐるんですがね……實はその、僕は勘當を受けてゐる身ですから……」

「その事もお宅へ上つて伺つては居りますのですが、何しろ初めて遊ん



で頂いた其月でせう。ですから主婦さんも困ると被仰るんですよ。一年も二年も遊びに来て頂いて、あんな風になつたのなら、此方にも謙めようも有るんですけれど、全く中へ入つてゐる妾が辛くてね」

「然うでせうとも……僕も都合さへつけば假令僅かでも持つて行つて、話を爲ようとは思つてゐるんですが、何しろ生活にも困るといふ有様ですからね。今の處では……」

近藤は頭を掻くより他に術がない、日頃笑談の巧い彼も、今日ばかりは十分に喋れない。

「妾の方でも出来ないものを無理にとは云はないのですから、半金だけでも頂いて飯れば、それで後の處は何とかね……」

女も中々しつかりしたもので、金が出ない間は飯りませんと言つた風



に。

「半金は愚か五圓の金も無いんですよ。ソラ此通りに……」

と彼は錢入を出して振つて見せる。

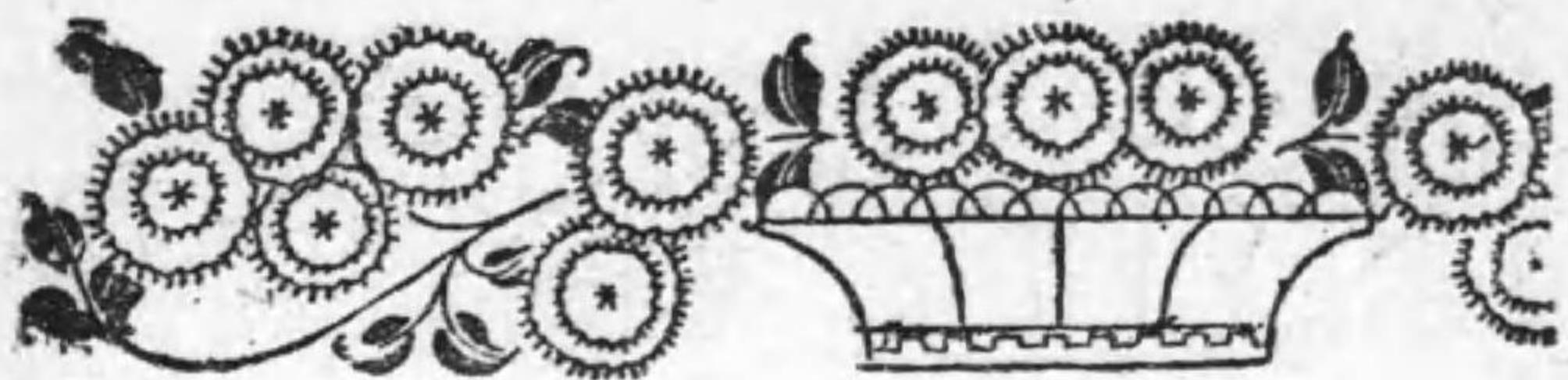
「いくら遊んでゐらしても、一文無しぢや暮して行けないのですもの
オホ、、、」

人を馬鹿にするもんぢや有りませんよ、と言はぬばかりに苦笑する。

「ところが辨當代も先月からまだ拂つてないといふ始末で、自分ながら
意氣地なしだと思つてゐるんです」

「……………」

女は無言である。何ういふ風に言つたものかと、内心大に考へてゐるらしい。



「わざ／＼来て呉れたのだから、少しでも持つて飯つて貰ひたいのです
が、今も言つた通り振つても叩いても出ないんだから……」

憊う言つて了ふと幾から大膽になつて、無い物が出せるかい、と言つた氣分を現はした。

「然う云はれますと致方も有りませんけれど……」

と近藤の顔を穴の明くほど眺めながら、

「それでは三四日の間に尤う一度参りますから、其時に幾程でも宜うござ
いますから、どうぞお願い致します。それでないと妾飯つてもお主婦
さんに云ひやうが有りませんもの……」

これだけ言つて了ふと、女は飯つて行つた。やれ／＼と思ひながら、
机の前へ坐つた彼は、限りない不安と絶望の谷へ陥ちた。彼の顔には活

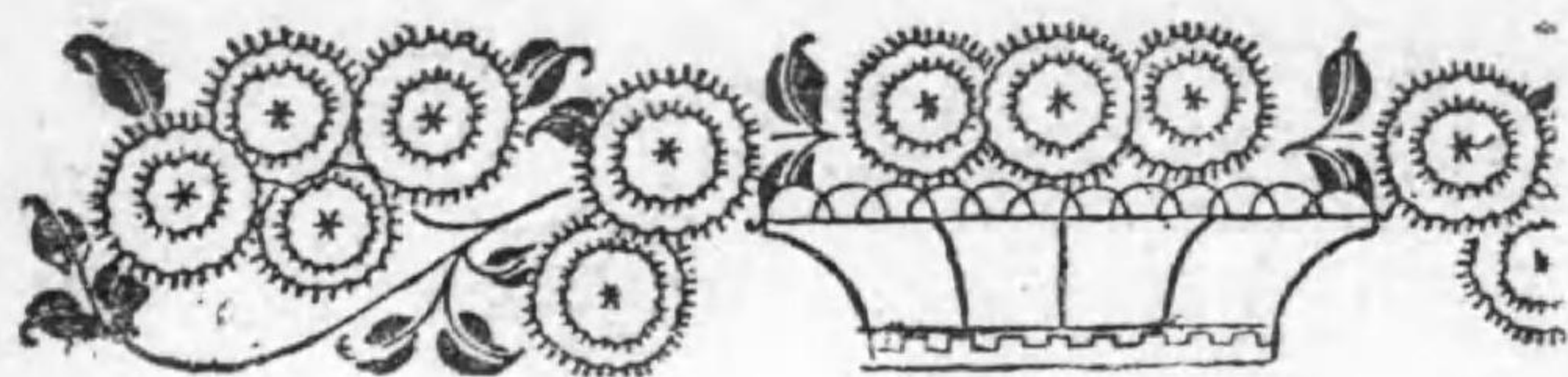


七八
気が失せて、ヒステリー性の女が、思ひ餘つて夕暮の窓から庭を見詰めてゐる時のやうな、遺瀨なさがありくと現はれてゐる。

明日からの生活の不安が、暗い影を投掛けてどうすれば宜いか、彼には分別が盡かない。と言つて此儘でボンヤリして居る譯には行かぬ。腰辨になるとか何とかして、食つて行く道を講じなければならぬ、ところが従來の放縱な彼の生活は、一定の時間を勤める安月給取りにもなれないし、それかと云つて手に覺えた職業もない、親の金で遊び暮して来た彼には、自分の手で一圓の金儲けも出来ないのである……。

「寧ろその事、電車の車掌にでもなつて遣らうか……」
遂には慙うまで思ひ詰めても見たが、

「いや、僕にはそんな真似は出来ない。どんなに苦しくとも、車掌



になるなんて氣になれるものか、何處で誰に逢はないとも限らない電車に乗つて、動まますから御注意なんて喋れるものか……そんな事は死んだつて出来やしない。と云つて何も爲すには居られないけれど……」

今更のやうに生活難を感じて来た。人一人食つて行くのは並大抵ぢやないどさへ思はれる。隙があると酒色に溺れて、金の有難味を知らなかつた今迄は、馬鹿といはうか無智と嘲らうか！慙うなつてから初めて識る親の恩、彼如して母親が送金してゐて呉れたればこそ、家を出てから食ふに困るやうな辛い目にも逢はなかつたのだ。

「けれども、その送金も尤も駄目だと言つて来てゐる。命の綱の送金を絶たれた手紙を讀んだ昨日、しかもその夜に彼如して酒を飲み歩いて、その納りが一文無しの此の有様だ……」



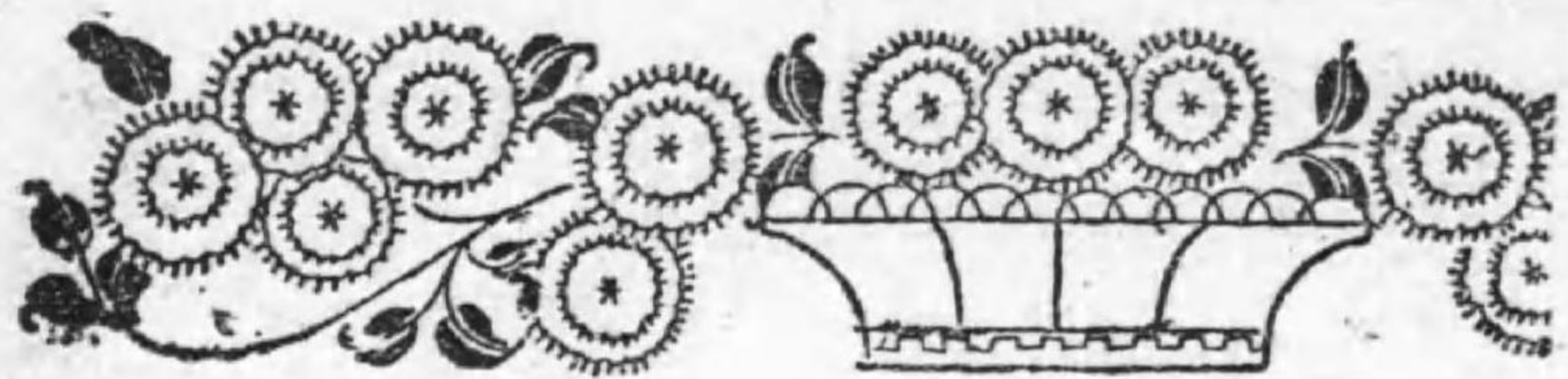
彼は慙う考へて行くと、泣いて済むものならば聲を上げて、も泣きた
い。悔んで歸るものならどんな人の前で、も悔み度い……だがそれも今
日となつては後の祭である。過去を悔悟して前途に光明を認めるやうに
爲なければならぬ。

「……然うだ、同じ生活に苦しむならば、與太で通れる事を爲なければ
ならぬ、自分の知つてゐる範圍で活辯ほど與太なものはない、勤める時
間に束縛はありても、喋る言葉に與太がある、あれなれば自分にだつて
出来るだらう」

フト思ひ付いた活辯生活が、彼に自信と光明を抱かせたのである。

「善は急げだ、今から直ぐに出掛けて行かう」

沈思黙考で晝飯を食ふのすら忘れてゐた近藤は、慙う決心をすると、



元氣よく立ち上つた。

「それでは貴郎が辯士になりたいと言ふんですか」

東洋活 動寫眞會社の支配人は、慙う云つて髭を捻りながら、近藤の
顔容から手足などを眺める。

「自分でも十分やれると自信してゐるんですから、どうか御採用を願ひ
ます。」

生れて初めて會社と名の付いた處の、支配人に面會して、しかも使つ
て呉れと頼むのだから、近藤の身を取つては氣が氣ではない、支配人が
皮肉つた事を言つて、デロリと顔を見る度に、脇の下から冷汗がタラリ
くとこぼれる。



八二
「辯士といふものが甚麽ものであるかと云ふ事は、既に御承知でせうから言ひませんが、只だ些いと見ると如何にも暢氣さうで、なか／＼與太では勤まらないと云ふ事を、考へて貰はなければならぬのです、最初は誰でも直ぐになれると思つてゐても、さてやつて見ると随分難しいものですから、其處を誤解しないやうに……」

「其點もよく承知してゐるんです。加之僕にはいくらか文學の素養も有るんですから、暫時すれば必と一人前の辯士になれると、さう堅く信じてゐるんです」

と近藤は、殆んど出鱈目を言つてゐる。常設館へ入つてさへ了へば、後はどうにでもなるといふ與太な考へから、目下の場合この支配人にうまく取込まねばならぬと思つてゐる。文學の素養などの有りさうな筈も



なければ、一人前の辯士になるといふ自信も、元より有りさうな道理がない。慙うも云へば支配人の心が動くかと、パンに有付かうとする心ばかりなのである。

「それほど御希望であれば勤めて貰つても宜いですが、最初の間は給料も極く僅かですよ」

「それも宜く存じて居ります。何うにか慙うにか食つてさへ行ければ、それで宜いんです」

「それでは何時からでも来て頂く事にしますが、今は何處にお住居です

「あの福島です」

「あ然うですか」

と支配人は頷いてから、



「御都合で何方でも宜しいが常設館には夜具も有りますから、常設館でお泊りになる方が宜いかと思ひますね。すれば辨當代だけで済む事ですからな……でない、下宿料までは此方も出せまさんから」

「常設館で寝泊りが出来るのですか」

意外と云つた顔で訊ねると、

「見習ひの間は皆さうするのです。一人前になつてからは自由ですがね」

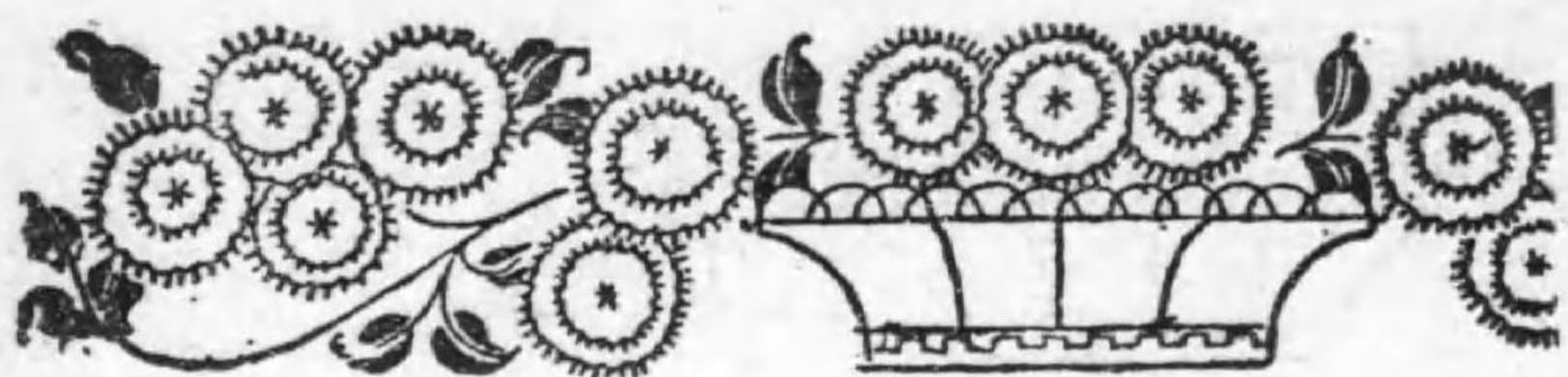
「結局その方が氣樂かも知れませんか」

と何處までも負惜みを言ふ。

「氣樂よりも何よりも、然うしなきや遣つて行けませんよ」

と支配人は皮肉に言つて苦笑する。

「ちや、明日履歷書を持つて來ますから、御都合で明日からでも……」



「恚う云つて彼は會社を出た。案じるよりは生むが安いで、何うだらうかと心配しながら面會した支配人が、存外氣輕に雇つて呉れたので、近藤は初めてホツと吐息して胸を撫下した。

「尤うこれで生活は安定だ。滅多に餓死する心配もない……こんな事だつたら、何故もつと早く行かなかつたらう。人間といふものは窮すれば又分別の付くものだね」

こんな事を思ひながら、行きしなの不安に引代へて、パンに有付いたといふ希望を抱きながら、テク〜歩いて歸つて見ると、

「近藤さん。井村さんが大變なお土産を持つて歸つて被入りましたよ」と待設けてゐたやうに、彼の顔を見るとすぐ恚う言つたのである。

「大變なお土産つて……」



突然なので不審がると、

「ソラ、耳を澄して二階の様子を聴いて御覧なさい……ねえ、若い女の聲がするでせう」

「ぢや、あの聲のする女を連れて歸つたのですか」

「え、今日からお嫁さんになるんですつて」

「ナニ嫁になる……」

さすがに驚きの眼を睜ると、

「ごんな事をしてゐるか、ソツと段梯子の處から見て御覧なさい、必と當られますよ」

お神さんから恚う言はれて、拔足差足で段梯子へ近づき、音のせぬやうに登つて見ると、先づ鼻を衝く肉鍋の匂ひ。ヌツと首だけ出して眺め



て見ると、

井村と若い女どが差向ひで、楽しさうに一つ鍋を突いてゐるではないか！

「奴め、生意氣な真似をしやがるツ」

恚う思ふと、矢も楯もたまらなくなつて、勢ひよく姿をあらはした。

「大變な御馳走だね」

言ひながら近藤は、忌々しさうに二人の傍に坐つたのである。

五 天下の色男

「イヨ、歸つて来たね先生」

と井村は別に驚きもせず、今歸つたのかと言つた顔。けれども、女だ



けにお雪は極悪さう。

「實はね近藤君、今日から此の女が僕の女房に來たのだから、宜しく頼むよ。お雪と言ふんだ」

先ずれば人を制す、一刻後れなば飛んだ投槍を、喰はされるか知れないと思つた井村は、寧ろ平然たるもので、

「妾お雪と申します。何卒よろしく」

此の人が井村から噂された近藤さんかと、お雪は初對面の挨拶をする「ヤこれは、僕が近藤です」

詮方なしに近藤も挨拶はしたが、こんな處に長居は無用と、早や腰を浮せる。

「君も一杯飲んだらごうだ。いま三々九度の新式をやつてゐる處さ」



こんな言はれて、どうして盃の手が出せよう。お雪の顔を見て見ぬ振の近藤は、

「僕はこれから飯田君の許へ行つて來るよ」

と井村と睨付けるやうに見て、

「それからね君、明日からは僕も浪人ぢやないよ。好い勤め口が有つたからね」

「然うか、それは何よりだ。して會社か銀行かね……」

「會社だよ」

さすがにお雪の手前、活辯になるとも言ひかねた。

「それなれば尙更のこと、祝盃を擧げようぢやないか、少し待ちたまへ井村は恚う云つて引止めようとしたが、



「イヤ、祝盃はまた改めて擧げることゝ爲よう……それからね君、都合で僕は會社の方で寝泊りすることにしたから、安心して二人で仲好く暮し給へ」

言つて了ふと、近藤は立つて襖紙を開けた。

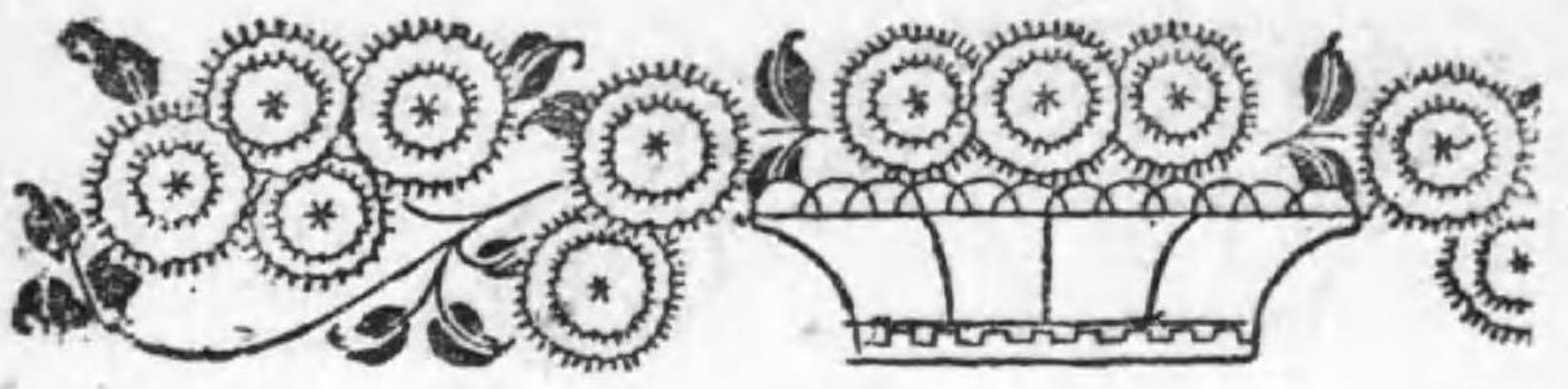
「で今夜から行くのかい、君は？」

「會社へ行くのは明日からだ、今夜は飯田君の許で泊らうと思つてゐるんだ」

と、着替や何かを取出して居る。

「着替なんかは、今持つて行かなくつても宜いんだらう」

三月あまりも同棲した間柄だから、井村も氣まづい別れようは爲さないと思つてゐる。



「どうせ少しきや無いんだから、恚うして持つてさへ行けば、後は君等の天下さ」

「……………」

「ちや此から行つて来るよ。折角機嫌よく暮らしたまへ」

「有難う、君も活動したまへ」

近藤は風呂敷包を持つて降りて行く。

その後姿を見送つた井村は、

「彼の男が行つて了へば、尤う誰に遠慮も要らないのだから、氣樂なものさ」

「然うね、妾も氣兼ねしなきやならないかと、心配してゐたのですわ」
お雪も安心したと云ふ風に、



「僕もお前を連れては歸つたもの、二間限りしか無い二階で、困つたことだと思つてゐたんだが、ちやうど先方から出て行つて呉れて、何より宜かつた。事に依つたら此方から出なきやならんかとも考へてゐたんだ」

「貴郎と恚うして、御一緒にならうとは、妾思つちや居ませんでしたわね、ほんとに」

ボツと眼の端を赤く染めたお雪は、酔つた眼で井村の顔を眺める。

「僕だつて昨日までは思ひもしなかつた事だ。昨夜あんな話をしてゐながらも、僕は今日から恚うして一緒になれようとは想はなかつた」

井村も何時になく、少しの酒で酔心地をおぼえてゐる。妻と呼ぶ女が出来たと思ふと、尠からの喜悅が胸に湧いて来る。

「今夜は何處かへ連れてつて頂戴ね」

甘つたるいその言葉には男性をとろかす魅力が含まれてゐる。それがまた井村の胸には、此上もなくうれしく響いた。

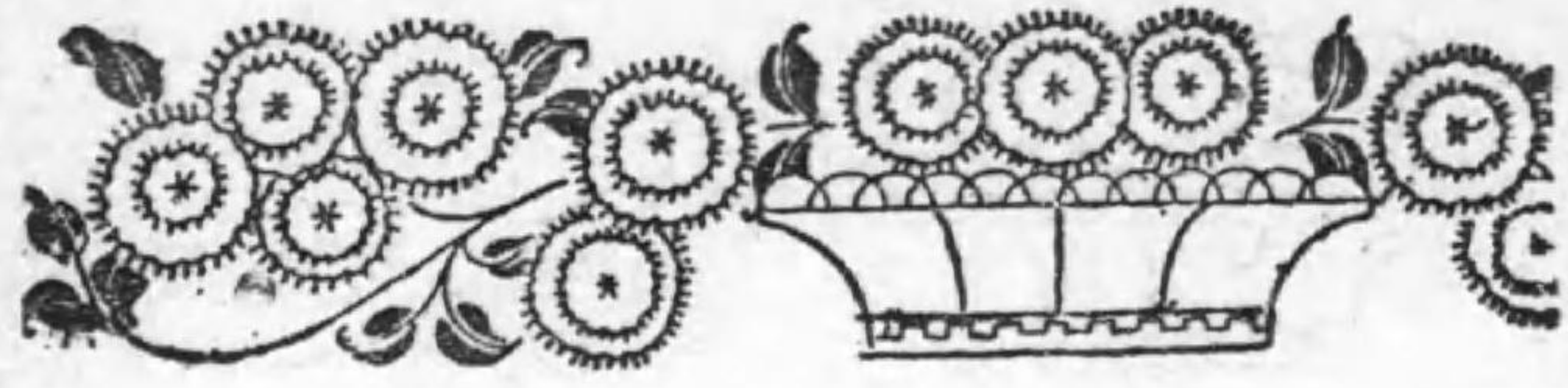
「好矣、何處かへ行かう」

ど一も二もなく承知をして、

「何處へ行くことに爲ようかね、落語でも活動寫真でも、お前の好きなところへ行くとよ」

井村の眼尻が下つて來たのを見ると、お雪は得たり賢しと北叟笑んで同じ寄席でも此邊のはつまらないから、南地へ連れて行つて呉れと言ひ出した。

「ちや紅梅亭へでも行かうか、それが宜いね」



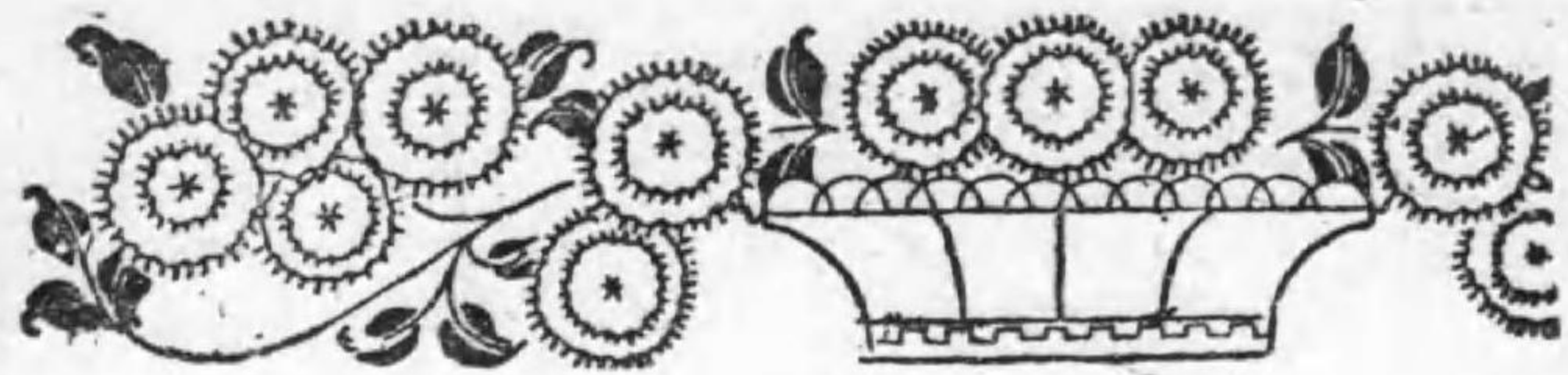


實の處は近藤には言はないが、まだ十圓餘りの金が懐中にあるので、先生聊か得意になつてゐる。

「え、紅梅亭は三友派でせう。それから歸りに丸萬へ連れてつて頂戴ね、妾まだ知らないから」

お雪が錢湯へ出掛けて行つた後で、井村は鍋や何かの後終末を一人で爲ながら、それでも不服さうな顔もせず、今日からの心樂しさを考へてゐる。

「お雪は確に僕に惚れてゐる、確に惚れてゐるに相違ない。よし死ぬ程想つてゐては呉れなくとも、好きな人になつてゐるに定つてゐる。昨夜會つたのが三回目なもの、二度や三度で縁談が纏るなんて、誰が聞いた



つて惚れられてゐるとしか思ひはしない……して見ると僕は天下の色男だね。近藤なんかは偉さうな事を云つてゐても、金を費ふばかりで、女から惚れられないから駄目だ。貴郎と添れなきや妾死んちまうねてな事を、もしお雪が言つたとしたら、それこそ僕は三度の飯を二度にしても宜いから、帯側の一つも買つてやる……さうだ、今夜歸つて來たら、お雪の心を確めてやらう。何の位まで僕に惚れてゐるか、一つ試して見てやらう」

愚にもつかない事ばかり考へて、漸と後片附の濟んだところへ、白粉をベタ塗りにしたお雪が、錢湯から歸つて來た。

「アラ、濟みませんね。後片附までして頂いて」

初めから恚うさせようと思つて、出て行つて置きながら、口の先で巧



く禮を言ふ。

九六

「ナニ構ふもんか、遊んでるものが片附ければ宜いのさ……イヨイ美しくなつたね。それでこそ何處へ出しても井村夫人と言へるよ」
「アラ、そんなに美しくつて……」

とお雪は眞顔で言ひながら、これも嬉しさうな顔をする。

「尤う日が暮れかけて来たから、ポツ／＼出掛けようかね。遅くなると良い坐り場所が失るよ」

「ちや、これから直ぐに行きませうか」

やがて二人は家を出た。煙草屋の店先では流石に遠慮をしたが、物の五六間も離れると、二人は人目をも憚らず、肩と肩とを擦寄せて歩いた



落語が退て紅梅亭を出た二人は、狭くて賑かな露次を抜けて、丸萬の三階へ登つた。

登つて見ると、既に澤山の客が陣取つてゐた。ちやうど芝居歸りや凡ての興行物の退ねた時分なので、白粉の女を連れてゐるのが、其處にも此處にも目に立つてゐる。

其處へ手を引かんばかりにして登つて来た二人に、一同は好奇の視線を投げた。あれは夫婦だらうか何だらうか、と云つた眼が光つた。けれども二人はそんな事に頓着なしに、意氣揚々として座に就いたのである
「小鉢物も有るんだから、欲しい物を注文すれば宜い」

とすつかり亭主氣取りになつた井村は、お雪に酌をさせながら、慇う言ふ。

九七



「何か酢の物が欲しいわね」

言ひながら、お雪が仲居を呼ぼうと思つて、その姿を尋ねて、キヨロく、彼方の方を見てゐると、不圖彼女の瞳に映つた男の顔。何處かの職人らしい三十前後の男と、顔を見合せると、

「アラ……」

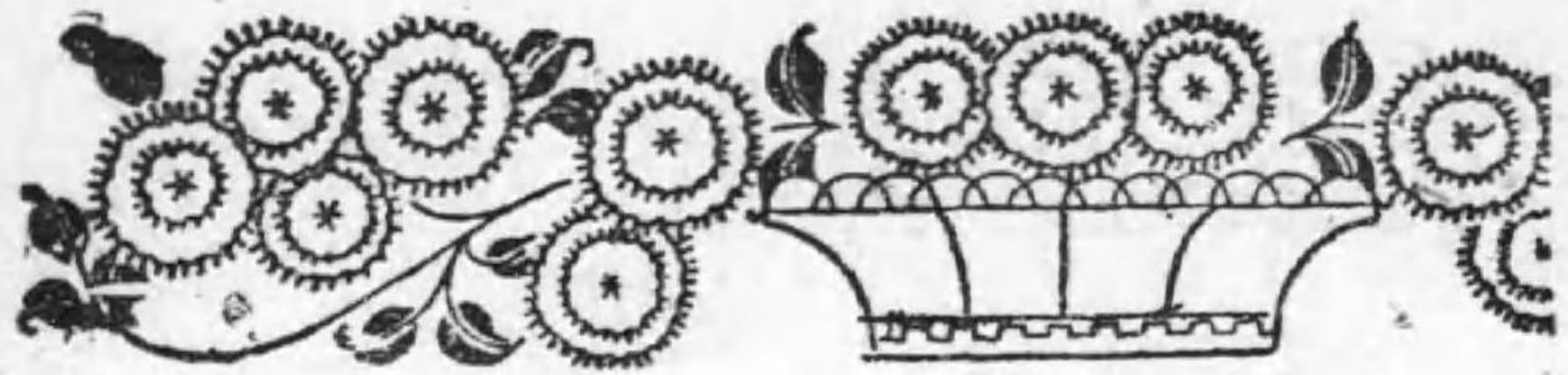
人には聞えなかつたが、口の中で驚いた。

その男は一人でチビリく飲んでゐたが、同じく意外の顔をして、盃を下に置く。

「貴郎、妾急に気分が悪くなつて來ましたわ」

とお雪は眞實らしく顔をしかめる。

「気分が悪くなつた？其奴は不可いね」



井村は眞に受けて心配顔をする。

「妾もう何も食たく有りませんから、歸りませう」

「ぢや、然う爲ようか……」

今暫らくと思つてゐたが、詮方なしに勘定を済まして往來へ出た。

「電車に乗るよりも、歩いて歸つた方が宜いだらう、気分が悪いんだから」

「え、……」

お雪は上の空で返辭をしてゐる、悪い奴に發見つたといふ恐ろしさが彼女の胸一杯になつてゐる。

「明るい通りは煩さいから、暗い處を歩いて歸りませう、ねえ貴郎」

お雪は後ろも見ずに暗い町へと急いだ。



「そんなに急いで歩いちや毒だよ。ゆつくり歩いた方が宜い」
何も知らぬ井村は、お雪の身ばかりを心配してゐる。

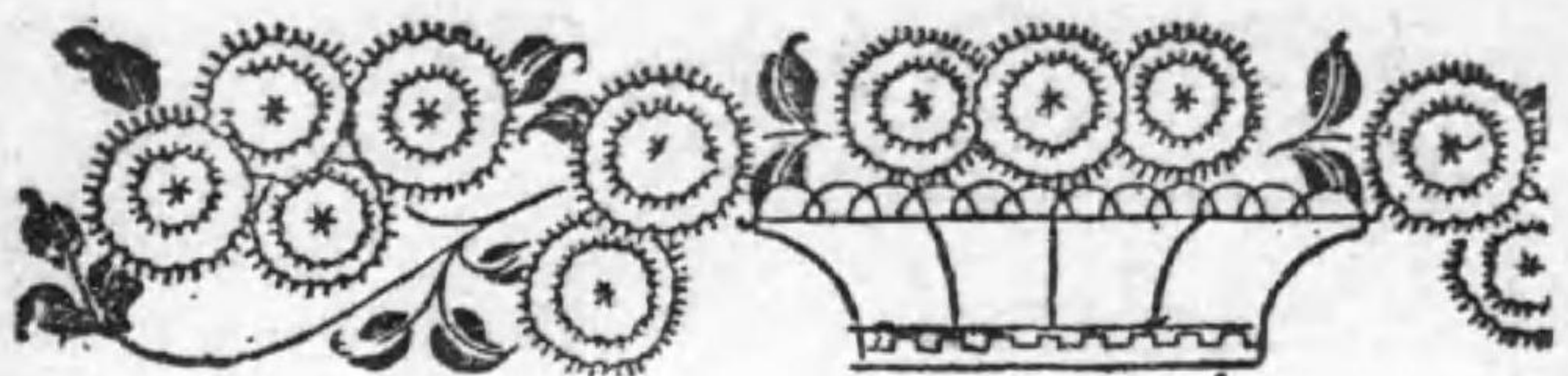
「あ、これで漸ど心が落着いたわ」

誰に言ふともなく獨り言を云つて、人影のない狭い通りを、初めてゆつくり歩き出す。

「馬鹿に急いで歩くものだから、僕はまた尙更気分が悪くなりほしなにかと、氣を揉んでゐたよ」

「尤うすつかり気分が良くなりましたから大丈夫よ。これが妾の持病で人中の明い處で気分が悪くなると、何時でも急いで暗い處へ行くのよ。すると、妙に癒つちまうんですわ」

「それを聞いて僕も安心した」



と井村は胸を撫上すと同時に、お雪の手を握る。

「しかし今夜は愉快だったね」

「えい、面白かつたわ」

「お前と僕どが同棲をする第一日ではあるし、落語を聞いて酒は飲むし……」

「貴郎、何時までも見捨ないで下さいね」

「誰が見捨なんかするものか、もしお前が嫌だと言つて逃出すやうな事が有つたら、僕は何處までも後を追蒐けて行くよ」

「そんなにまで妾を想つてゐて下さるの」

「あ、生死を俱にする女は、お前より他にはないと思つてゐるよ」

「アラうれしいわね、實は妾もさう想つてゐるのよ、貴郎とはまだ二三



1011
回しか會つては居ないけれど、最初お顔を見た時から好いたらしい人だと思つて、お話をしてゐる間にすつかり好きになつちやつたのよ。日外も貴郎の事を夢に見たわ」

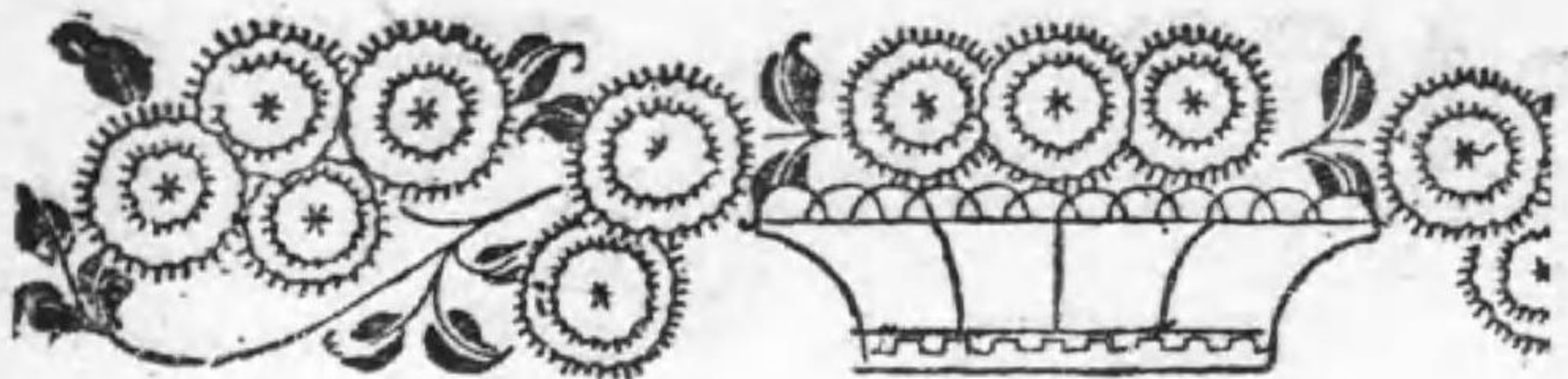
「あの僕のことを夢に見た……」

「え、貴郎と妾とが新婚旅行をしてゐる夢よ。何處だか知らないけれど、松樹の澤山ある海邊を二人が歩いてゐたわ」

「然うか……そんなにまで想つてゐて呉れたとは知らなかつたよ。尤う慙うして夫婦になつたのだから、何處までも離れないやうに爲ようね」
「だけど、妾心配な事が一つ有るのよ」

「どんな事が……」

「貴郎が浮氣者だから、何時捨てられるか分らないつて心配だわ。それ



が何より氣になるのよ」

こんな痴話狂つた事を喋りながら、北へくと二人が歩いて行く後から、黒い影の男が従いて來て居ようとは、神ならぬ身の知る由がなかつた。

二人が橋を渡れば黒い影も橋を渡り、彼等が立停ると影の男も立停る

「それから妾ね、貴郎にお願ひが有るのよ」

とお雪は改めて慙う言ひ出した。

「僕に願ひと言ふと……？」

井村は不審さうに訊く。

「他ぢや無いのですけれど、今夜から妾が貴郎の女房になるとすると、また種々な買物も爲なきやならんでせう」



「うむ、然うだね」

「其時に一々何を買ひますから、幾ら下さいと言ふのは面倒でせう」
「うむ」

「ですから、明日からは妾が經濟を持つ事にして、貴郎の錢入を妾に渡して下さらない？」

「僕の錢入をお前にかい」

さすがに井村は、近眼の目を睜る。

「何もそれを妾が費つて了ふんぢやないわ。貴郎は終始外出をする人でせう。もし途中で落しでも爲て御覽なさい。それこそ大變で、お小遣錢も無なるぢや有りませんか」
「それも然うだね」



「それに女つてもものは苦勞性ですから、若し貴郎が他所で浮氣をしやしないかと、心配でならないわです。から妾が貴郎の錢入を預つて置いて貴郎に要るだけのお金を渡すやうにすれば、それで妾はすつかり安心しつちまうですから」

「……………」

「貴郎は何故黙つてゐるの、妾の言つた事が氣に適らないで、腹を立てゝゐるの？」

「決してそんな譯ぢやないがね……………」

「ぢや然うして下さつても宜いでせう……………あッ解つたわ、貴郎がさうして考へてゐるのは、嫌になつたら何時でも妾を見捨てようと思つてゐるんでせう……………」



「オイ冗談ぢやない。そんな事を思つてゐるものが」

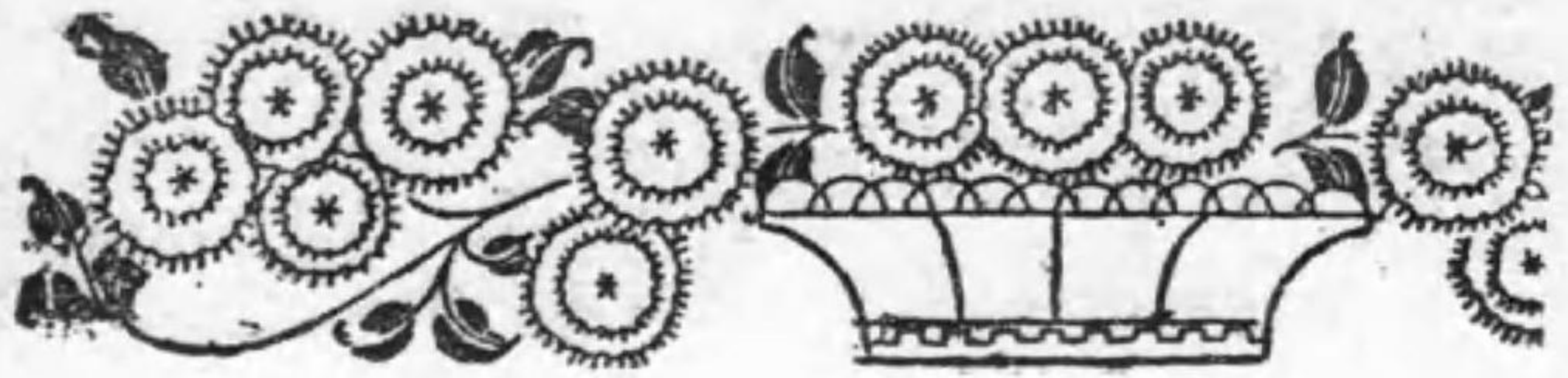
「ぢや、然うして下すつても宜いぢやないの」

お雪は胸に一物、此處ぞとばかり深く突込む。

「……それほど言ふのなら、僕の錢入はお前に渡さう。その代り冗費しないやうに爲て呉れなくちや……」

「それでは妾に預けて下さるの。妾もこれで安心が出来ますわ。貴郎の愛情もよく解つたわ」

翌日になると、井村は外交に出掛けて行つた。家に残つたお雪が、井村から預つた錢入の中なんかを調べて居ると、階下で聞馴れた男の聲がする。



「お雪さんは家に居ますか」

恚ういふ聲が聞えたので、まだ誰にも知らしてないのに、一體誰か訪ねて来たのだらう。と訝りながら降りて見ると、昨夜丸萬で逢つた男なので、

「オヤ、お前さん！」

思はず聲を出して立ちすくむ。

「登つても宜いんだらうね」

と男は、馴れた口を利く。

「構はないからお登んなさい」

と詮方なしに二階へ案内をする。

「昨夜お前の顔を見た時にや、直ぐにでも話を爲やうかとも思つたんだ



がね」

坐につくと、男は慙う言つた。

「お前さんは何うして此處を知つてるの」

「其處に抜目があるかい、手前の後から尾いて来たんだよ」

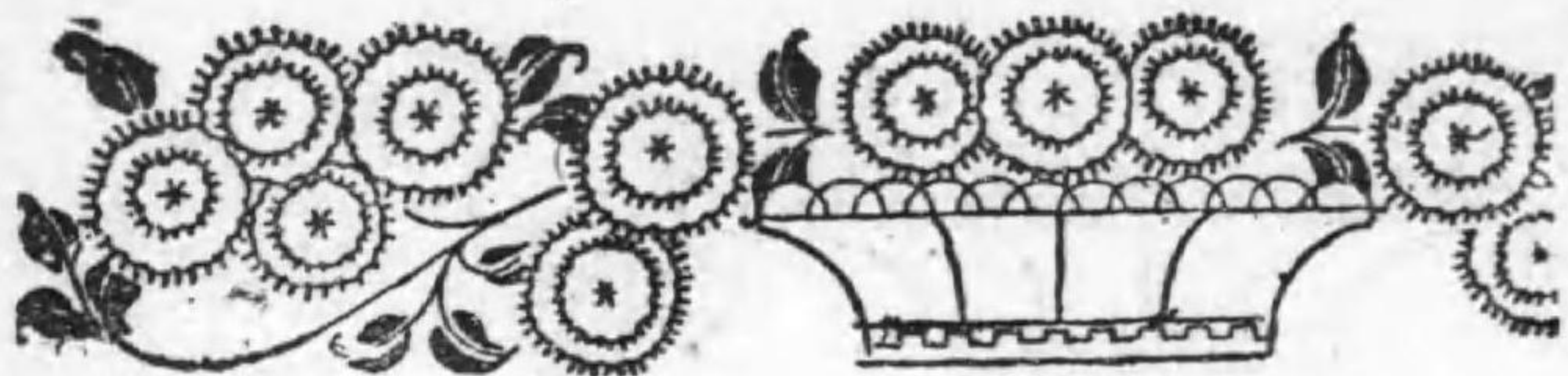
「お前さんはまた妾を苦めようと思つて、やつて来たんだわね」

「馬鹿ア言ひねえ。誰が可愛い手前を苦しめようなんて思ふもんか。一年振りで逢つたなつかしさに訪ねて来たんだよ」

言ひながら、男は室内を見廻して、

「昨夜の書生つぼど一緒に暮してゐるんだな」

「妾だつて彼如してお前さんと別れてからは、随分苦勞をしたのよ」
今更そんな事が言へた義理かと、お雪も度胸を据えてゐる。



「彼の時は全く俺が悪かつた。しかし彼れから朝鮮へ行つて稼いちや居たんだが、どう思つても手前の事が忘れられねえんで、今度大阪へ歸つて見ると、手前の行方が知ねえだらう。一時は落膽もしたが、何時かは廻り逢ふ時もあらうと、方々を尋ねてゐる間に、神様のお引合せで昨夜逢へたのさ」

「ぢやお前さんは、妾とまた夫婦にならうと思つてゐるの」

「手前にこんな事を言へた義理ぢやないんだが、近頃ぢやすつかり心を入替へて、眞人間になつてゐるんだから、俺を可哀相だと思つて、元々通り夫婦になつて呉れ、頼むからな」

お雪を喰物に爲ようと考へてゐる男は、さも前非を悔めてゐるらしく装つて



「お前さんから那麼に言はれると、好き合つてゐた仲だから、妾も嫌とは言へないけれど……妾は昨日此處へ来たばかりなんだから」

お雪は體よく斷つて歸さうと思つてゐる。

「そんな事なんぞ構うことアねえや。どうせ手前が惚れてゐるつて理でも有るまいし」

「だつてね、餘り薄情になるからね」

お雪は殊勝らしく俛首れて見せる。

「薄情も糸瓜も有つたものぢやねえが……だが餘り可愛相だから、茲二三日も一纏に暮してやつてさ、折を見て逃げ出しやそれで宜いぢやねえか」

男は飽迄も自分勝手なことを喋つて、お雪は自分の物だといふ顔をし

てゐた。

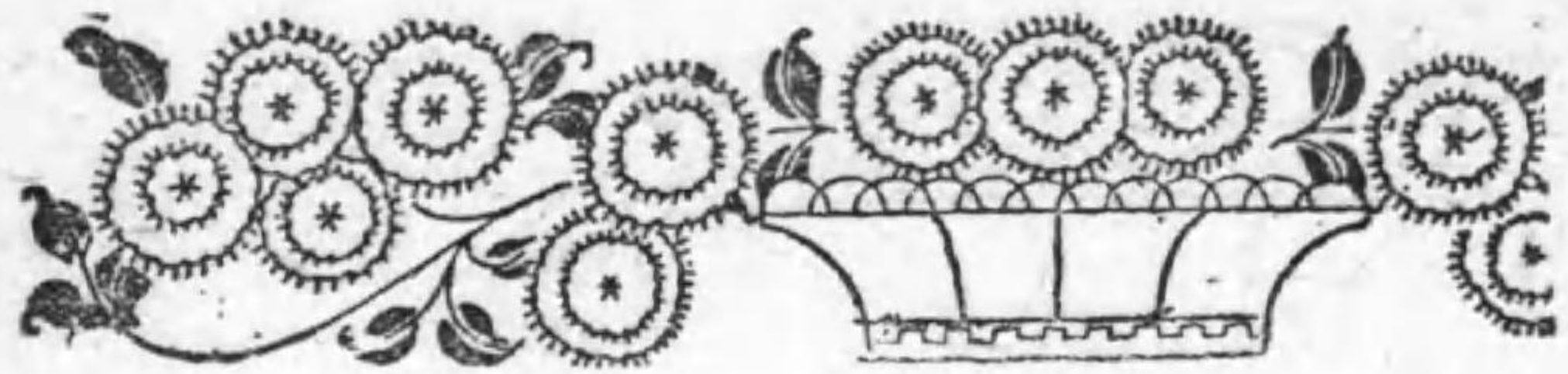
六、暗い辯士部屋

風呂敷包一つを財産として、住馴れた煙草屋の二階を去つた近藤は、昨夜は長髪先生の下宿で厄介になり、今日はいよいよ見習辯士といふ希望を抱いて、正午から會社へ出掛けて行つた。

支配人に會つて見ると、野田の方の常設館へ行つて呉れと云ふので、其方へ直ぐに出掛けた。

行つて見ると、思つたよりも小さな小屋で、これでは客柄も悪いわいと彼は聊か悲觀した。

「昨日會社の支配人から電話が有りまして、君の來て呉れるのを待つて





わたんですよ』

それでも憊う云つて、先づ事務室へ通して呉れたのが、何となくうれしかつた。

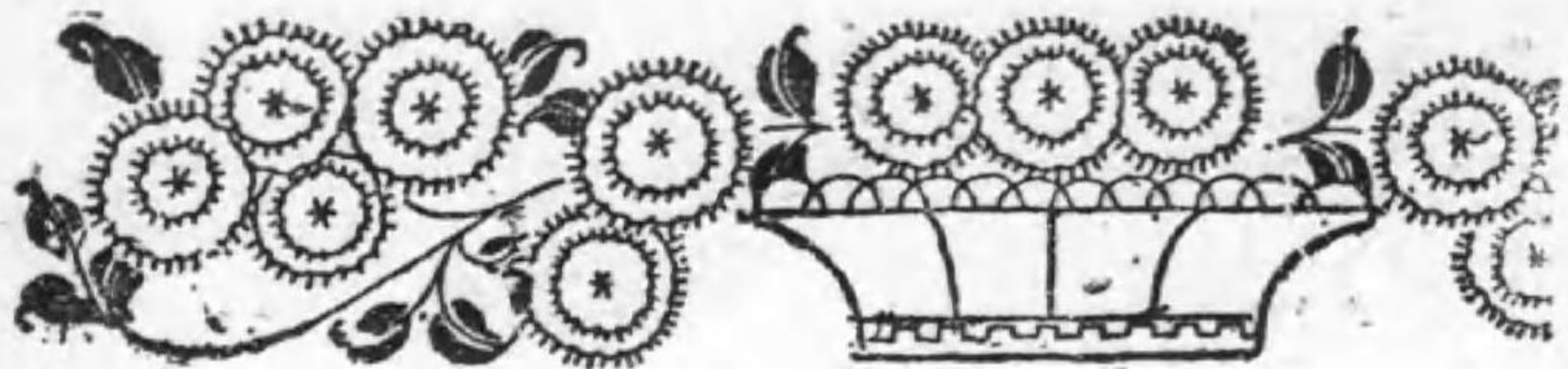
事務室と云つても勘定場を兼ねた狭い所で、粗悪な机が一脚置いてあつて、其前に其館の支配人が、有るか無いかの髭を捻つてゐる。

「君はまだ一度もやつた事は無いんですつてね」

「ハア、何分よろしく」

近藤は叮嚀に頭を下げる。

「差詰君は見習なんだから、一回の間に一度出て貰へば宜いんですが……尤う程なく主任辯士が来るでせうから、暫らく此處で待つてゐて下さい」



憊う言つて了ふと、何が忙しいのか支配人は扉を啓けて、急いで出て行く。

「いよ／＼辯士が見習ひをやるんだな……」

自分ながらに可笑いやうな、馬鹿らしいやうな氣になつて、長髪先生から貰つて来たバットを喫つてゐると、扉が啓いて切符賣の女が入つて来た、そして彼の顔を見ると、ちよいと會釋をして、すぐ傍の椅子に腰を掛ける。

「何時から始るんです、此館は」

と所在なさに憊う訊くと、

「一時半といふんですけれど、まあ二時ですわ」

「あ、然うですか」



言ひながら時計を見ると、一時を少し廻つてゐる。

折柄、支配人と主任辯士どが入つて来た。

「此人が主任辯士ですから」

と支配人は彼に紹介して、今度は主任辯士に、

「會社から電話の有つた見習ひは近藤と云つて此人だから、彼方へ連れて行つて、萬事君から話して呉れ玉へ」

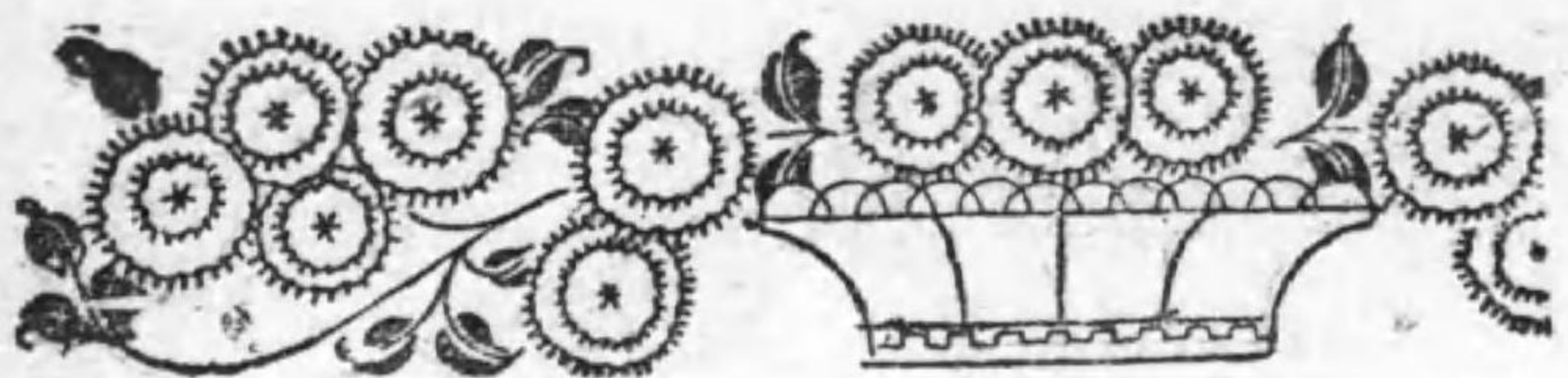
「あ然うですか……」

三十餘りの主任辯士は、ちよいと近藤の顔を見て、

「ちや君、此方へ来たまへ」

と先に立つて、彼を導いて行く。

婦人席の横手の物賣場を少し行くと、便所が有つて、その前に小さな



入口がある。無用の者入る可らずと書いた板片が打付けてあつた。

其處を入ると直ぐ舞台で、古びた映布が垂れてゐて、その眞後が部屋になつてゐる。疊敷なら六疊ぐらゐしか敷けまいと思ふ一室の、その片隅に小さな机が一胸置かれて、その上に台本や何やかゝ亂雜に置かれてゐる。

「當館は部屋が一つしか無いから、此處で科白士も皆居るんですよ」

と主任辯士は説明しながら、机の上を何か捜してゐたが、プログラムを手に持つて、

「君の持受ちは實寫物一卷ですよ、ナイヤガラ瀑布の光景だから、そのつもりで言つて呉れたまへ」

「どんな風に喋れば宜いんでせう？」



勝手が分らないので、近藤が恚う訊ねると、

少し馴れるまでは碌に喋れるものぢやないから、此處に映寫しますは世界で有名なナイヤガラ瀑布の實景でございます、どうか御見落しのないやうに御覽を願ひます。とこの位の事を言つて置けば、後は樂隊がやつて呉れるからね」

「あ、なるほど……」

「それに最初は客の方を見ないやうにして、二階の天井を眺めてゐるやうにすれば、絶句しないからね、忘れないやうに然うしたまへ」

「はあ有難う」
これで何時でも舞台へ出られると、少しは安心をして横を向くと、何時の間に来たのか二三人の科白士と年若い辨士とが、珍らしさうに自分



の方を見てゐる。我にもなくハツと思つた近藤は、

「僕は近藤やよひと云ふものです、今日から御厄介になります」
恚う言つて皆の前へ頭を下げる。

と樂隊が開演前の吹奏を始めだした。客も少しは入つて來てゐるらしい。

「ぢやね近藤君、この樂隊が濟んから直ぐに出て呉れたまへね」

と主任辨士が、命令するやうに言ふ。

「承知しました」

と答へはしたものの、今近畿分落着いてゐた胸が、急にドキ／＼して來た、樂隊の音が竭むと同時に舞台へ出なければならぬかと思ふと、今十分間でも二十分間でも、あの樂隊が續けてゐて呉れ、ば宜いがなど考



へた。果して満足に喋れるか何うかといふ不安が、胸を痛めて壓迫されるやうな気がする。

「尤う直ぐだらう？」

とセルの袴を気にしながら、映布の際に佇つてゐると、間もなく樂隊の音が止んだ、

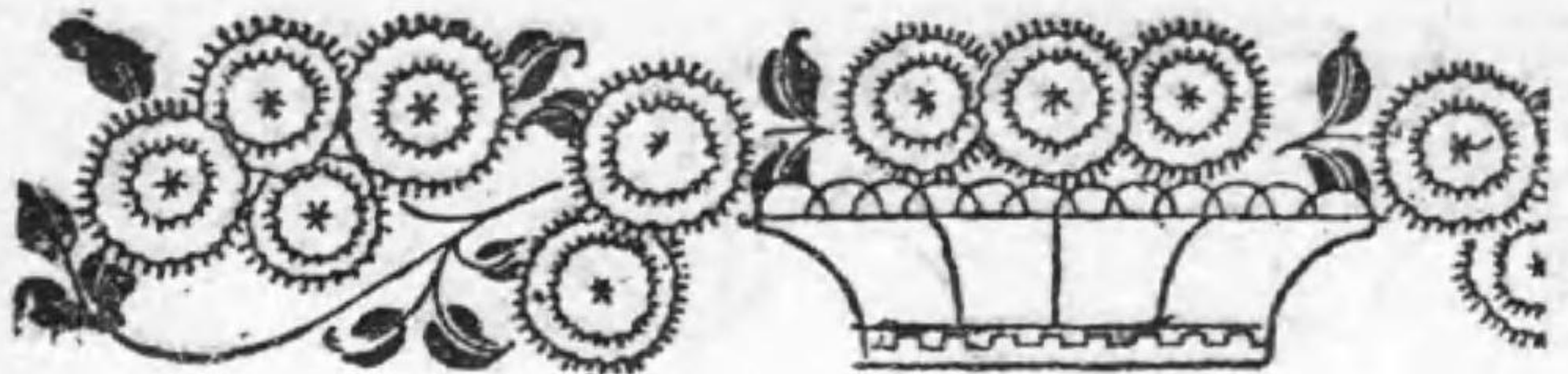
「さ頼むよ、君」

後から主任辨士が急立てる。

「ハイ」

と思ひ切つて舞台へ出ると、二十人あまりの客が眼前に腰を掛けて、彼の姿を見守つてゐる。

「此處に映寫しますは……」



二階の天井を眺めるのをウツカリ忘れて、客席の方を見ると、氣遅れがして言葉が切れた。

「世界で有名なナイヤガラ瀑布の實景でございます……」

誰か笑つてゐはしないかと思ふと、語尾が顛えて、又しても言葉が途切れる。慙うなると彼は上氣して頭はガン／＼鳴り出して、立つてゐる足が板に付かない。

「どうぞお見落しなく……」

「御覽を願ひますといふ終結がどうしても言へなかつたので、それを言はずに頭を下げた。」

「ヤア新米辨士や……」

「拙劣やなア」



こんな言葉が、何處からか耳に入ると、彼は眞赤な顔になつて、引込んで了つた。

部屋へ入ると、皆が輕蔑やうな視線を向けてゐた。

「随分難しいもんですな」

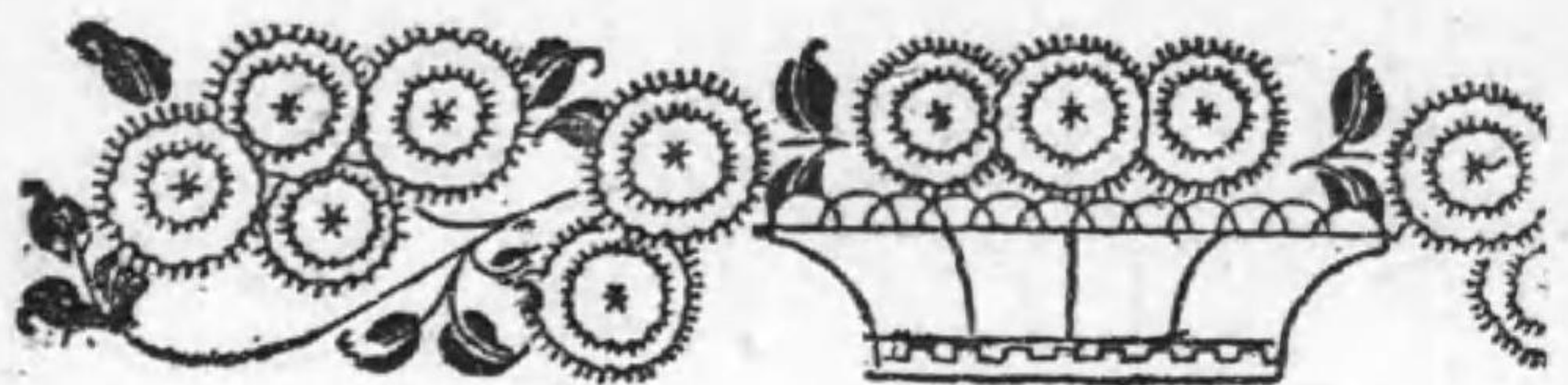
テレ隠しに憚う云ふと、主任辨士が、

「誰でも最初はあんなものさ」

と同情するやうに言つて呉れた。その言葉がまた馬鹿にうれしかつたのである。

やがて樂隊の音がやむと、先程の若い辨士が出でデブ君の滑稽物を説明した。

それが済むと、今度は新派悲劇で『迷ひの夢』が映寫される。囃子方の



老人夫婦が働らき出すと、三人の科白士と若い辨士と主任辨士までが、映布の横へ出て假色を使つてゐる。主任辨士までが假色に出なければならぬのかと思ふと、自分も追付け手傳はされるんだなと、近藤は情ない心持になつてゐた。

けれども此後にまだ活劇と舊劇とが有るのだから、第二回の開演までには二三時間の休息が出来ると思ふと、それまでは先づ安心とホツと息を吐く。すると其處へ支配人が顔を出して、

「近藤君、二回目の時には少し注意して絶句しないやうに遣つて呉れたまへ」

「ハイ……」

近藤は顔を背向けて返辭をする。面と向へばどんな不足を言はれるか



知らない、とさう思はれたので。

一一三

二回目の前説明は案じた程にもなく、どうやら憊うやう絶句せずには済んだ。明日からは尤う大丈夫だと思ふと、初めて重荷が降りたやうな気がした。

打出しが十時半で、若い女共が客席の掃除を済して、それ／＼歸つて行つて了ふと、今迄騒々しかった館内も、火の消えたやうに深閑として近藤一人が電燈の暗い部屋に坐つてゐるのが、たまたま心細くなつて來た。

「寝ると云つたところで、夜具などは何處へ入つてゐるのだらう。何故支配人に訊ねて置かなかつたらう」

もしかすると、自分の泊ることを忘れてゐて、それで夜具も出して呉れないのかも知れない……と憊う思はれてならなかつた。

「どうせ今夜一晚のことだ、夜具なしに片隅で居眠りをしてゐても辛抱は出来る」

尤うすつかり人が歸つて了つたものと思詰めた彼は、こんな目に遭ふのも成行だと諦らめた。

すると、人の足音が近づいて來て、

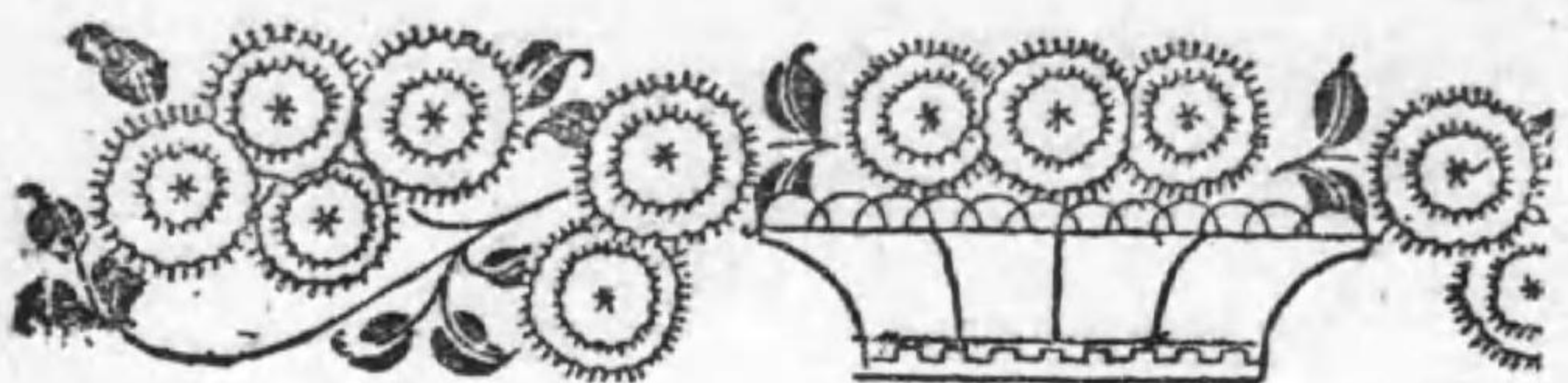
「まだ起きて居たのかね」

と五十近い親爺が禿げた頭を現はした。

「貴郎はまだ居たのですか」

見れば下足番の親爺なので、夜路に友を得たやうな心持で言ふと、

一一三





「私はな、一晚置きに交代で泊つてゐるんだよ」

と親爺は近藤の傍へ坐つて、腰の煙草入を取出しながら、

「お前さんは今日から来たので、何にも知らなかつたのだね」

「僕は又恂うして一人で泊るのかと思ひましたよ」

近藤は心丈夫になつて、元氣よく言ふ。

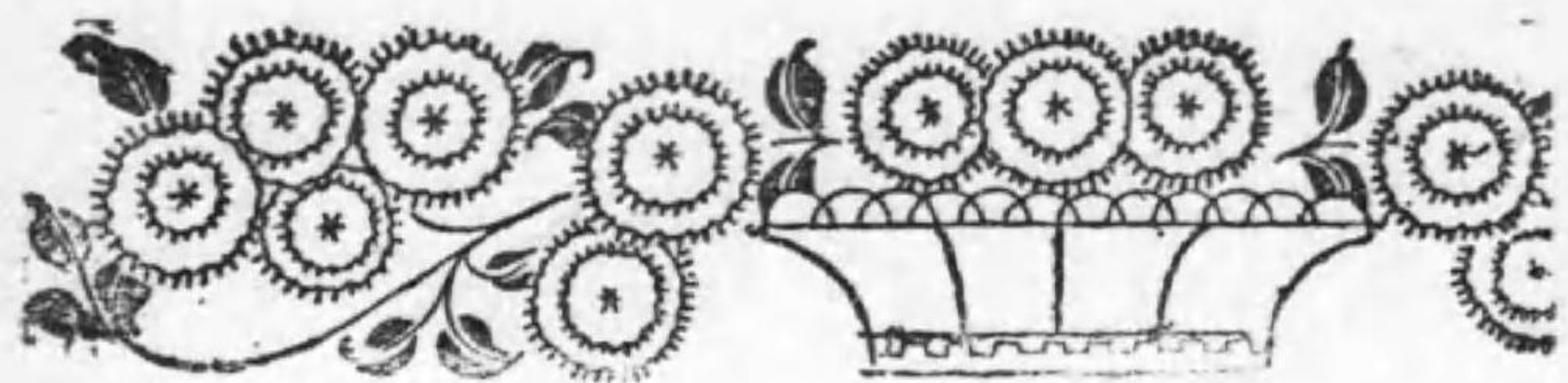
「然うだらう。初めて来た者は皆さう思ふんだよ。幾ら小さい小屋だつ

て、二人位は泊つてゐなければ、何時どんな事が起るか知れないからね」

「全くさうですね。ちや今夜は貴君と一緒に寝るんですね」

「此處で一緒に寝るのだけれど、夜具は二組あるよ……それから尤う火鉢には火はないかね」

「何を思つたのか、近藤に訊ねる。」



「澤山は有りませんが、少しばかりなら……」

圍爐裡のやうな箱火鉢を覗いた彼は、炬燵をする程寒くもないのにと

不審の眉を寄せながら。

「ちや、お前さんを使つて濟ないが、少し炭をついで呉れないかねえ。

私が好い物を持つてゐるんだから」

言はれるまゝに炭取を引寄せて、火鉢の中へ炭を足してゐると、何處

からか土瓶を提げて来た。

「茶を沸して飯でも食ふんですか」

と近藤が早合點をして言ふと、

「飲むと嬉しくなる薬の水を、沸すのだよ」

「薬の水とは……」



彼が變な顔をしてゐると、

「解らないかね、ソラ酒だよ。百薬の長つて言ふぢやないか」
親爺はニコ／＼しながら、土瓶を火鉢に掛ける。

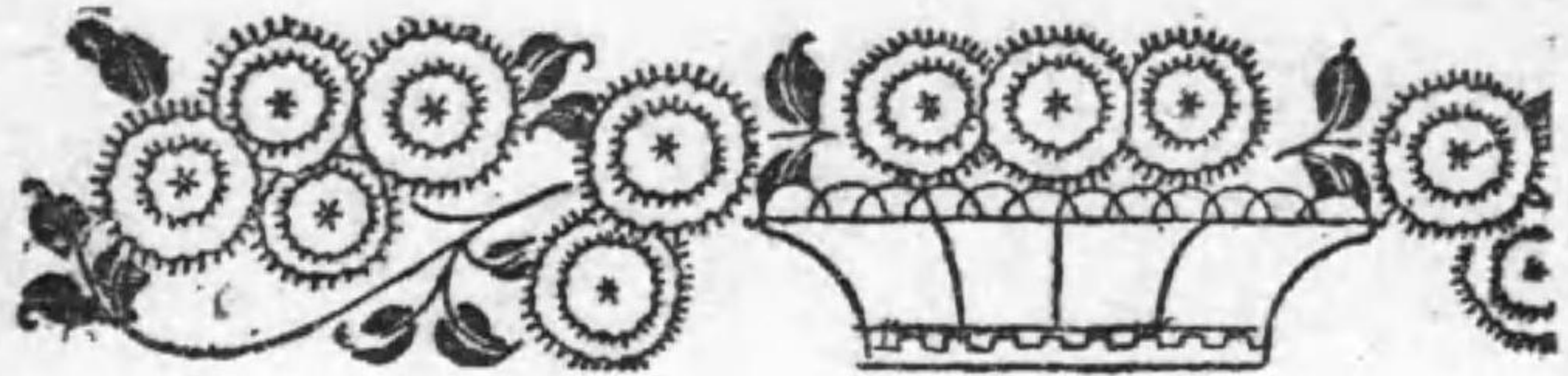
「なるほど、酒ですか」

「お前さんも嫌ひぢやなさ相だから、今夜は一つ知己になつた印に、二人で飲むと爲よう」

と親爺はドツカと腰を据えて、

「私はなア、毎晩此奴を飲らないと寝られないんだよ。それもね、食方は息子や嫁が稼いで呉れるもんだから、私の儲けた奴は大方酒になつて了ふんだよ」

「それぢや氣樂なもんですね、随分」



これは話せる爺さんだと思ひながら。

「まあ氣樂といへば氣樂なもんだが、私は淋しくて堪らないから飲むのさ。女房に別れてから十年以後、私はこの酒を相手に暮して来たよ」と親爺は急にしんみりした調子になつて、

「耻を言はなきや解らないが、私は女房から見捨られたんだ。それまでは酒なんか飲みたいとも思はなかつたが、女房の畜生が情夫を拵へて逃げて了つてからは、女といふ者に愛想が盡きて、酒を可愛がるやうになつたのさ」

言ひ終ると湯呑を二つ出して来て、

「さお前さんも飲みなさい。何も肴が無くて悪いけれど」と竹の皮包を開くと、天麩羅が少しばかり入つてゐる。



「有難う……ちや御馳走になります」
と一口飲んでから、

「その息子さんといふのは、實子ぢやないんですか」

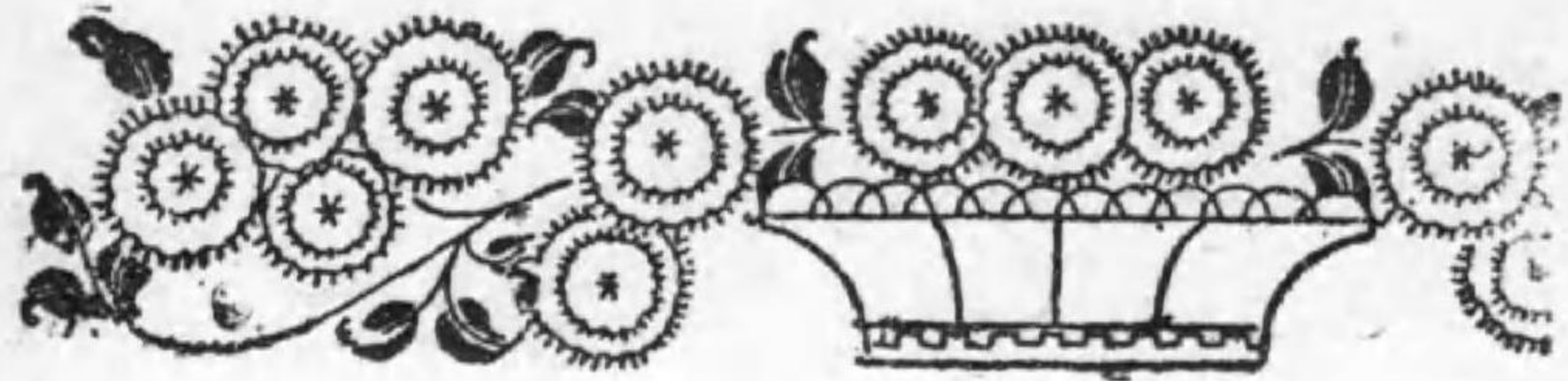
「子が有つたら女房も逃げまいが……兄貴の子を貰つたのだよ」

餘程好きだと見えて、咽喉をならしながらグイグイと酒を飲む。

「見受けたところ、お前さんは辨士になぞなる人とも思へねえが、身を
持崩した揚句だね」

「親には勘當を受けるし、食へなくなつたものですから、詮方なく……」

「然うだらうとも……去年の秋にも恰度お前さんのやうな人が、見習ひ
に入つて来たがね、それはまた好奇心から辨士にならうと云ふんだから、
永續きの爲さうな筈もなく、四五日もすると閉口して逃出したのだよ。」



お前さんもその口ぢやないか知らんて、へ、へ、へ」

と皮肉と笑談をうまく交わせる。

「いや人は兎に角として、僕はどんな辛抱をしてでも、一人前の辨士に
なる決心ですから」

別段怒りもせず、彼は自信をほのめかす。

「なかに、辨士と言つたつて、大して難しいもんぢやないよ。少し呼吸
さい解つて来りや、後は與太でも行けるのだよ」

流石は年を老つてゐるだけに、若い者を上げたり下げたりするのは巧
いもの。

「思はぬ御馳走で、好い工合に酔つて来ましたよ」

「肴が無くて氣の毒だが、まだ有るんだから遠慮せずに飲むのさ。支配



人からお前さんの事を聞いたもんだから、今夜は二合あまり餘計に買って来たんだよ』

一三〇

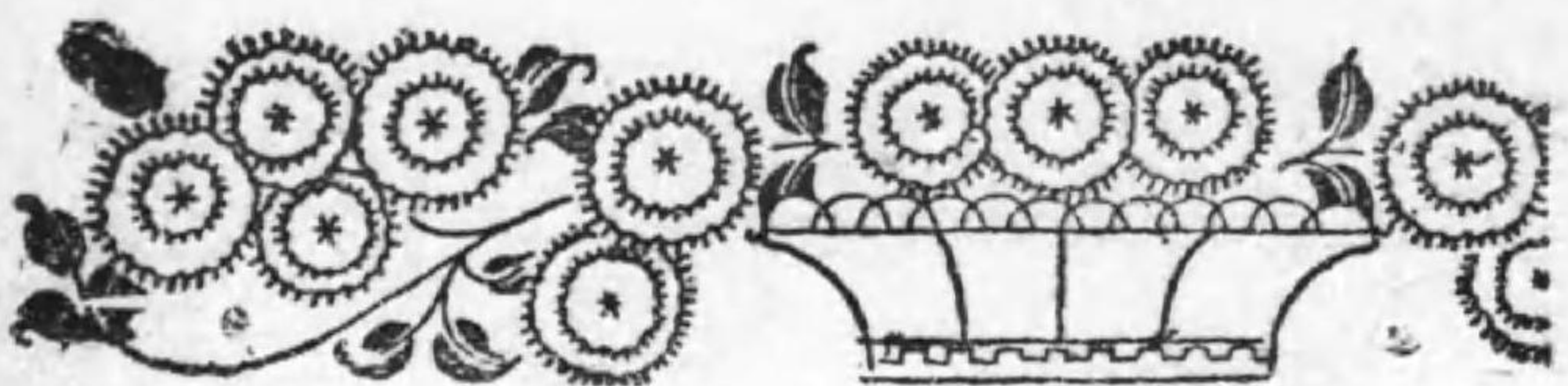
と向も湯呑に満々と注ぎながら、

『若い間だからと云つて、餘り無鐵砲な事を爲ちや不可ねえ。三年五年は夢の間だからな、悪い事は決して見習はねえやうに爲なきや、年を老つてから私のやうに苦勞をするからね』

尤う湯呑に三杯足らずも飲んでゐる親爺は、顔を赤くしながら、意見を始める。

『それは僕も十分考へてゐるんです。成功するまでは悪い方へは走らない心でゐます』

ぼつ／＼煩さくなつて来たが、御馳走になつてゐるのだから、どんな



事でも聞いてゐなければならぬ。

『元來辨士なんでもものは、洋服を着たり袴を穿いたりしてゐても、此方人等と變りはないのさ。勘定を貰つた足で松島へ惚込んだり、淫賣女に鼻毛を読まれたりするんだよ。此館の主任辨士を見ても解るがね、四十に近い年齢をして、家にや小供の三人も有りながら、給料の半分も持つては歸らないつてんだから、お神さんこそい、面の皮で、火の車に追はれて内職をしてゐるんだとさ』

『彼の人があるのですか』

そんな事位百も二百も承知でゐても、親爺の合槌を打つ爲めに、驚いたやうな顔をする。

『辨士に限らずすべて藝人といふ奴は、外見ばかりが立派さうで、内部



へ入つて見りや、何處も同じ秋の夕暮だよ」

「然うでせうねえ。外見倒しと云ふ奴です」

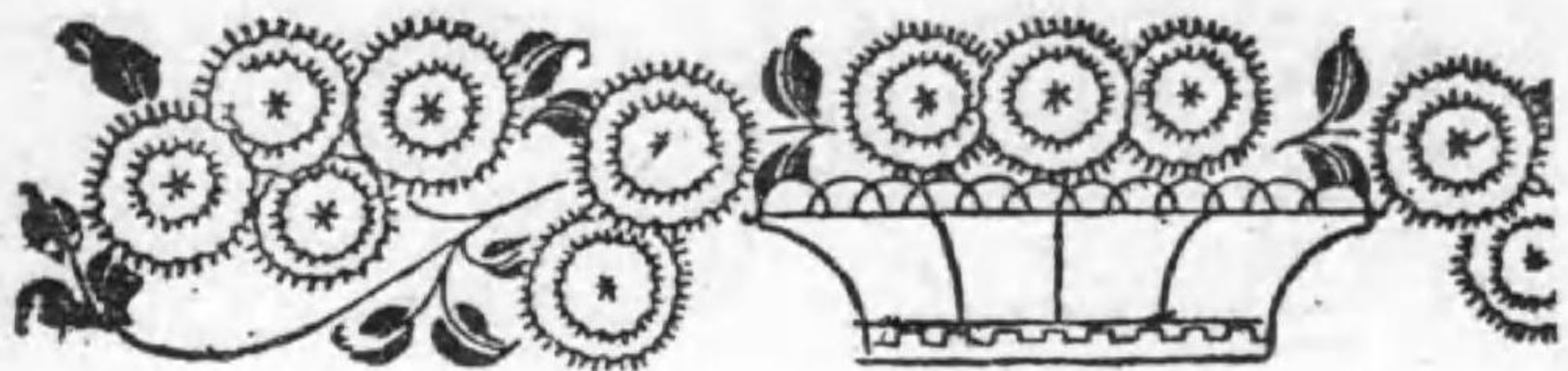
「憊うして來なすつた以上は、辛抱して見るのも宜いが、眞實と云ふと良くないねえ。日々墮落して行くんだから、幾ら心を確に持つて身を慎んでゐたところが、朱に交はれば赤くなる道理だよ」

酔が廻つて來るにつれて、親爺はますます喋り出す、何時になつたら止むのか分らない。

「いや良く解りましたよ。僕は十分注意してやりますから……」

少々眠くもなつて來たし、此上長く引張られては堪らない、と彼はさう思つてゐる。

「どうやらお前さん眠さうだね。私は残つた酒を飲んで了ふから、お前



さんは蒲團を出して寝るが宜いよ。ソラ彼處の隅に幕が掛けてあるだらう。あれが蒲團だからね」

親爺の指さす片隅へ行つて見ると、煎餅のやうな垢付いたのが置いてある。是れで寝るのかと思ふと情なくなつたが、詮方なしに引出して來た。

「ちや、お先へ寝ますよ」

憊う云つて彼は夜具の中へもぐり込む。春の夜とはいへ深更のことなれば、スカ〜として肩先が薄寒い。けれども、パンに有付いて手足を伸すのだから、間もなく安心をして、夢路を辿つたのであつた。

七 泣面に蜂



「ちや、君に細君が出来た譯なんだね」

「仲人もなしに雑作なく連れて歸つた女だが、謂はゞ細君といふ格だねえ」

「果して永續がするか知ら」

「僕の考へちや、どうやら圓滿に行きさうなんだよ。何しろ情意投合つて奴だから」

軽い音を立て、降る春雨の夜を、慙うして井村と長髪先生とは話合つてゐる。

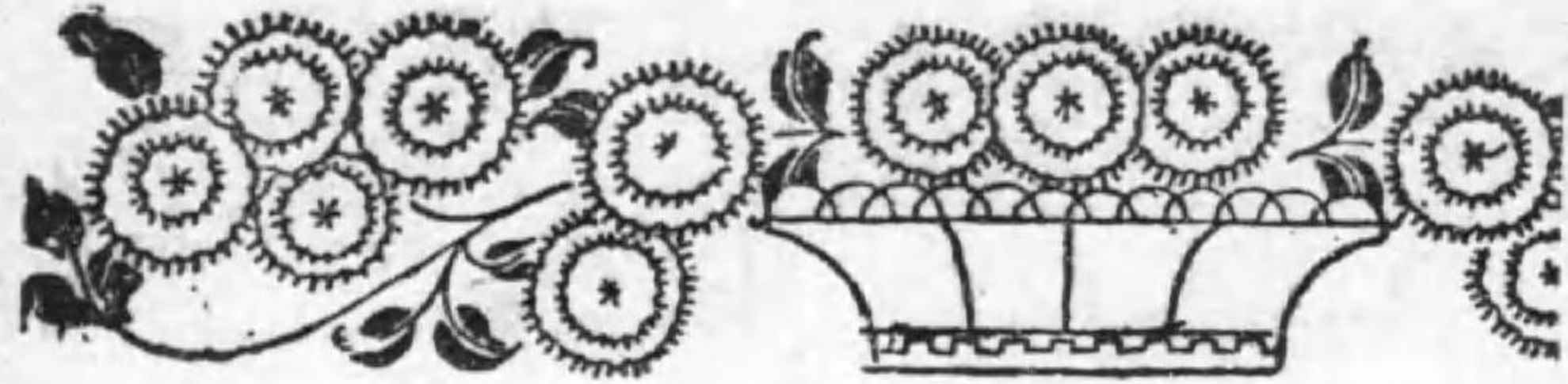
井村はお雪を連れて歸つた心うれしさを、わざ／＼言ひに來たのである。どうだい僕も色男だらう。と言つた自惚が鼻の先にブラついてゐる三人の中で僕が先鞭をつけたのだぞ、と言ふ自慢が眼元や口元にウヨウ

ヨとしてゐる。

ところが長髪先生、例の皮肉眼でデロ／＼井村の顔を見ながら、心の荒んだ女が當になるものか、今に馬鹿な目を見るに定つてゐる。それを知らずに自惚れてゐるなぞは、癖氣の骨頂である。と慙うした嘲笑を言葉の裏に包んでゐる。

「堅氣の娘でもどうかすると、亭主を亭主とも思はずに、勝手な眞似をするんだから、況して浮氣商賣の女なんかは怪しいもんだよ」

「ところが、お雪に限つてはそんな心配は少しもないんだ。僕の云ふ事は何事によらず唯々諾々で、心から僕を想つてゐて呉れるらしい」
自分ながらに、ちと言ひ過ぎると思つたが、此位に言つて置かなければ信用しないと考へたので。





「兎に角、さうして君が満足をし依頼をしてゐたならば、二人の間も圓満に行くだらうが、得てして酷い目に逢はされるんだからね、折角用心したまへ」

一三六

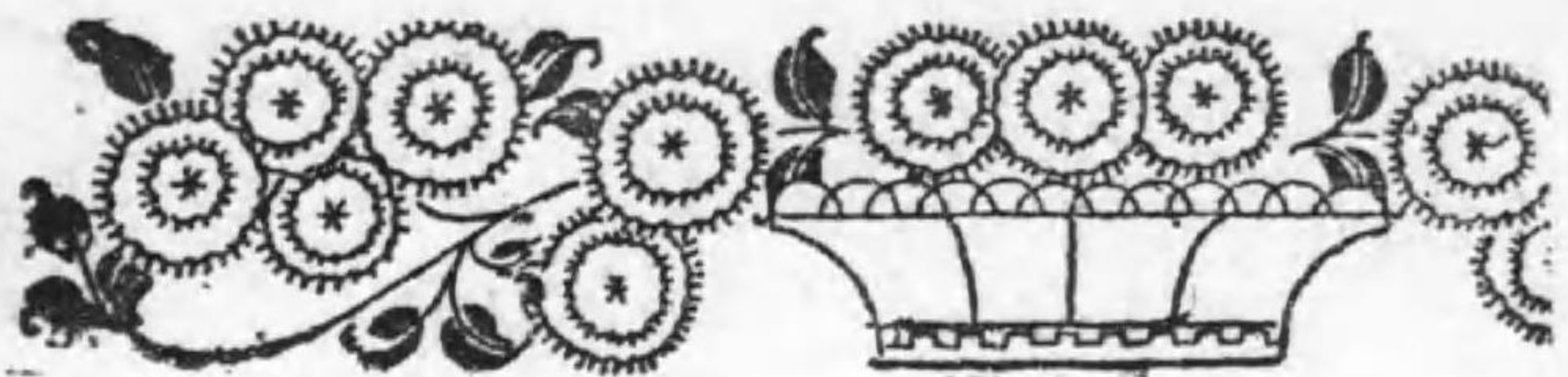
「有難う……暇な時に一度来て様子を見てくれたまへ。仲居女としては品格も有るしね」

何處まで自惚が強いのだか想像がつかない。世にも稀な美人を嫁にしたやうな口吻。

「時に近藤君はさうして居るだらうね」

井村は恚う云つて、さすがに氣懸りらしく言ふ。

「會社へ入るんだと言つて僕許で泊つて歸つたきり、尤う四日餘りにもなるが、まだ顔も見せなければ消息もないんだよ」



と長髪先生も心配らしい顔。

「ちやうど酒を飲んでゐた時だから祝盃を擧げて行き給へと言つても、見向きもしないで出て行つて了つたので、僕も何がか氣になつてならな

いよ」
「あの晩近藤もそんな事を言つてゐたよ。得體の知れぬ女を連れて歸つて、差向ひで酒なんか飲んでゐたから、胸糞が悪くなつて飛來して來たんだつて……」

「得體の知れない女で、胸糞が悪くなつた……」

井村は少からず癢に觸つたらしい。

「まだ其他にも何か言つて憤慨してゐたよ……そして君許へは一度も行かないかね」

一三七

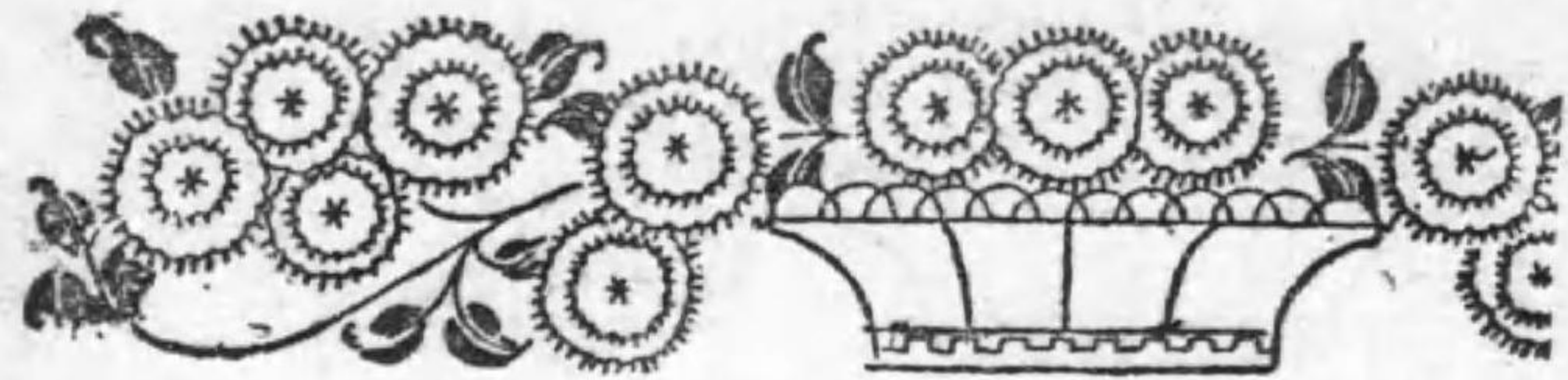


「一度ぐらゐ來たつて宜ささうなもんだと思つてゐるんだが、端書一枚寄越しやしないんだ。僕もあんな風で氣まづい別れやうを爲てゐるんだから、此方から訪ねてやつても宜いんだが、會社と聞いただけで、何處の何會社だか分らないものだから」

「それが僕にも分らないんだ。三人も間柄で隠立をする必要もなし、また物を隠した事のない近藤だけれど、どうしたのか今度は何も言はなかつた。何れ落着いたら遊びに來て委しく話すよ、て言つた限りで行つたんだからね」

「不思議だね、どうして居るんだらう」

「先生のことだから、會つた時に知らせば宜い位で、平氣でゐるんだよ必とね」



「然うに定つてゐるよ……時に君は今何を書いてゐるんだい。本屋の仕事は」

「今かね……」

と長髮先生は居住ひを直して、机の上から書きかけの原稿を取出して「うぬばれ日記つて奴を書いてゐるんだ。つまり自惚男が失敗をする有様を描いてゐるんだがね、食ふ爲めの文筆は實際嫌なものさ」

「しかし僕等と違つて、家に引込んでゐて出来るのだから氣樂なものだ僅かな月給でテク／＼歩きも感心しないよ」

「ところが、人から見ると浮いた金儲けをしてゐるやうで、その實肩の凝る仕事だからね」

「全く生活といふ奴はうるさいもんだね」

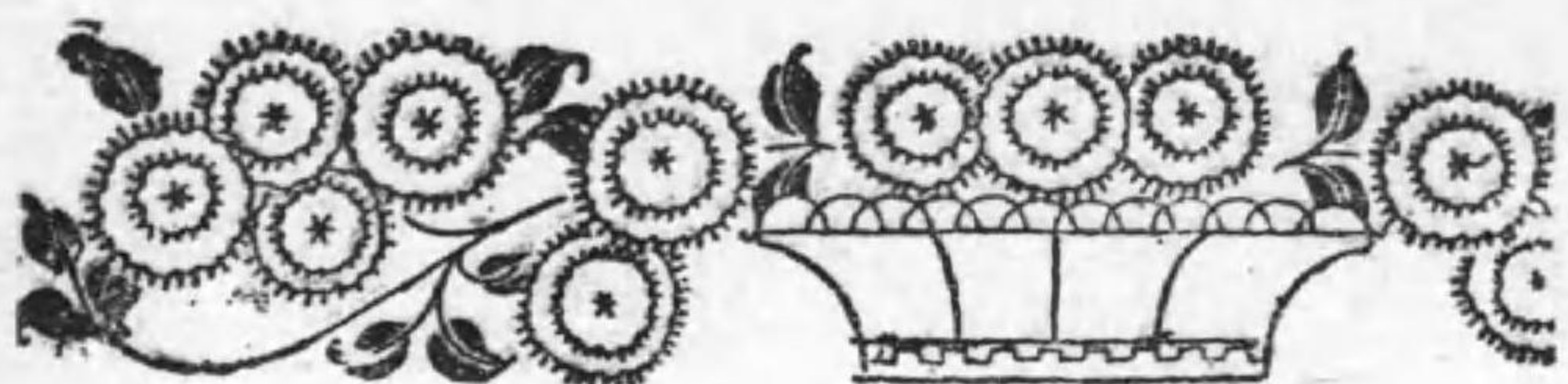


と井村は深く感ずつたやうに言つたが、
「今夜は一つ僕が甘い物を奢らうかね」
「うむ、御馳走にならうか……ちや下女を呼んで買ひにやらさうか」
と長髪先生、手を叩いて下女を呼ぶ。

井村が晩飯を食つて、長髪先生を訪ねるべく出掛けた後、約小一時間も経つたと思つた頃、お雪の情夫であつた男がやつて来た。

「お雪さんは居りますか……人から言托を頼まりましたので、ちよいと……」
とお神さんに、體裁の好い事を言ふ。

「お左様で……好い都合に家にいらつしやいますよ……あのお雪さん、



「お客様ですよ」

と軀を半分中の間へ入れて、大きな聲を出す。
すると早速お雪が降りて来て、姿を現はす。

「アアよく被入い。サアどうぞ二階へ」

お雪も人に氣取られないやうに、殊更他人行儀にして見せる。

「ちや御免を……」

と男は頭まで下げて二階へ登る。

「手前からの手紙を見たものだから、雨が降つて煩さいけれど遣つて来たよ」

とお雪の敷いて呉れた座蒲團を腰に當て、

「書生さんは留守かい」



「え、好都合に、お友達の許へ遊びに行つたのよ」

「其奴ア何よりだ……手紙には何か急に逢ひたいからつて書いて有つたが、一體どんな事だい」

「もつと委しく書かうと思つたけれど、廻らぬ筆で書くよりも、お前さんに會つて話した方が宜いと思つたからさ……實はね、いよく明日此家を出ようと思ふんだよ」

とお雪は、急に聲を低くする。

「ぢや書生つばを見捨て出るんだね」

「當然さ、お前さんに會はなくつたつて、どうせ永くは居ないのだからね」

「然うなりや、俺だつて働き甲斐があると云ふもんだ」

と男は満足さうに言ふ。

「それから妾ね、この大阪には居なくないと思ふのよ。何處で煩い人逢はないとも限らないから、遠方へでも行つて了つたら何うかと思つてゐるんだわ」

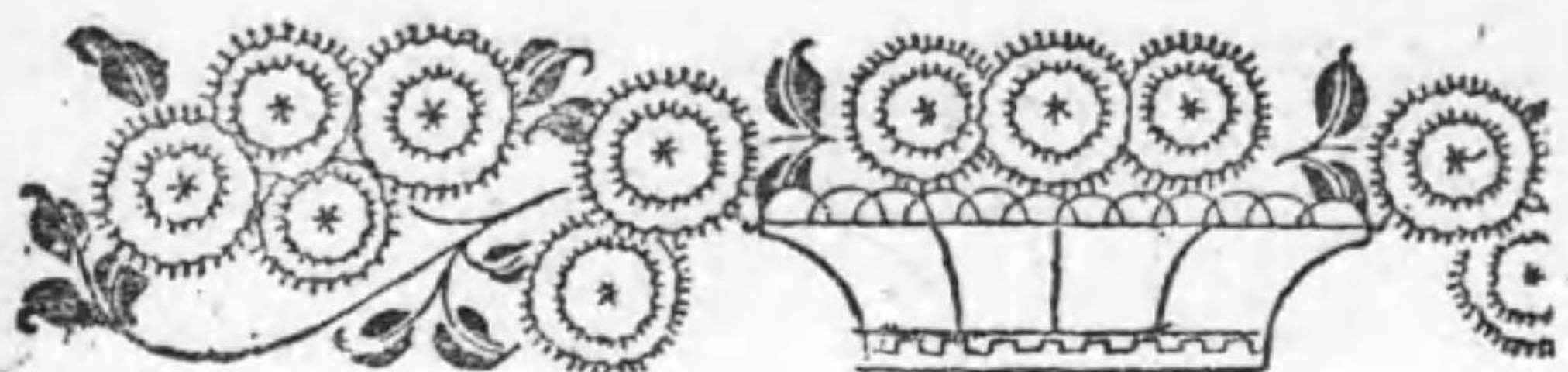
お雪は男の顔色を窺ひながら。

「さうだね、誰も知らぬ他國で暮すのも悪くはねえが、それには差當つて金が要るからね」

「旅費のことなら心配は要らないの、妾が巧く騙して都合するし、まだ他に考へも有るんだから」

とお雪は、呑込顔で言ふ。

「旅費さへ出來りや、何處で暮すも同じなんだから、手前が行きたいつ





てんなら、俺も行つても宜いよ』

『ちや、然うしてお呉れなの』

漸と落着いたと言はぬばかりに、

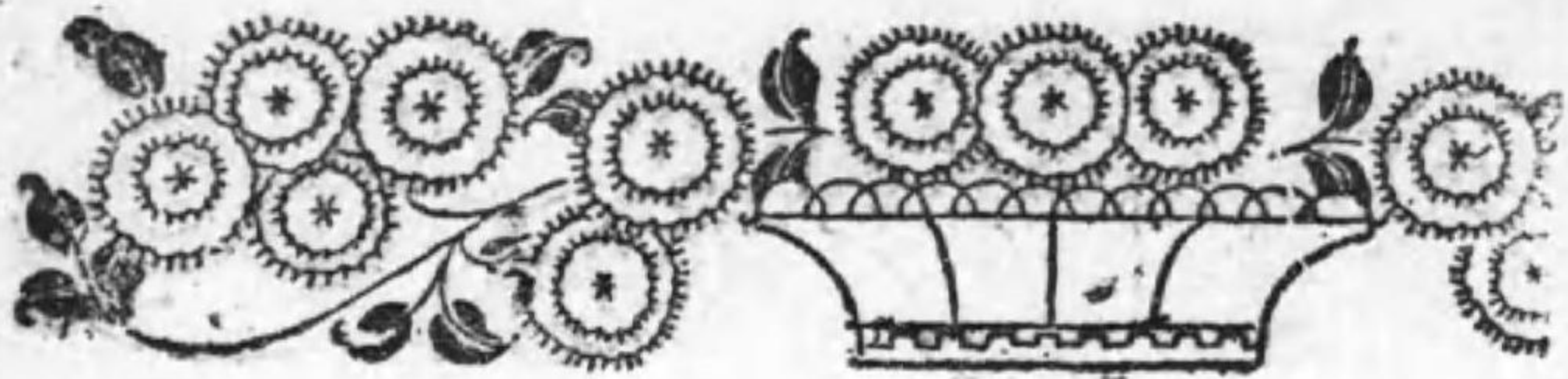
『昨日の正午刻にこの横町まで来てお呉れ、其頃に妾は此家を出るからね』

『好矣。それちや俺が横町で待つて居るから、萬事は明日の事にして……』

『だつて、行先きだけは今夜中に考へて置いて呉れなさや困るわ』

井村の留守を勿怪の幸として、二人はいろ／＼と明日の相談をした。

それでも階下の時計が九時を打つと、さすがに驚いたやうに男は腰を上げた。



『飛んだお邪魔を致しまして……』

と男は下駄を穿きながら言ふ。

『どうか又御緩りね』

と男を歸して了ふと、今度はお神さんに、

『よく降る雨ですわね。だけどこの雨が霽つたら急に暖かくなるでせうね』

と御機嫌取りのお世辭を振撒いて、さて二階へ登つて行く。

『何と云つて金を出させて遣らうか知ら。巧い口實を考へなければならぬ……』

こんな事を思ひながら坐つてゐると、急に頭が痛み出したので、お雪は夜具を出してその中へ入る。寝ながら思案をしようと云ふので。



すると、其處へ井村が壽司の折を提げて歸つて來た。

一四六

「今夜は気分でも悪いのかね」

寢床の中に入つてゐるお雪を見ると、親切さうに憊う尋ねる。

「いろ／＼考へると、起きちや居られなくなつて了つたのよ。悲しくもなつてね」

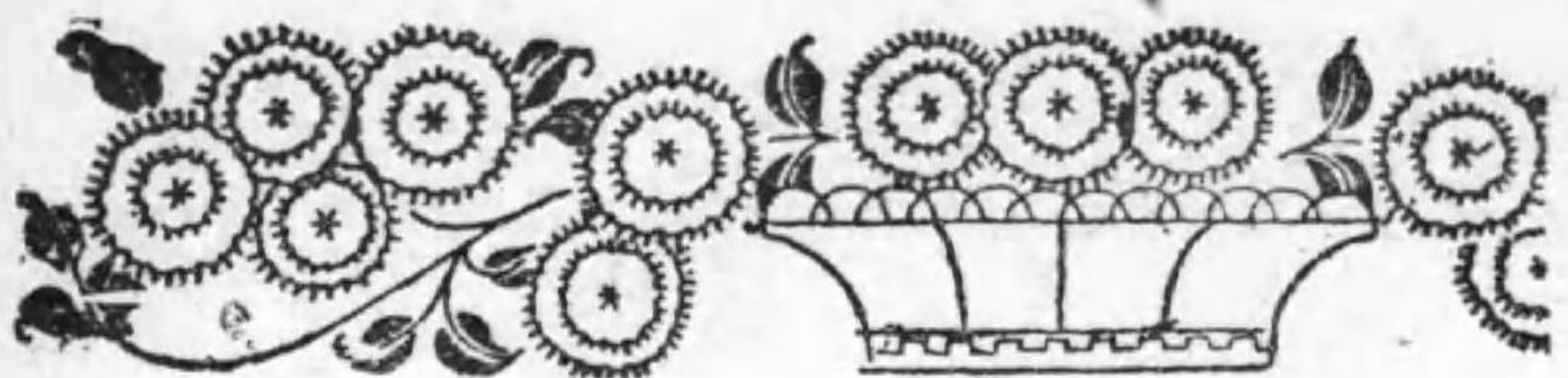
ど首を擡げたまゝで、さも味氣なさうな顔。

「雨が降るといゝんな事を考へるものだが、それかと云つて快々思つてゐた日にや遣切れないよ」

井村はお雪の枕元に坐つて、

「土産を買つて來たよ。甘さうだつたから壽司をね」

「それは濟みません……だけどね、今日といふ今日はほんとに我身が嫌



になつたのよ」

と顔をしかめて見せる。

「何をまた、そんなに深く考へたんだね」

餘り調子が變なので、井村も氣になりだした。

「女といふものは男と異つて煩いものでせう」

と突拍子もない事を言ひ出して、

「ヤレ着物の柄が悪いの、同じ着物を何時までも着てゐるのつて、それや全くうるさいものよ」

「それも然うだね」

と譯もなく調子を合せる。

「其處へもつて來て妾は着のみ着のまゝでせう。だから階下のお神さん



にだつて、どんな蔭口を利かれるか知れないと思ふと、それが悲しくて詮方がないのよ』

一四八

ちやうどヒステリー性の女が、一圖に物を思込むと言つたやうに。

『着物の一枚ぐらゐは何時だつて拵へられるぢやないか。そんな満らしい事は考へるだけ損だよ』

と井村は事もなげに言ふ。

『ちよいと絹の交つた着物でも、裏を付けてみると十圓位はかゝるわ』

『十圓位の事だつたら、何時でも僕が出して進るよ。だからそんな愚痴なんか言はずに、起きて壽司でも食ふのさ。人間は氣分を暢氣に持たなきゃ駄目だよ』

『ぢや、何時でも買つて下さるの』



お雪は今迄の氣苦勞はケロリと忘れたといふ顔で、夜具から出て坐る

『贅澤を言はれると困るがね……』

『それでは濟みませんけれど、今夜十圓だけ出して頂戴な』

お雪は此處ぞと言葉にも媚を持せる。

『今夜かい……』

さすがに井村は目を圓くする。

『明日の朝買ひに行かうと思ふんですから、今夜出して欲しいのよ。同じ出して下さるのなら今夜出して下さいな、ねえ貴郎』

と井村の顔を眺める。

『何時出すのも同じではあるが、今と云つて金が有るか知ら……』

聊か困るといふ顔付で言つたが、



「お前の銭入には幾らばかり有るかね」
「さうね」

とお雪は財布の中を調べて見て、

「三圓五十銭ほど有るわ。だつてこれは世帯の方ですから費へないんですよ」

「ちや詮方がないから僕の方から十圓出さう」

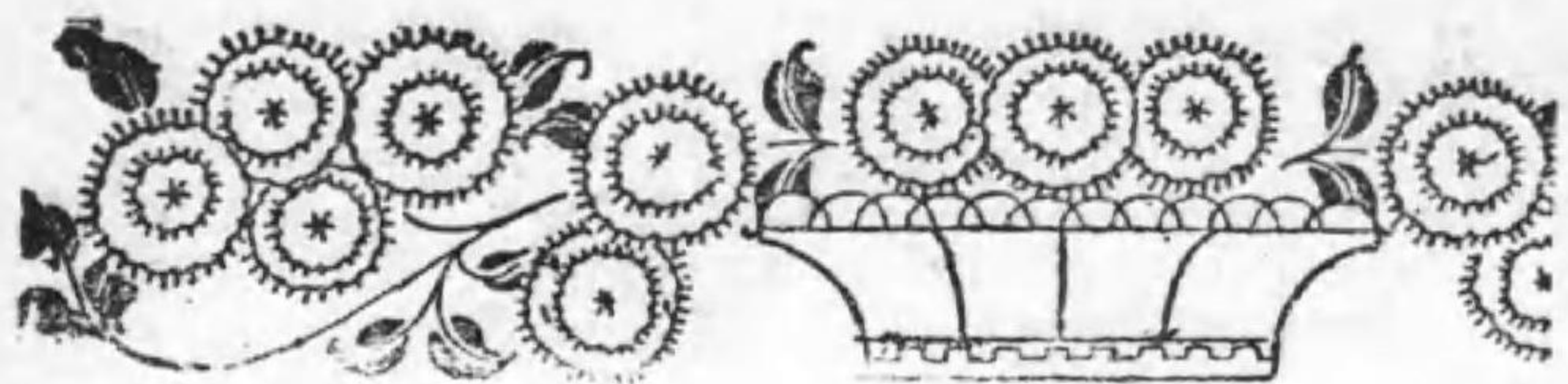
と銭入を取出して、中から紙幣を一枚抓んで、

「今日前借をしたばかりだよ」

「どうも有難う」

とお雪は手に受取つてから、

「その代り生活の方を儉約しますわ」



人の心は解らないもの、こんな馬鹿を見ようとは思はなかつた……と今更後悔しても追付かない破目に陥つたのは、その翌日の夕暮頃であつた。

井村が毎日のやうに洋服姿で歸つて来て見ると、何處へ行つたのか姿が見えない。

「昨夜やつた金で買物に出掛けて、序だからと思つて何處かへ道寄りをして居るのかも知れない……」

と思つて見たが、何だか氣になつてならないので、階下のお神さんに

「お雪は何處かへ出て行きましたか」

「ハイ、あの正午前に何方へかいらつしやいましたよ」

「何處へ行くとも言はずにですか」



「大きな風呂敷包を抱へてね、貴郎が歸つて見えたら、机の抽斗に書いた物が入れてあるから、一言然う言つて呉れつて被仰つた限りですよ」
「机の抽斗に書いた物が……」

と鸚鵡返しに言ひながら、二階へ登つて机の抽斗を抜いて見ると、折角お世話にはなりましたけれども、都合が有つて今日限りお暇を頂きます。お金と着物とは暫らく拜借いたしますから、どうぞ悪からず思つて下さい。

ゆきより

とこんな事を書いた紙片が出て来た。

それを讀んだ井村は狐につまゝれたやうな顔をして、二三度繰返して讀んで見たが、

「やつぱり僕を捨て、逃げたんだ！」

鐵錠でガンと後腦を叩かれたやうな氣がして、

「……お金と着物とは暫らく拜借……」

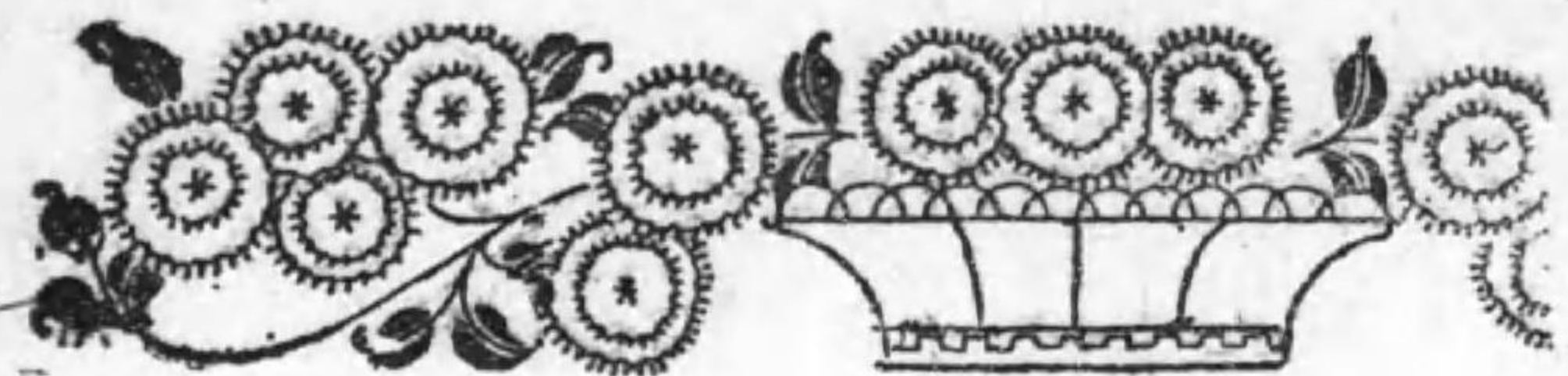
と不審さうに拾ひ讀みをしたが、氣が付いて衣箱の處を見ると、其處に懸けて置いた不斷着も羽織もない。

「アツ！」

と驚いて押入を開けて見ると、柳行李の蓋が明けたまゝになつてゐて中には一張羅の着物も、襦袢から帯まで残らず失つてゐる。

僕はこんな忌はしい手紙は書きたくないが、今の處では君一人が親友なのだから、何も彼も残らず書くことにする。

「女には決して肌身を許すな」といふ言葉を何かの書物で讀んだ事があ



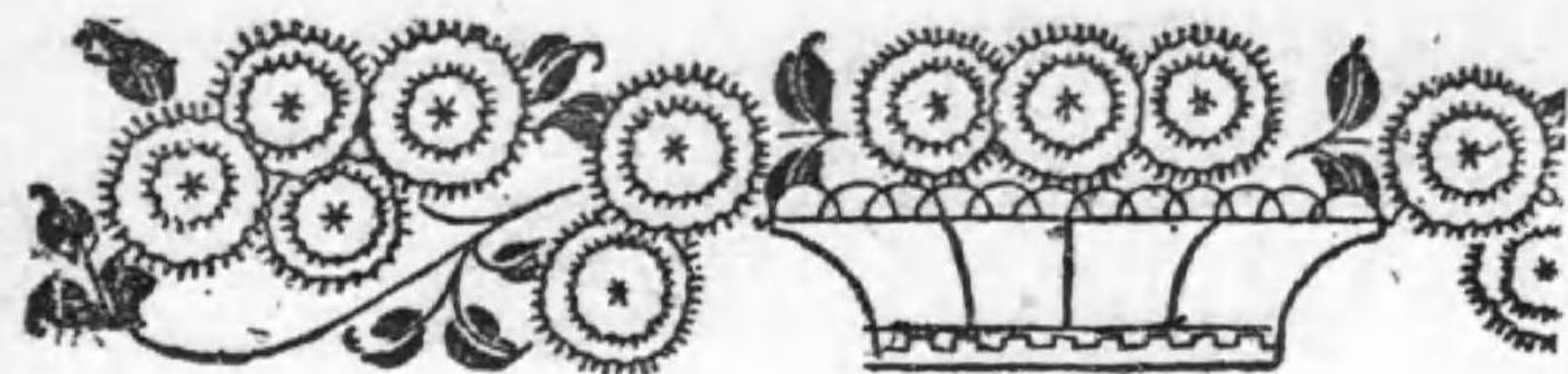


一五四
るが、僕は女に肌身を許しすぎて、飛んでもない酷い目に逢つたのだ
それも昨夜君の前で自慢さうに話したお雪にだからたまらないぢやな
いか。

それは今日の出来事だ。日暮前に僕が歸つて見ると、待つてゐる筈の
お雪の姿が見えない。其處でお神さんに訊ねて見ると、正午前に風呂
敷包を抱へて出た限りだと言ふんだ。それから机の抽斗に書いた物が
入れてあるからと言ふので、早速抽斗を抜いたところが、

「折角お世話になりましたけれど、都合が有つて今日限りお暇を頂
きます。お金と着物とは暫らく拜借いたしますから、どうぞ悪からす思
つて下さい」と恚う書いて有るぢやないか……。

それから調べて見ると、僕の不斷着から一張羅まで残らす持つて逃げ



て居るんだ。

僕は泣くにも泣けない馬鹿な目に逢つたのだ。泣面に蜂とは此事だら
う……。

直ぐにも君に會つて話したいのだが、癢に觸るやら口惜いやらで、迎
も出掛けて行く氣になれないので、取敢ず通知をして置く。

明日は商店の方を休んで、ムシヤクシヤ晴しに酒でも飲うと思つてゐ
るから、もし來られたら遊びに來給へ。待つてゐるから。

井村生

飯田兄机下

こんな手紙を書き終つた井村は、それをポストへ入れて來ると、二階
へも登らずに、事の次第を腹立まされにお神さんに話した。



「まあ、何といふ恐ろしい女でせうねえ。儂も少し變だとは思つたのですけれど……」

口善悪ないお神さんは、大層さうに言ふ。

「今度逢つたら許しやしませんよ」

と井村は力強く言つたつもりでも、その語尾は細く消えて行く。

八、酒、酒、酒

「よくも僕を騙したな、貴様のやうな奴は口で言つた位ちや駄目なんだから、これから僕が廻り殺しにしてやる……」

「へん、騙殺しが聞いて呆れるわ。騙されたお前さんが悪いんぢやないの少しばかりの給料を貰つてさ、妾が養へると思つてゐるのが大きな間違

ひで、逃げられるつて事が最初から分らないやうな、そんな唐變木だから馬鹿な目にも逢ふんだわ」

「此場になつて、まだ貴様は詫びやうとはしなひのか、自分が悪かつたとは思はないのか」

「そんな事を一々氣にしてゐた日にや、暖味屋の仲居は出来ませんよ。男を騙して金を奪るのが商賣なんですもの……」

「何を、生意地な。尤う一遍言つて見ろ！」

「言へと言ふなら幾らでも言ひますわ。女に鼻毛を讀まれて馬鹿を見た癖に……」

「よくも言つた。尤う我慢が出来ないぞツ……コラ待んかつ、コラお雪！逃げようたつて逃すもんか、コラ待てツ！」





井村はお雪に出會つて、そしてお雪を殺さうとしてゐる夢を見た。目がさめて見ると軀中が汗でビツシヨリになつてゐる。

「あゝ夢であつたか……」

寢床の上不起直つて、ホツと息を吐いてゐると、

「今朝はよくお寢みでしたね」

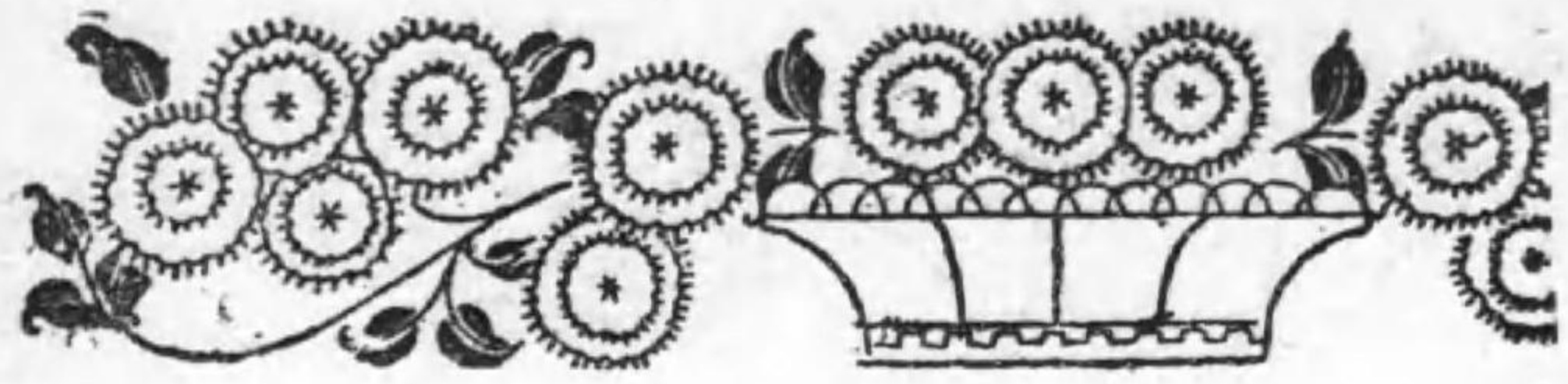
とお神さんが辨當を持つて來て呉れた。

「昨夜遅くまで寢なかつたものですから」

といくらか極りが凶さう。

「大變お顔の色が凶いやうちや有りませんか」

「今ね、お雪を捉へた夢を見たものですから、気分が悪くて……」



「それは不可ませぬね。何か賣藥を買つて來てあげませうか」

とお神さんは同情のある眼で言ふ。

「有難う……それでは濟んませんが筋向ひの酒屋から、酒を一升取つて呉れませんか」

「あのお酒をですか……」

お神さんは訝しげな顔をする。

「賣藥なんかより僕には酒の方が好いんです」

「ちや、直ぐに取つて來ますからね」

と氣輕に降りて行つたお神さんは、間もなく一升壺を提げて來た。

「お燭を爲なきやなりますまい……」

「イヤお燭なんか爲はのは面倒ですから、冷酒でやりますよ」



『でも冷酒は毒ですよ』

と憚う言ひながら降りて行く。

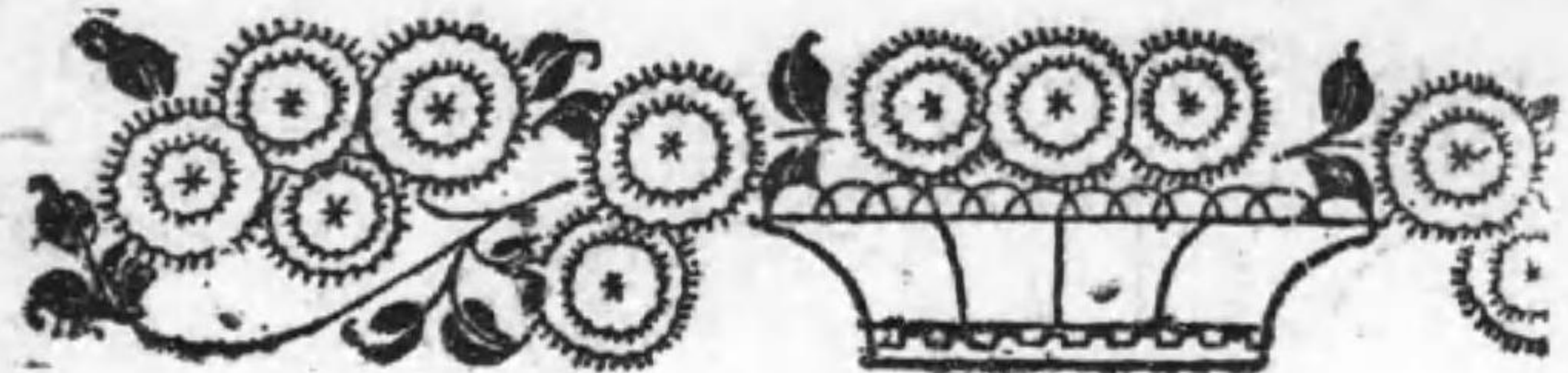
『今日は飲めるだけ飲んで、そして寝込んでやらう』

こんな事を思ひながら、コップに注いで飲み出したのである。

井村の頭脳は殆んど混乱してゐる。女に逃られた恨みと物を奪られた腹立しさが、巴の渦を巻いて、飲んだ酒が残らず頭脳へ上つて来るやうな、さうした苦しさを感じる。

『捜すと云つたところで、何處を捜して宜いか分りやしない……』

耳の傍で自分を罵倒してゐるやうに思はれてならないので、彼は狂人のやうに、耳を掩うて突伏して了つたかと思ふと、また頭を上げて窓の處を凝視たりする。



『オイ井村君』

と不意に肩を叩かれたので、氣が付いて振向くと、其處に長髮先生が笑ひながら坐つてゐる。

『今の先君の手紙が届いたよ。あれを読んだものだから、急いでやつて来たんだ』

『さうか……』

と言つたきりで、井村はまたコップを手にする。

『朝から酒を飲んでゐるんだね。冷酒は毒だよ』

『憚ういふ時には只だ酒あるのみだ。酒でも飲んでゐなきや、癢に觸つてならないもの』

『それや無理もないさ。馬鹿な目に逢つたんだからね』



と長髪先生は、井村と差向ひに坐り直しながら、

一六二

「しかし冷酒の爲めに身體を痛めるやうな事があつては、今後の活動が出来ないよ」

「活動がフ、……」

我と我を嘲笑つた井村は、

「僕のやうな馬鹿者には、どうせ活動なんか出来アしないさ。金や着物を奪られた上に、女に逃げられるんだからね」

「そんな自暴自棄を言ふもんじゃないよ。過去つた事よりも、前途を認めばそれで宜いちやないか」

さすがの長髪先生も、何と慰めて宜いか言葉を知らない。

井村は尙も冷酒を呷つて後に、今度は沈んだ聲になつて、



「手紙には幾らも書いてないから話すがね、全く僕はお雪に鼻毛を数れてゐたんだよ」

と恚う冒頭をしてから、

「どうも變だと思ふ事も有つたんだよ。と言ふのは三十あまりの職人風の男が二三度お雪に逢ひに来たんだ。尤も僕は一度も逢つた事はないのだが、お雪はその男を身寄の者だつてお神さんに話したさうだが、今から考て見ると、その男が情夫だつたに相違ないんだ。」

それから一昨夜君の家から歸つて來ると、お雪は寢床を敷いて寝てゐるぢやないか僕は氣になるから訊ねて見ると、自分は着のみ着の儘だから、着物を一枚買つて呉れと頼むんだ。僕にしたところで有り餘つた金が有る譯ぢやないが、女の事だから無理もないと思つて、前借をして歸

一六三

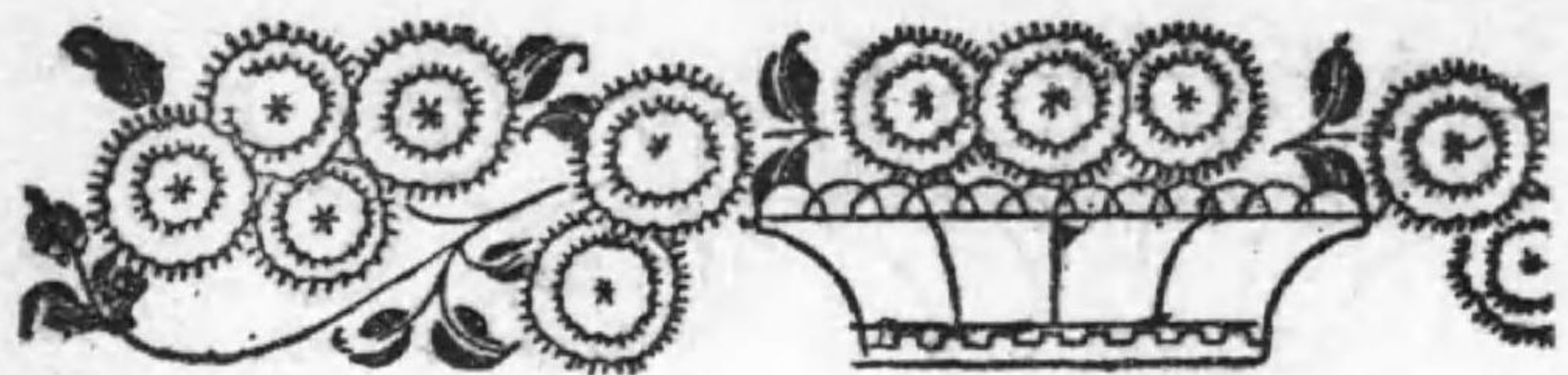


つた十圓を彼女に與たのさ……その金ばかりならまだ諦めもつくが、全部の衣類まで奪つて行かれたんだからね……君察して呉れ玉へ」
井村の音調は地の底へでも落ちて行くやうに、低くなつて力が失せてゐる。

「同情するよ、全くね……だが僕は、此場合に於て君に忠告したい事があるんだ。」

「忠告つて……」

「他でもないが、今後は一切野合的の女を家へ入れない事をだね。僕も從來に経験があるんだが、ザツクパランで誠に容易い代りに、さて恚ういふことになつて見ると、何處へ尻の持つて行きやうもない始末で、縦令それが永續したところだね、決して素人娘を娶つたやうに圓滿な家



庭を造れさうな道理がないのさ。相互に氣儘が出て来て面白くない月日を送らねばならなくなる……それでは少しも満足を得る事が出来ないから、自然浮氣の虫が飛出すといふ寸法で、折角うまく出来上らうとした家庭も、滅茶苦茶になつて了ふ例が澤山あるんだ。君にしる僕にしる、然うした破目には陥りたくはないからね」

まるで宣教師が信者に説教するやうな口調で、長髪先生自らも、自分の耳を傾けてゐる。

「イヤ好く解つたよ。これに懲りて彼如した種類の女には十分注意をするよ。元來僕は女性にかけては極く鈍い方で、少々色氣のある言葉でも掛けられると、すぐに早合點をして了つて、尤う自分の物になつたやうな心持になるんだ……僕一人ぢやない、近藤君でも同じことで、相當の

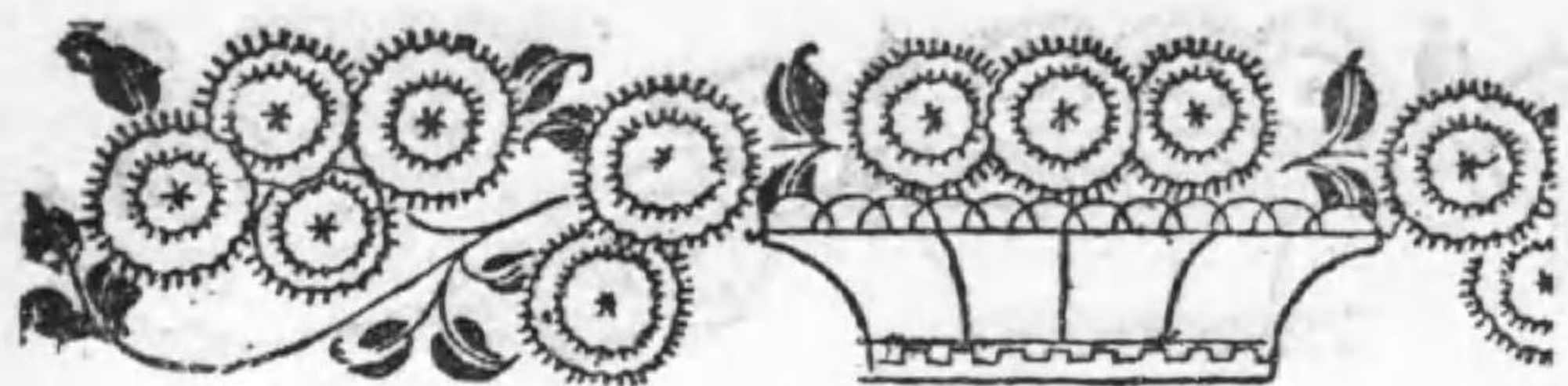


理解力を持つてゐながら、又しても満らない女に引掛つちや馬鹿な目に逢つてゐるんだ』

井村は大に自覺したらしい事を言ふ。すると、その後を引取つた長髪先生。

『それに嘘偽を装はなければ生きて行けない我々の生活が、餘儀なく結果を生ませる事が少くないんだよ。好きでもない女に惚れたらしい事を言つて見たり、嫌な物でも人前で甘さうと食つて見たりする現代的矛盾の生活が、抑も僕等をして墮落させて行くんだ。然うなると妙なもので同じ墮落をするなれば、どん底まで行つてやれといふ、病的な反抵に囚れて、知りつゝ、嘘偽の生活を續けて行くんだよ』

何時にがく話が墜るしく理に落ちた。それと心付いた長髪先生は、



『今更愚知を言つたりするんぢやなかつたハツハ、。ねえ君、お互に嘘の皮の衣を着て、大手を振つて歩かうと約した事も有るんだから、尤う理窟なんかは一切抜きにして、今日は二人で大に飲うか……』

と今迄とはガラリと變つた態度になる。

『宜らう。君が来て呉れたので、僕もどうやら元氣になつて来たよ』

『それは何より結構だ……と言つて酒を飲むとすると、どうも二人限りぢや面白くないね』

『こんな時に近藤君が居ると宜いんだがね、一體何うしてゐるんだらう』

『先生の事だから、僕等の事なんざ忘れて了つて、例の通り與太ついてゐるんだらうよ』

『お互に憊うして三十近い男が、暢氣さうな事はかり言つて暮してゐる



んだが、世間の人達は何と言つてゐるだらうね」

「必ず馬鹿者だと言つて笑つてゐるさ。女房を貰はふとも爲ないし、酒を飲んちや嘘を吐いてゐるんだから、無用の長物だと思つてゐるよ」

「無用の長物ならまだ宜いが、社會に害毒を流すバチリスかなんかのやうに、睨まれてゐるかも知れないよ」

「バチリスと思ふ奴には想はせて置くが宜いさ。然うしなきや生きて行かれないのだから、僕等は僕等の信ずる道は進むより他はない。生存競争に敗れたる者の眞理だから詮方がないよ」

「眞理とは上出来だ、負惜みも其處まで行けば確なものだハツハ、」と井村は、昨夜から今日へかけて、初めて笑聲を發したのである。

「君も到頭笑ひ出したぢやないか。人生須く笑ふ可しだよ。笑つてゐ



る間は忌しい觀念も起らなければ、また悲觀もしないからね」

「これから一つ何處かへ飲みに出掛けようか」

酔の廻つて來た井村は、すつかり元氣になつて、夜具を手早く押入へ投込む。

「幸ひ僕に帳附の利く家が一軒有るから、其處へでも行かうか」

「何處の肉屋だい」

「肉屋ぢやないよ、新町さ」

「オヤ、それぢや藝妓を招んで遊ばうてえのかね」

「無論さ。貧すればどてだよ」

「そいつは面白い。晝間の散財も亦一興だよ」

と井村は一人で調子に乗る。



富士の白雪や朝日で溶ける

むすめ島田は情に解ける

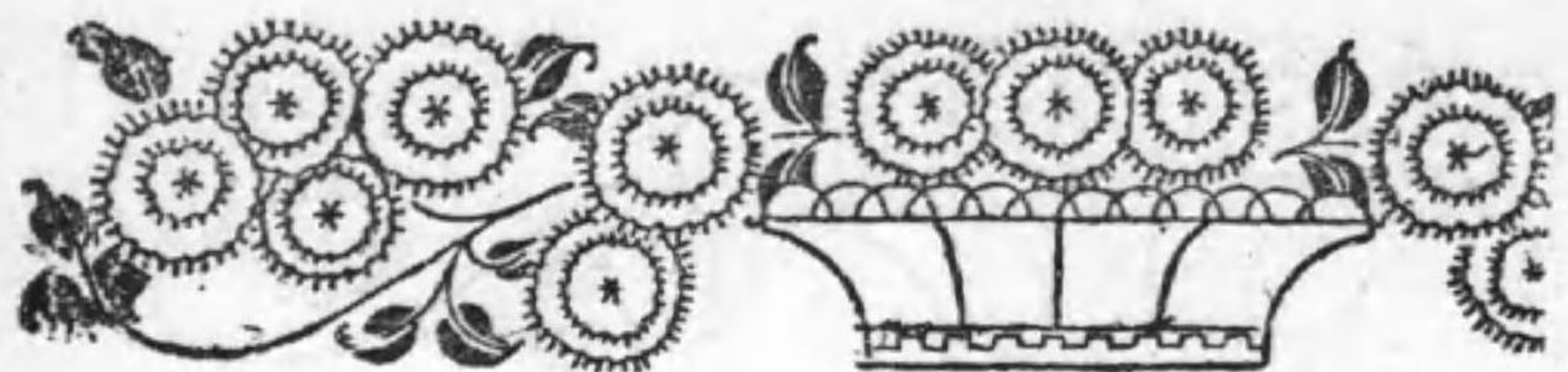
妾や貴郎に溶けて流れて

添ふ身ぢやないか……。

若い美しい藝妓の口から、陽気な三味の音につれて、恣うした流行唄が出て来ると、井村の心はそれに奪はれて了つて、

「今度は僕が一つ唄つて見よう……さ弾ひて呉れたまへ……沖の小舟は帆かけてはししーるー、舟は帆まかせー帆は風まかせ、妾やあなたあの一の心まかせになるのぢやわいーな……チャチャリコチャンかハツハ……」

「ほんとにお上手ですわね」



「聲調が美しいわ」

なぞと彼方からも此方からも賛辭を呈する。

「然う賞めて呉れると鼻が折つちまうよ」

それでも、井村の顔には得意の色が漲つてゐる。

「皆が唄るのに僕一人黙つてゐる譯にも行かんから、一つ都々一でも唸らうかね」

と長髪先生もつい釣込れて来る。

「此奴は聽物だよ。先生の都々一と來たら有名なんだよ」

井村は藝妓達に言つたつもりだが、聞えない振をして返辭をしない。

「脱線するかも知れないよ……梅にうぐひす、なかなかいーならば、思ひ切りましよーわかれーましよ……」



「どうだ巧いもんだらう」

と井村が感心したやうに言ふと、

「好い文句ね」

と中に交つた年増藝妓が、さも感心したやうに言ふ。

「文學者たる飯田君の自作だもの、梅に鶯啼かないなれば、思ひ切りましたよ別れましょ……と來るんだから堪らないぢやないか」

「旦那も一つ唄つて頂戴」

と若い妓がお世辭露出で言ふ。

「イヤ尤う止さう。君達も二味を置いて暫らくお話を爲ようぢやないか」と長髪先生大に粹を利かす。

「それが宜い。晝間で情が移らないかも知れないが、氣樂な話でも始め

よう」

井村も捌けて衰を喫し出した。

それから一時間あまりすると、二人は藝妓達に見送られて往來へ出たのである。

「好い氣持に酔つたぢやないか」

と長髪先生眼の縁を赤くして言ふ。

「君のお蔭ですつかり氣分が快くなつたよ。悲觀の虫も何處かへ逃出したと見える」

井村は明るい顔容になつて酔歩を運ぶ。

「憊うなつてこそ天下泰平なんだ。浮世の煩い事を忘れて了つてゐるの





だからね』

『所謂酒の有難さだね、酒なくて何の己が櫻哉とはよく云つてあるよ。酒に酔つた時の気分は何とも云へないね、まつたく』

『壓迫も反抗も何も無なつて、只だ浮いた陽氣心持ばかりなんだから壽命が延びるよ』

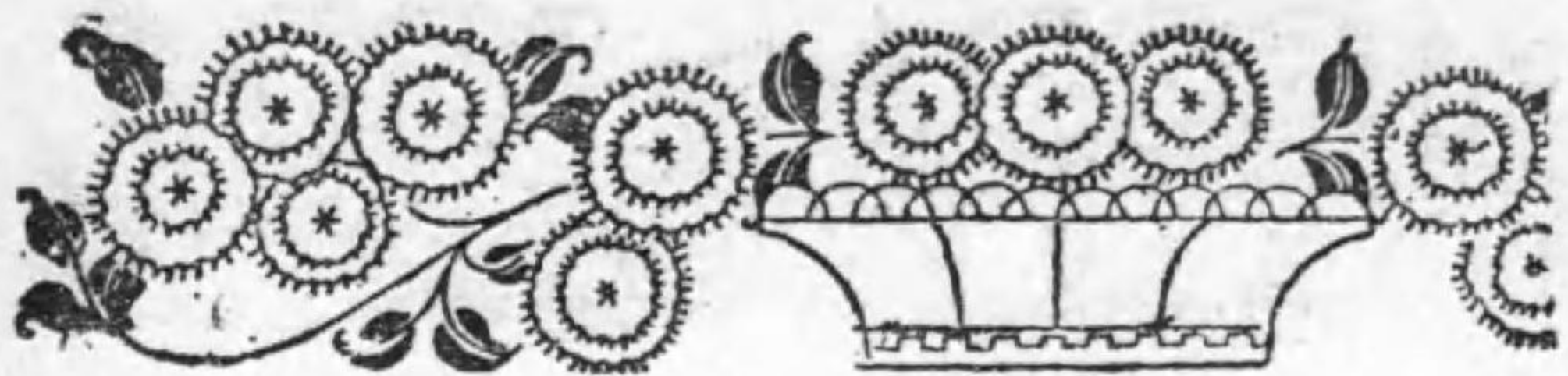
『其處に與太の本領を發揮して、ますく酒に走つて行くかね……どうだい、これから尤う一軒出掛けようか』

と井村が景氣よく言ふ。

『お茶屋へかね』

長髮先生、ちよいと迷惑さうな顔。

『お茶屋なやないよ。彼如して美形の姿を見且つ三味を聞いたのだから



今度は一つ食慾を充さうぢやないか、此處からは少し遠いが馴染の肉屋が有るから、なアに電車に乗れば譯はないよ』

『さうだね……』

と長髮先生考へてゐる。

『憊うなつたら、どうせ今日は休日だよ。三度の打止めといふ筆法で、終結を完うしようぢやないか。嫌でもないだろう』

井村は自分の慾を充さうとして、頻りに侷める。

『ぢやこれから行くことに爲ようか。その間に日も暮れるだらう』

『日が暮れると我々の世界さ。すべての物が美しく輝き出すからね』

『パツと電燈が點ると同時に、だらけた氣分が急に緊張るから不思議だね。一名を夜の男と稱つてもいい位だよ』



こんな事を喋りながら、二人は電車道へと歩いて行く。

一七六

九、百 年 目

活弁の見習いに入込んだ近藤やよひ、最初は僅かばかりの前説明も満足に言へない辛い思ひをしたが、二日三日すると、根が人を人とも思はぬ與太助の事だから、舞台馴も人よりは早く、もの、五日も経つと落付が出来て来た。

「君は一日々々に見立つて説明が巧くなつて行くよ。此分なら今暫らくすると、短かい滑稽物なら喋れさうだね」

と主任辯士は殊の外の進歩に、少からず望を抱くやうにもなつた。「簡単な物なら心配は有りますまい」



と近藤も聊か自惚れざるを得ない。

「君が早く活劇の説明が出来ると、僕等も楽になるのだがね」

「しかし、難しいでせうねえ、活劇になると」

「聲の抑揚や情を含ませる事は第二としても、長く喋り続けられるやうにならなくちやね」

何うして調子が分るものかとはばかり。

「精々勉強する事にしませう」

と近藤やよひ、主任辯士に御機嫌取りを言つて、横を向いて舌を出す心持で、傍を離れた。

彼は此館へ来てからと云ふもの、井村や長髪先生の事を思出したことがない。新生活に入つた心で動搖ばかりではなく、親友とはいへ苦しい



時には三度の飯も分合ふといふほど、心の中を割つた親密でない爲めに意氣相投して酒を飲んだり遊んだりする事と違つて、慙うして自分一人が別天地へ離れて了ふと、ついぞ思ひ出す機會が無つたのである。

しかし井村とは假令三月でも同棲して、二人の金を合せて遊んだ事もあるのだから、本来ならば一度や二度は思ひ出さねばならぬのだが、別れ際があんな態であつたので、自然忘れるともなく忘れてきたのであつた。

七一八

ところが今日近頃になつて、フト井村の事が思ひ出された。何故とはなしに、一度會つて見たいやうな氣にもなつて來た。

『あんな女を連れて歸つてゐたが、今でも仲好く暮してゐるだらうか。男も女を可愛がり女も男に縋るといふ、情緒纏綿たる有様を續けてゐる』

か知ら』

慙う考へて見ると、日頃女から好かれた例のない井村だから、必と女の方から逃げられるに定つてゐる。よし半月や一月はあに儘で暮せても三月以上は迎も満足に行きさうに思はれない。

『あまり調子に乗つて、馬鹿な目を見なけれや宜いがね……』

と慙う吐くと、今度は自分の自惚が首を出して來る。好男子ではないが何處となく女好きがするらしい。顔に愛嬌が有ると皆が言つてゐる。『慙うして辨士になつてゐれば、必と一人や二人の情婦は出來るに相違ない』

舞台では新派悲劇の假色に皆が出て喋つてゐるのに、近藤一人が部屋にボンヤリ坐つて、愚にもつかかい事を考へてゐると、





「オイ近藤君、君は何か奢ならければならないよ」
と若い同僚がやつて来て話掛ける。

「何故僕が奢るんだ、理由がないよ」

「有るから言ふのさ。恚うくだと一言云へば、君だつて奢る氣になるよ」

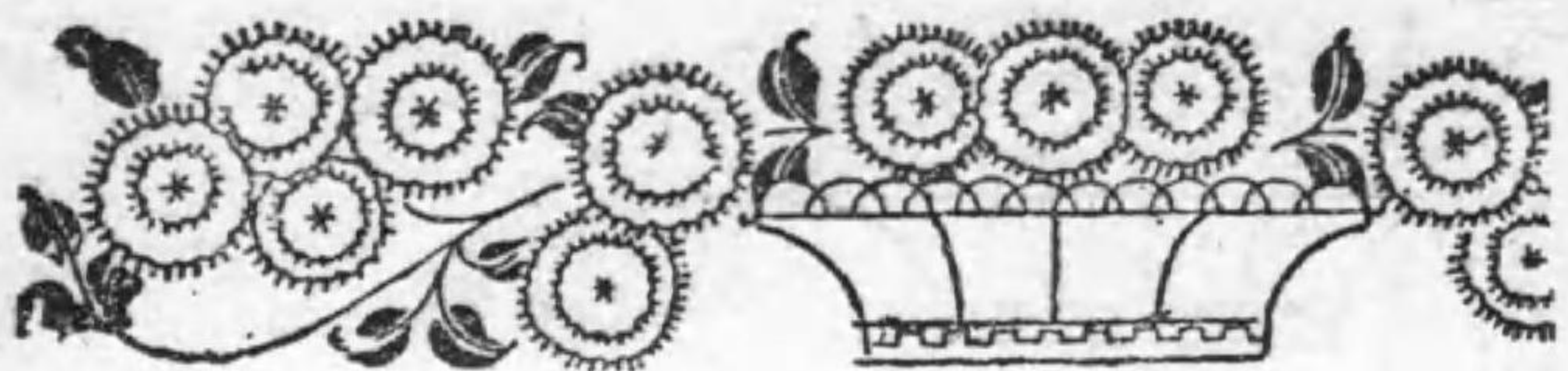
と若い男は眞面目らしい顔で。

「ちや言つて見給へ、奢るべき事だつたら僕も男だから、必と奢るよ」
何事かは知らぬが、自身に不利益な事ぢやないと思つた。

「ちや言ふがね……實は君の顔を見に来てゐる女が有るのさ」

「僕の顔を見に来る女？」

「どうだい、これだつたら奢るだらう、ね君」



「嘘だらう、そんな事を云つて僕を擔がうと思つてゐるんだらう」

と眞には受けないが、満更嘘偽ではないやうな氣もする。

「嘘偽か眞實か次に君が出た時に、二階の婦人席を見て見給へ。必と君の顔を見詰めてゐるから」

「ちや眞實なんだね」

と初めて心の中でニツコリする。

「年の頃は二十か一の丸顔で、今日で三日も續けて来てゐるんだつて、僕も人から聞いて来たんだよ」

「さうか……」

「意外なやうな、また當然のやうな心持がする。

「若し明日も来るやうな事が有つたら、何か奢りたまへよ」



ど若い男は近藤の肩を軽く叩く。

「奢つても宜いよ、若し然うだつたら」

「色男は異つたものだね」

憊う冷かすやうに言つて、若い男は舞台へ出て行く。

「もしも夫れが眞實だつたら……」

同僚の言葉を信じ切つては居ないが、どうやらそれが眞實のやうに考へられてならない。

さうなると、次の出番が待遠しくなつて来た。早く自分の出番になつて、その女の様子が見たい。どんな眼で自分を眺めてゐるか、それを早く確かめたい。

「萬一自分の出るまでに、歸つて了ふやうな事は有るまいか……イヤイ



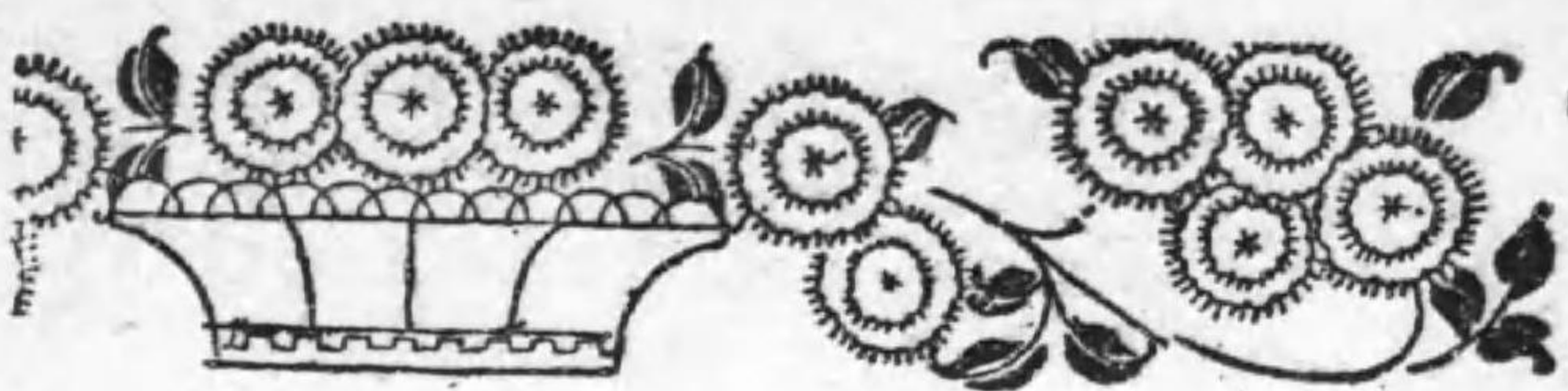
ヤ自分の顔を見に来てゐるとしたら、必と僕の出るのを待つてゐるに相違ない。早く自分の出番になると宜いかなア」

近藤は落着を失つて、彼方此方歩き廻る。果はどんな女か先へ見て置かうといふ氣になつて、人知れず便所へ降りる處から二階へ上つた。

そして密に此方から眺めると、二階の婦人席には十人餘りの客が居るけれど、二十前後の女は二人しか居ない。その中の一人は正しくハイカラの丸ぼちやである。映畫の方を熱心に見てゐるので、確かなことは分らないけれど、色の白い十人並の女らしい。

「よし、彼れだな」

彼は口の中でつぶやきながら、残惜さうにして階下へ降りたのである。「やがて新派が終りを告げて、活劇が始まつて若い同僚が一卷目の説明



をしてゐる時に、

「近藤君、今機械場の方から通知があつて、九條からまだ舊劇の映畫が廻つて来ないさうだから、もし間に合はなかつたら、實寫を先へ寫すさうだから、そのつもりで居て呉れ給へ」

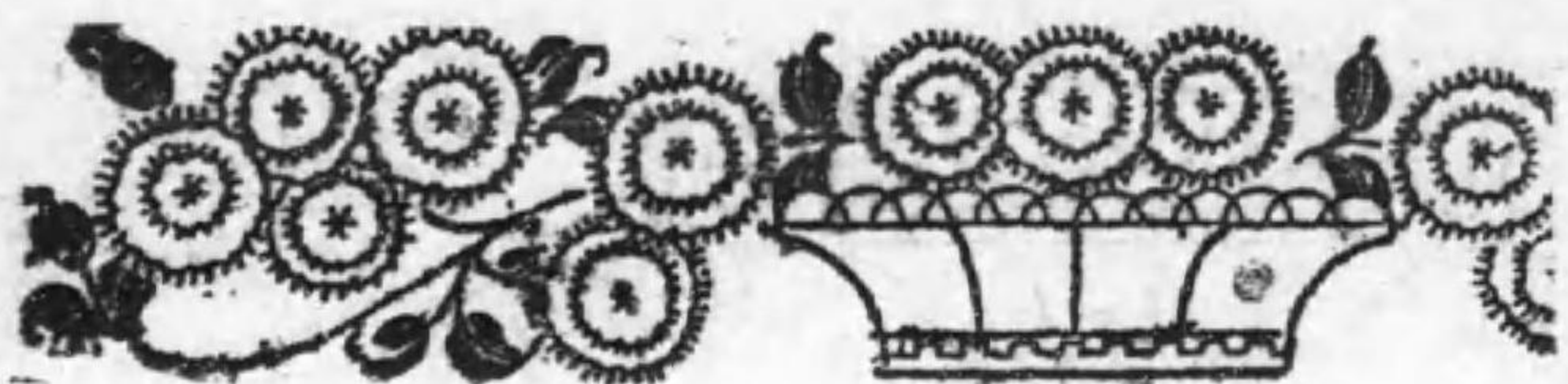
と主任辨士が恚う言つたので、

「ハイ、承知しました」

と彼は内心打悦びながら、快く受ける。

「なるべく間に合しないで、實寫を挟んで呉れるやうに……」

恚う思つてゐると、彼の望み通りに舊劇は間に合はなかつた、一時間半ばかり早く女の顔が見られると、満足に思ひながら舞台へ出ると、チラと見た横目に丸ぼちやの顔が映つた。



「此の處は舊劇でありますが、都合で實寫を挟んで御覽に入れます」

恚う云つた言葉にも、何時になく重みが有つて、流暢に云へたやうに思はれた。

「どうだつた君、まだ居つたらう」

と部屋へ入るのを待つて、若い男が人に聞えないやうな、低い聲でさやく。

「あ、僕の方を見てゐたよ」

思はず悦しさうに言つて、後でハツとした。

明る日になつて見ると、その丸ぼちやの女は今日も来てゐる。映布の横から覗いて見ると、大きな圓い眼で舞台の方を見ながら、頻りに菓子



一八六
か何かを食つてゐる。ちやうど自分の竹つてゐる處へ、ちよいく視線を投げてゐるやうな気がしてならない。

『いよく僕の顔を見に来てゐるんだ！』

持つて生れた自惚れがニョキ／＼と頭を出す。

『しかし、慙うしてお互に黙つて見てゐたのでは、何時まで経つても心の通じさうな筈がない』

斯う考へると、何とか手段を講じなければならなくなつて來た。

『女といふものは謹み深いものとして、言ひ寄るのは大低男の役である昔からそんな態になつてゐる……さうだ、此方から誘出してやらなければ、彼如して毎日通つて來て呉れる女に對しても氣の毒だ。今日は一つ思ひ切つて手紙でも與つてやらうか知ら……』



近藤は夢中になつて考へた。その末が女の便所へ降りるのを待つて、人知れず袂へ手紙を入れるに限る……と斯う決心した。

貴女が私の爲めに毎日來て下さるといふその篤いお心は、私の感謝するところだ。貴女の白い顔や明るい眸は、私の胸に愛の女神のやうな暖かさをおぼえさします。

私と貴女とは一日も早く、握手しなければなりません。お互の密のやうな愛情がもつれ合つた時には、果してどんな心持が爲るでせう？ 私には貴女の氣分が十分に解つて居りますから、何時でも貴女の傍へ行きます。どうか都合の好い時を知らして下さい。

けふ

近藤やよひ

人に隠れてこんな手紙を書いて了ふと、細い目に笑を浮べて、大切さ



うに懐中へ納つた。

それからと云ふものは、間がな隙がな二階の方ばかりを眺めてゐて、今にも降りるか、尤う腰を上げるかと、そればかりに氣を奪られてゐたすると、彼の心が通じたものか、女はツと立上つて、便所の方へ降りて来た。

『いよく成功が近づいて来たぞ』

と一人でよろこんで女と擦違ひになると、

『もし貴女……』

と小さな聲で言つたと思ふと、手早く手紙を女の袂へ投込む。

『まあ、失禮な人！』

と女は少し顔を赤くしたが、そのまゝ、見向きもせずに行つて了ふ。



『あの顔は何といふ恐い顔だつたらう？まるで睨付られてゐる顔だつた……有難うとも言はずに行つて了ふなんぞは、女の態度としてちと受取れないね……だが娘心といふものは、すべて彼如したものかも知れない胸の中では彼如も爲たい斯うも云ひたいと思ひながら、さて其場になつて見ると、思ふ通りに出来ないのだらう』

自分で勝手に道理をつけて、自分一人で嬉しがつてゐる近藤は、打出しが濟んで他の者が歸つて了つた後でも、しきりに女の事を考へてゐた。

『今夜は馬鹿に考へ込んでゐるぢやねえか、どうか爲たのかい』
と初めて来た夜に酒を飲まして呉れた爺さんが、例の飲み支度をしながら云ふ。



「別に考へても居ないけれど、戀人といふ事が考へられてね……」
と寢ようとも爲ないで、爺んの前に坐る。

「戀人つてえと情夫の事だね……」

「さう、お互ひに惚合つた二人が、晴れて夫婦になれる時が來たら、ごんなに嬉しいだらう」

「それや又格別のもので、他の者には解らない楽しみが有るよ……すると、お前さんに情夫でも出來たのかね」

と爺さんは、どうやら臭いぞと言つた顔。

「いや、僕なんぞそんな柄でもないから、情夫など出来る筈もないがねソラあの今映してる新派の寫真に、お互に惚れてゐながら、到頭終ひまで口にも出さずに居るだらう。あれを見て急に考へ出した始末さ」

ウツカリ眞實の事を云つて、物にならない先に人にも喋られたら大變と、當意即妙の智慧でもつて誤間化して了つた。

「あ、寫真を見て考へ出したのかね……彼如いふことは凡て言はぬが花で、胸を打明けて了つたら芝居になりやしなよハツハ、」

若い者は氣樂なものだと思ひながら、爺さんはチビリ〜と酒を飲み出した。

その夜は九ばちやの女を夢にまで見ながら、近藤は九時前に目をさましたのである。

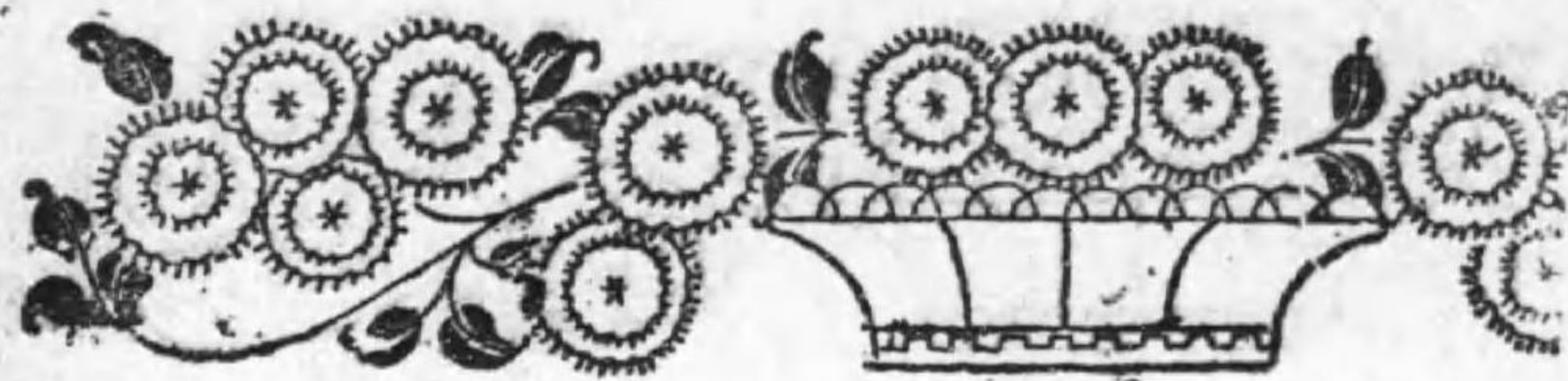
「今日來たら必と何とか返事を呉れるだらう、早く時間が経つて午後になれば宜い……あの手紙を読めば女の心は確に動くだらう、自分の言ひ





たい事を言つて呉れた優しい人、なんてもし思つたとしたら、僕はどんな幸福かも知れない……少らくは戀の酒に酔つてゐて、それから二階を借りるなら家を持つなりして……オイと呼ぶとハイと優しく返辭をするもう然うして頗る圓滿に行くやうになつたら、その時こそ井村にも飯田にも、是見よがしに見せ付けて遣らねばならない……先づこれまでは顔も出さないで居よう。突然二人が連立つて訪問したら、さぞ羨む事だらうなア。早く然うなれば宜いがね……」

實の處、近藤は若い同僚から調伏されてゐるので、丸ぼちやの女は決して近藤の顔なぞ見に來てゐるのではない。それなれば映畫が氣に適つて、續けて來るのかといふと、然うでもない。彼女には既に相愛の男が有つて、その男と嬌曳をする爲めに、寫眞を見てゐる態で男の來るのを



待つてゐるのであつた。けれども、近藤は何處までも、自分に惚れて來てゐるものと信じてゐる。信じてゐればこそ、恥を掻くとも知らずにあんな手紙までも書いたのである。

「近藤君、君は馬鹿な真似をしたぢやないか」

開館前になつて、支配人に呼付けられて恚う云はれた時に、彼は初めて夢からさめた。

「さうでなくとも、警察などでは君達に注意してゐるのに、萬一こんな事が耳へでも入らうものなら、君は尤う辨士が出来なくなるよ。そればかりぢやない。延いては私等までがお眼玉を貰はなきやならないんだ！ 彼が楽しんでゐた夢を無殘に破つた事實は、丸ぼちやの女から、支配人に宛に昨日の顛末を書いて、近藤の手紙まで同封して、今後は注意して下



さらないと困ります、とさへ書いて寄越したのである。

「恠うして私宛に言つて来たから宜いやうなもの、これが直ぐにへでも送られて見給へ、それこそ大變ぢやないか」

支配人は忌々しさうに言ふ。

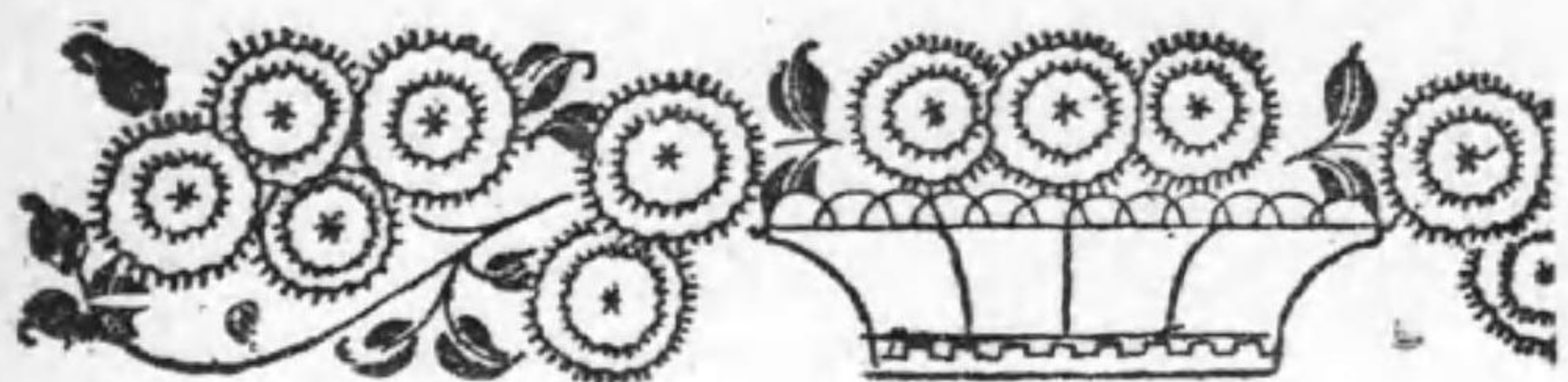
「何とも申譯が有りません、今後は注意致しますから……」

と近藤は頭をペコ／＼下げながら、心から悪かつたと悔ゆる。

「申譯が無いぢや濟まないよ。君一人ぢやなし、他にも若い者が居るんだから、此儘で濟ます譯には行かない……君も折角来て貰つたんだが、今日限りで此館を出て行つて呉れたまへ」

「あの今日限りで……」

と近藤の顔には物悲しげな影が漂ふ。



「其が當然の事ぢや無かね……置き度ても置く事は出来ないのだから」

「……」
彼は差俯向いて無言であつた。明日からバンに離れるのかと思ふと、不覺の涙がホロリ／＼とこぼれる。そして明日からの生活が不安でならなかつた……。

今様
梅
と
よ
み
終

日本學事部	作歌俱樂部編	藤原昇	暮秋述
全國諸學校案内	現代流行歌集	抱腹絶倒 アゴはづし	探偵小説 令嬢と新妻の怪死
本書は全国の學校所在地校名制度等全部集めたる書で學問を志し成功を望む者の虎の巻で滿天下の學生諸君は勿論父兄の是非一讀せねばならぬ書であります。	近頃大流行の新しい流行歌は全部この歌集にみたされて居りますこれこそあなたが日頃あこがれの今迄にない歌の全集です仕事に疲れた時や宴會に出た時獨り無聊を感める時に愉快に唄つて下さい。	内容がよくもこんなに珍におかしく面白く奇抜に出来たじゃないか此の本を讀んで大供でも小供でもおヘンが茶沸し腹わたが大んぐりかへりアゴが外れぬ者はあるまい讀む時おヘンとアゴの御用心。	活動寫眞のそれよりも不思議な奇怪な名探偵の活躍は實に讀者の膽を寒からしめ思はず面を覆はしむ兇惡無慘慘然肌に粟を生じ興味津々として一讀、巻を捲ふ能はざらむ眞に面白き讀物なり。
特價料 .35 送料 .04	特價料 .25 送料 .04	特價料 .50 送料 .06	特價料 .60 送料 .06

内務省納本濟

昭和四年四月五日
昭和七年九月十五日
昭和七年九月二十日
印刷發行
五版發行

不許複製

發行所

大阪市東淀川郵便局前

國民書院
攝替穴阪六九五七〇番

編輯者

宮本彰三

印刷者

國民書院印刷部

大阪市西區阿波座通三ノ三九

大阪市東淀川區木川町二八四

河内邦雄	書道研究会 編纂	禮法實習會 編纂	日本食料品 研究会編纂
ペン漢字のくづし方 辭典	五草書新辭典	諸禮法婚禮式 世間百般 挨拶の仕方	各種パンの製法
漢字は勿論カナ文字のくづし方まで掲げ漢字には一々振カナ附でいろは別に分類してある實に合理的の新案ペン三體のくづし方辭典である故に何人でも本書によつて始めてペン字を早く美しく書き得らる。	書聖の揮へる草書の深遠にて眞に極致に達せる一萬五千字を蒐集せる唯一の草書字典本書さへあれば速く美しくストラ〜とくづし字が自由に書ける索引だけで五十餘頁もある大冊、漢和辭典の代用ともなる。	本書は時候の挨拶より儀式出席招待訪問祝宴等を初めとして世間百般の喜び事の場合又は悔み病氣見舞及社交應接の仕方から日々の心得に至るまで一々親切に何人にも分るやう詳述せるもの。	道具も熟練もいらずに手軽に直ぐ出来て米より費用も少ないパンは口に適し美味で柔かく小兒病人虚弱者に最も好い焼パンカステーラアンパン其他何んでも自由自在に出来るやう親切に書いてある。
特 價 .80 送 料 .06	特 價 1.50 送 料 .12	特 價 .80 送 料 .06	特 價 .60 送 料 .06

萩の下露	花井法學博士序 河井廉一共著 澤田順次郎著	宮本彰三	記憶力研究会 編纂
男女戀愛の赤裸々	性慾の神秘	結婚初夜の新智識	應用 自在 記憶力増進法
昔はイモリの黒焼、今はこれ男女戀の奥の手魔術的極意の開放、戀せよ愛せ戀なくて何んの己が青春ぞ……本書を読んで應用すれば如何なる相手でも無我夢中に惚れさせる事が出来る實に痛快書である。	接吻、身も心も夢の如し、靈魂、涙ぐましく心と心、享樂、やるせない刹那の喜ぞ、肉慾堪らぬ性の瞬間！愛慾、胸と胸との囁きし淫蕩歌のやうな赤裸々さ！痴情亂淫極りなき彼等愛慾の殘骸は……。	親にも聞かれぬ神祕の謎が赤裸々に公開さる（内容の一部）結婚初夜の男女の心得、結婚の夜に新枕紙、當夜の閨房の構造、床入の心得、童貞を破らる際の花嫁の心理、處女非處女の判斷、交接の時期其他	記憶の良い人出世が早い如何に物覺の悪くい人でも本書を読めば記憶がズン〜と良くなる試験には榮々とパスする智能はグン〜と増へる記憶を良くし早く成功せんとする人は一日も早く本書を読まれよ。
特 價 .80 送 料 .06	特 價 1.20 送 料 .10	特 價 .70 送 料 .06	特 價 .50 送 料 .06

堀内秀太郎	松浦正一	遊藝俱樂部	萬國奇術俱樂部編輯
情熱の手紙	國民生活と法律	人に好かるゝ 隠し藝	手品奇術種あかし
<p>戀愛は人生の花で楽しいものであるそれは燃え立つやうな愛と涙であるその偽りのなき胸の秘密と戀の悶とを赤裸々に告白したもその言葉の深さ新鮮さその紅筆は宛ら讀者の胸に迫るものがある。</p>	<p>吾々國民の生活に最も必要欠ぐ可からざるものは法律であるしかし難解の法律書は甚だ素人には近寄り親しめないを遺憾と思ひ女小供にも判る様且つ日常生活に密接の關係あるもののみを書かれたもの。</p>	<p>隠し藝のある人は藝者にはもて夫人令嬢から愛され目上の人から引立ちらる本書は諸藝中の粹中の粹を集めた紳士粹人諸君の必携書獨り稽古活用自在座席や宴會に決して恥をかかず事なく人を驚し羨ませる。</p>	<p>本書は世界的大魔術奇術等數千の内面白くて誰にも出来るものを選び詳述せるもので青年會、學藝會、同窓會の餘興其備宴會の席上満座の人のドキモを抜きアット云はして見給え何と愉快ぢやないか。</p>
<p>特 價 料 .50 特 送 料 .04</p>	<p>特 價 料 .50 特 送 料 .04</p>	<p>特 價 料 .65 特 送 料 .06</p>	<p>特 價 料 .50 特 送 料 .06</p>

終

